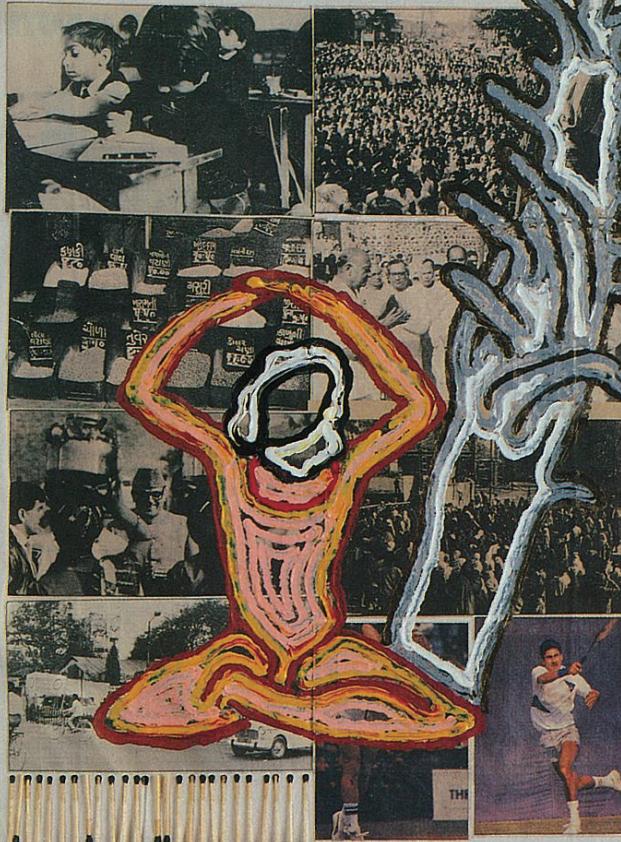


日印文化



創立 33 周年記念研究論集

KANSAI JAPAN-INDIA CULTURAL SOCIETY

कान्साई जापान-भारत सांस्कृतिक संघ

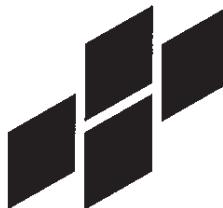
關西日印文化協會

あなたに近く、世界に近い。



さくら銀行

阪神銀行



いつも、ニューウエイブ。

時代の波を敏感にキャッチし、
しなやかな柔軟性をもって対応する。
そして、高品位なサービスを提供し、地域とともに成長する。
今後、私たちが目指す方向です。
いつも、ニューウエイブ。

HANSHIN BANK

安田火災海上保険株式会社

兵庫本部

郵便番号 650
神戸市中央区栄町通3-3-17
電話 (078)333-2571



楽しいお買物は
三ノ宮(そごう)へ

贈る気持ちが広がります。
そごうの**商品券**
ギフトカード

北海道から九州まで、全国の(そごう)でご利用いただける商品券・ギフトカードが、さらに便利になりました。香港・シンガポールの海外店でもお使いいただけます。お買物の範囲が、いちだんと広がった(そごう)の商品券・ギフトカードを、ご贈答にどうぞ。



SOGO
SANRIMAYA KORE
全館お買物OK
(小売専用)



ごあいさつ

関西日印文化協会会長

桑原泰業

日本文化の原点はインドとされます。インドは、仏教文化を通じて日本と因縁の浅からぬ関係にありましたが、現在でも両国の関係は政治的にも経済的にも極めて密接であります。

1957年に故ネルー首相が来日され、日印間で文化協定が締結されたのを記念して、1958年4月にインド政府公認の団体として、「関西日印文化協会」が設立され、爾来33年が経過しました。協会設立の目的は、文化交流を通じて両国の相互理解と友好親善を深めることにあります。

主な行事としては、毎月例会を開き、インドの宗教・芸術・美術・歴史・経済など、文化についての研究会、インド舞踊・音楽などの鑑賞、インド料理の賞味あるいは文化交歓会など盛り沢山な行事を行なって参りました。このほか、インド政府からの文化使節の受け入れや、インドを知るための旅行団・文化使節の編成なども行なって参りました。その他、機関誌「日印文化」の発行によって、インド文化の紹介・普及および研究支援にも努力して参りました。

その間特に印象に残る行事として、1984年1月には「神戸・インド週間」を、1988年4月には当協会が中心となって、神戸でも『フェスティバル・インディア』を開催し、大成功を収めたことは記憶に新しいところであります。

また、当協会に対して神戸市長から「神戸国際交流賞」を、会長個人に対して兵庫県知事から「兵庫県功労者」としての表彰を受けるなどの数多くの名誉にも輝いて参りました。

このたびは、インド文化に対する知的的理解を深め、インド研究を促進するための研究論集『日印文化』を発行する運びになりましたことは慶びにたえません。なお、雑誌編集については、松蔭女子学院大学学長の黒沢一晃先生、表紙については画家の横尾忠則先生の絶大なるご協力をいただきました。また、インド研究の碩学・中村元先生からはご懇篤なるご祝辞を頂戴いたしました。ここに深く感謝の意を表したいと存じます。

最後に、皆さま方の今後のいっそうのご協力、ご鞭撻の程を心からお願い申しあげる次第でございます。

Words of Greeting

By Yasunari Kuwahara
(President of Kansai Japan-India Cultural Society)

It can be said that the starting point of Japanese culture is found in India. The relationship between the two countries is characterized by the historical connection through Buddhistic culture as well as today's close political and economic ties.

Thirty-three years have passed since the Kansai Japan-India Cultural Society was established (officially recognized by the Indian Government in 1958) in commemoration of the conclusion of the Indo-Japanese Cultural Agreement at the time of the visit of the late Prime Minister Nehru. The Purpose of establishing the Society was to deepen the friendly ties and mutual understanding between the two countries. Since then, the Society has regularly held monthly meetings and various study get-together on Indian religion, arts, history as well as economy. It has also organized lots of cultural events like gatherings for enjoying Indian dance, music, foods etc. It has naturally received all sorts of cultural missions dispatched by the Government of India and contributed to the formation of Discover-India travel groups and cultural missions from Japan. Moreover, it has made efforts in assisting those people who wish to introduce, disseminate or study Indian culture. One of the most impressive events was the "Kobe India Week" in January 1984. The great success of the "Festival of India" held in Kobe in 1988 under the co-auspices of the Society is fresh in everyone's memory.

It is nothing but the result of these efforts that the Society has been accorded honour on various occasions: The Mayor of Kobe City bestowed the "Kobe International Exchange Award" on the Society. The Governor of Hyogo Prefecture awarded the "Award of Merit of the Prefecture" to the President of the Society in his private capacity.

It is my greatest pleasure to announce that the "Japan-India Culture", the collection of theses written by the distinguished members of the Society has now been published in an attempt to cultivate a better understanding of Indian Culture and to promote India Study in this country.

In conclusion, I would like to solicit the reader's everlasting co-operation and encouragement to the Society.



ごあいさつ

中 村 元

(東京大学名誉教授・東方学院院長)

関西日印文化協会は昭和三十三年の創立以来めざましい活動をつづけて来られましたが、このたび本年四月を以て創立三十三年の記念式典を開かれることになりました、まことに御同慶の至りに存じます。

世の中では特に何年を以て祝うというきまりはないわけですが、われわれ日本人にとっては観音さまは三十三身を現じて人々を救いたまうと言われ、観世音菩薩の靈場は三十三所として諸方で尊崇されています。その起源をさらに遡りますと、インド最古の聖典（いなインドヨーロッパ民族の最古の詩集）である『リグ・ヴェーダ』では、上方の天に三十三柱の神々がましますと信ぜられ、それが仏教にとり入れられ、三十三天（忉利天）として拝まれています。

関西日印文化協会は、会長桑原泰業氏のご指導のもとに会員諸氏が心を合わせて全面的に協力され、その輝かしい活動のあとを示されたことに、われわれは深く景仰・感嘆いたしておりますが、今後ますます御発展あられ、世の文運に寄与されむことを期待して、お祝いのことばとさせて頂きます。



インドの政治・経済 ——危機の1991年——

黒沢一晃
(松蔭女子学院大学学長)

I. はじめに

1991年5月21日、インド国民会議派総裁・元首相ラジーヴ・ガンディー氏が選挙遊説中に南インドのマドラス市郊外西南50キロにあるシリペルムブドゥルにおいて殺害された。犯人は爆弾を抱えた若い女性であったが、彼女についてはタミル・ナードゥ州の過激派組織「タミル・イーラム解放のトラ」との結びつきが云々されている。

何故、1984年の母親インディラ・ガンディー女史の暗殺につづいてその息子であるラジーヴ・ガンディーまでが暗殺されねばならなかったか？ しかも彼は、インド独立の大立者ジャワハルラール・ネルーの孫にあたる人物ではないか！

ここにこそインド政治の謎を解く鍵がある。ここに独立後45年を経ようとして今日なお混迷状態にあるインド政治の病根がひそんでいると言うのは、言い過ぎであろうか？

インドは1947年8月15日、実質200年にわたるイギリスの植民地支配から脱してその独立を達成した。独立にいたる道は、ながく峻しいものであった。独立に際しては、経済的には有機的統合体の一部というべきパキスタンとの分離を余儀なくされ、翌年1948年1月31日には、独立の精神的支柱の一つであったマハトマ・ガンディーが狂信的なヒンドゥー教徒の過激分子によって暗殺されている。

〔国是〕独立以来インドは、民主主義の実現と国民的統合をその国是として推進してきた。そしてインドが曲がりなりにも議会民主主義を守り、政教分離や言論の自由、文民統治を守ってきたということは否定できない事実である。ところが、周知のようにインドには、これを妨げるような異質な分裂要因が数多く存在する。それらは、そのいずれをとっても国民的統合にとってはマイナスの要因である。しかし、見方を変えれば、インド亜大陸はその歴史においても文化においても、決して一つの国ではなかったのではないか。そのようなところに一つの統一国家を建設すること自体が大きなチャレンジというべきではないのか？ 面積にして320万㎢、これだけの広大な土地に、宗教・カースト・言語・人種を異にする8億5000万人の人口が入り混じって生活しているのである。この度の旧ソ連邦崩壊の事情を思い浮かべるだけでも、インドにおける国民的統合ということが如何に至難の事業であるかが想像できよう。

II. 1991年年央の政治情勢

インドの第10次下院選挙は1991年5月20日に始まった。前回の総選挙から僅かに1年半、V.P.シン内閣、チャンドラ・シェーカール内閣という2つの政権が挫折したあととの選挙であった。そしてこれは、会議派(I)、インド人民党(BJP)、およびジャナタ・ダルを中心とする国民戦線・左翼戦線の三勢力によって争われた選挙であった。ちなみに、過激派の活動で混乱を極めているジャンム・カシミール州の選挙は中止され、治安の面で問題のあったパンジャーブ州とアッサム州の選挙については投票日を別にするという变則的な選挙でもあった。

今回の選挙は、暴力事件や殺人事件が多発したことでも特徴的であり、インドの政治社会情勢は、ちょうど非常事態宣言に先立つ1970年代前半の情勢にも似た混乱状態を呈していた。

また今回の選挙では、数々の政治的疑惑のかどで詰め腹を切らされたかたちのラジーヴ政権の後を継いだ2つのジャナタ・ダル政権の崩壊のあと、会議派(I)が政治的安定を、インド人民党(BJP)がヒンドゥー・ナショナリズムの擁護を、そしてジャナタ・ダルが後進階級の利益擁護を打ち出し、焦点のはっきりした選挙であったとも云えよう。

しかしながら、国民会議派については、金権との結びつきという暗いイメージがあった。ジャナタ・ダルについては、後進階級の過保護というマイナスのイメージがあった。そしてインド人民党(BJP)については、後述のように、ラーマ寺院問題などで見られるように、あまりにもイスラムとの対立を煽りすぎるという心配があった。

結果は、過半数を制することは出来なかったが、国民会議派が第一党となり、ナラシムハ・ラオ政権が成立した。インド人民党(BJP)は119議席を獲得して大躍進を遂げ、下院第二党となった。他方、国民戦線の中心であったジャナタ・ダルは大幅に議席数を減らすこととなった。

独立以来インドの政治は、国民会議派の一党優位の政治が続いていた。ところが、1975年の非常事態宣言以後はその優位も揺らぎ、何かと不協和音が聞かれるようになっていたことは事実である。たしかにこれまでの選挙でも毎回大きな争点があった。1977年の選挙が非常事態宣言の功罪を問う白熱の選挙であり⁽¹⁾、1980年の選挙が国民会議派政権のあとを襲ったジャナタ党政権の無策とインディラ・ガンディーの復帰、1984年のそれがインディラ・ガンディー暗殺の弔い合戦、1989年のそれは国民会議派政権の腐敗に対する民衆の審判の意味を含んでいた。しかし、今回のインド人民党(BJP)のヒ

ンドゥー至上主義の煽り方はこれまた異常というべきものであったのではなかろうか？

そして今回の選挙は、インド人民党(BJP)の巧妙な戦略によって、ヒンドゥー対モスレムというインドのアキレス腱ともいるべき大問題が、あからさまに民衆の前に持ち出されたのであった。

(アヨーディヤのラーム寺院再建問題)

国民戦線とインド人民党(BJP)との対立は、後進階層に対する新留保政策(マンダル委員会報告)の実施発表によって急速に燃え上がった。ジャナタ・ダルの下位カースト優遇政策に反発を感じていたインド人民党(BJP)は、何としてもヒンドゥー教徒の支持をつなぎとめておく必要があった。これとうまく結びついたのが、アヨーディヤにあるモスクを破壊してそこヒンドゥー寺院を建立しようという、ヒンドゥー保守グループの動きであった。

この再建運動の先頭に立ったのが、インドのインド人民党(BJP)と深い関係にある「世界ヒンドゥー協会(Vishwa Hindu Parishad, VHP)」である。彼らの唱導する信徒の奉仕活動(Kar seva)による工事の再開に対する期待、その余波を恐れるモスレムの不安が急速に高まってきた。ちょうどそのような時に、インド人民党(BJP)のアドヴァニ総裁は、世論喚起のために1990年10月30日と設定されていた工事再開にあわせて、9月25日を期してグジャラート州のソムナート寺院からアヨーディヤまで1万キロの行進を行うというである。アドヴァニを先頭にトラックの上にラームの玉座をおいた山車(Rath)を先頭にアヨーディヤまで信徒の行進(Rath Yatra)を行ない、ラーム寺院再建のムードを盛り上げようとするものであった。もちろん、V.P.シン政権としては、イスラムとの不和を煽るこのような運動を容認することは出来ないというわけで、いろいろの手立てを尽くすのであるが、遂に妥協の余地なく、インド人民党(BJP)のアドヴァニ総裁が、アヨーディヤへの行進の途上逮捕されるに及び、インド人民党(BJP)は直ちにV.P.シン政権支持を撤回する。そして、V.P.シン内閣は11月7日に下院で不信任を受け辞任することとなる。

この時インドには、単独で過半数を制する政党はなかった。ヴェンカタラーマン大統領の打診をうけた各党・各会派の反応は微妙であった。会議派は、自ら組閣する意志はないが、閣外からチャンドラ・シェーカールの組閣する内閣を支持する意向のあることを示し、インド人民党(BJP)は直ちに中間選挙を実施すべきであると主張した。続いて打診を受けた諸左派はとても組閣の出来る状況にはなかった。

ただ、この時の会議派の回答は実に鶴(つる)的であった。「相互信頼にもとづくその都度の実行協定で、納得の出来るものについてのみチャンドラ・シェーカール政権を支持する」というものであった。

従って、このようななかたちで成立したチャンドラ・シェーカール政権の基盤が実に脆いものであったことは明白である。と云うよりも、生殺与奪の切札をラジーヴ・ガンディーの国民会議派に握られていたわけである。それは、その後の会議派の、チャンドラ・シェーカール内閣に対する対応に如実に示されている。

インドの政治は、問題そのものよりも単にシンボルを、政策論争そのものよりもそれをめぐるスローガンを問題としているように思えるとは、ガンディー暗殺に先立つ僅か3週間前に、危機的状況にあるインド政治・経済の特集を行なった英エコノミスト誌のことばである。(2) 政治の駆け引きはあっても哲学がないということであろうか？

ちなみに、同誌によれば、インドの悲惨の最大のものは経済運営の失敗であり、もしインドが経済の建て直しに成功するならば、他の諸困難の多くはたちどころにその比重を減じ、少なくともそれらの問題は御しやすくなるであろう、またインドの政治的安定と人間的進歩が経済運営の成否にかかっていると述べているが、私はその逆に、政治的貧困が経済運営を含みすべての発展を阻害していると見るのである。

〔インドにおける政治の系譜〕

国民会議派と全インド回教徒連盟の成立——この度の選挙戦たけなわのころ、しきりに「ネルー王朝」ということばが使われたが、まさにインドの政治は良きにつけ悪しきにつけ、ネルー一家を抜きにして語ることができない。ラジーヴ・ガンディーやインディラ・ガンディーの属した「国民会議派 (the National Congress)」は現在ではインド最大の政党となっているが、実はもともとは支配者であるイギリス人に善政を求めるために招集された全国的 (national) な会議 (congress) に端を発している。1885年の12月に第1回の国民会議が招集されているが、参考者の数わずか72名、採り上げられた内容も穏当なもので決してイギリスに叛旗をひるがえすというようなものではなかった。しかも第1回目の会議の議長はクリスチャンのインド人、第2回目がバーシー族、第3回目がモスレム、第4回目はイギリス人というように、決して一つの人種、一つの宗教を代表する団体ではなかった。ところが、この会議がだんだんと会合を重ねるごとに気勢を上げ、要求がましいことを云うようになるに従って、当時のイギリス当局者は疑心暗鬼におちいり、イ

ンド人官僚の国民会議への参加を禁止するようになった。それでもその運動は当初はまだまだ穏やかで、一つの決議をしてはそれを陳情するといつてはいた穏当な団体にすぎなかつたのが、毎年会議を開くうちに恒常的な団体となり、次第にそれが政党的な性格を帯びるようになり、ベンガル分割問題に絡んで1906年あたりから反英独立の立場を明らかにし、遂には独立運動の担い手となったという事実がある。ところが、この国民会議派が次第に強力になるにしたがって、不安の念をおぼえたイギリス当局は、これに対抗する勢力として「全印度回教徒連盟（All-India Moslem League）」の結成を促している。そして、独立に際してインドは、インドとパキスタンという2つの国に分かれて独立するということになる。その国民会議派の中に、故ジャワハルラール・ネルーとその父モティラール・ネルー、その娘インディラ・ガンディー、その長男ラジーヴ・ガンディーが位置するわけで、ここに「ネルー王朝」といった言葉が出てくる所以がある。

〔不協和音の原点——ヒンドゥーとモスレムの対立、印・パ分離独立〕

しかし、インドの不協和音の第一は、ヒンドゥーとモスレムの対立に根ざした、インドとパキスタンの分離独立ということから出ていると言える。——実は、インドとパキスタンの国境線は、ロンドンにいた弁護士のラドクリフという人物が、インドの実状をまったく考慮せず、機械的にデスクの上で線引きしたものであり、その結果、不安心理から、インド側にいた回教徒のパキスタン側への、パキスタン側にいたヒンドゥー教徒のインド側への大移動が起こった。その時に各地で大虐殺が起き、公式発表だけでも50～60万人の人間が殺されている。⁽³⁾ ——ちなみに、パキスタンというのは、1930年にアラハバードで開かれた「回教徒連盟」の大会で、イクバルという詩人が、西北インドに回教徒の自治州を設けるべきであると提言したのであるが、彼のこの主張に刺激されたラマット・アリという人物が、1933年に、パンジャーブのP、アフガンのA、カシミールのK、シンドのS、バルチスタンのTANを合わせた PAKISTAN という案を発表したのが最初であった。ただ、この時には、東ベンガルは含まれていない。なお、当時の回教徒連盟の指導者であったジンナーは、「国民という言葉のいかなる定義に照らし合わせても回教徒は一つの国民である。従って、われわれ回教徒は、その故国を、その国土をもたなければならぬ」と主張したのである。結果的には、東西1000マイルも離れた地域に、回教徒の多いパキスタンという国家が誕生したのであるが、出来たときから非常に不自然な形であったわけで、二十数年後にはバングラデッシュの分離を見ることになる。

一方、インド側の立場としては、1946年から47年にかけてヒンドゥー教徒と回教徒の間に様々な衝突があって——1946年の8月16日のカルカッタの大虐殺など——遂に独立のわずか4か月ほど前になって、パキスタンとの分離独立も止むなしという結論に達したにすぎない。この時、「喉から手がでるほど欲しい独立ではあるが、独立に際してインドとパキスタンに分割されるくらいなら、独立を止めた方がよい」といったマハトマ・ガンディーの理想主義の立場に対し、「イギリスがその気になっているいま独立を勝ち取っておかなければ、いつ独立できるかわからない」といったネルーの現実主義に立つ主張のあったことを忘れてはなるまい。

- (1) K. ナイヤル著、黒沢一晃訳「インド政治の解剖」サイマル出版会。
- (2) THE ECONOMIST, MAY 4TH 1991号 インド特集。
- (3) ドミニク・ラピエール/ラリー・コリンズ著、杉辺利英訳「今夜、自由を」上下 早川書房。

III. 1991年年央の経済情勢。

〔社会主義型社会の建設〕

インドは独立以来、社会主義型社会 (Socialistic Pattern of Society) の建設を標榜してきたが、これは生産手段の社会化は行なわないが、その分配面において社会主義の理想を追求するというものであった。

雑駁な云い方ではあるが、いま仮に、私有財産制のもとに自由な経済運営を認めるのを資本主義的経済秩序と考え、私有財産制を否定しこれを社会化するのが社会主義的経済秩序と考えるならば、インドの社会主義型社会なるものは決して社会主義社会でも何でもない。一つの修正資本主義にすぎない。ただ資本主義の最悪のものと云える帝国主義段階にあったイギリスの植民地政策の犠牲となったインドとしては、独立したあと資本主義路線でやって行くとは口が裂けても言えなかったことである。その一方で、独立の担い手であった国民會議派の構成分子の25%が地主階層、25%が商業資本家、50%が知識層であったという立場上、社会主義で行こうと云えるはずもなかった。更にまた、ネルーがフェビアン的社会主义の影響を受けていたという事情もあって、資本主義路線に対してはかなり否定的であったことも事実であった。けっきょく私有財産制を否定する社会主義は採らないが、その理想を分配政策で実現しようということで、上記の「社会主義型社会」が新生インド建国の基本原理として定められ、合理性の追求の表れとして計画経済が採り上げられることになった。しかも当時、ロシアが恰好の手本を示してくれているように思え

たわけである。具体的には、1956年の産業政策決議のあと、少しずつ社会主義的諸政策が打ち出されるようになり、これにより全産業を3分類し、たとえば武器・弾薬の製造や原子力の開発、鉄道輸送、といった部門は最優先のパブリック・セクター（公共部門）として、政府がこれを専管し、膨大な財政資金を投入してこれを育成する。次にこれに準ずるものとして道路輸送とか観光事業などの重要産業が位置し、残りの部門が民間に委ねられることになる。従って、すでに存在していた民間部門のタタ財閥のもつ鉄鋼部門の増設などもってのはかということになる。⁽⁴⁾

〔諸5ヵ年計画の経緯〕

それでも、それまでに各方面で計画・推進されつつあった諸経済計画を集大成するかたちで1951年に開始された第1次5ヵ年計画は、かなり謙虚なものであり、食糧生産と発電の計画といわれたこの計画はモンスーンの好調にも恵まれて予想外の成果を挙げることとなった。そして当初は、詳細な計画は、インドに欠けていて何らかの事情のゆえに私企業にはあまり期待できないような極く少数の産業（とくに資本財産業）についてのみ試みられるべきであり、残りの産業は多かれ少なかれ、自由裁量の余地を与えるべきであると考えられていた。後に「統制資本主義」と云われるようになったインドの社会主义型社会建設の取組みは、第2次計画期までは提起されなかったものである。その後、隣国中国の華々しい成果に焦りを感じたのかも知れないが、第2次計画から次第に重工業化政策に傾斜するようになり、第3次計画終了時の1966年3月のインドは、計画をそのまま継続することすら出来ない状況に陥っていた。⁽⁵⁾ 3か年の計画休暇を経て1979年4月から始められた第4次5ヵ年計画は、当初の順調な推移にもかかわらず、その最終年次において世界を襲ったいわゆる石油ショックのためにあえなく挫折し、そのため第5次計画は何度も書換えを余儀なくされる始末であった。そして、本来1979年から開始される筈であった第6次計画も会議派政府の退場によって空中分解し、第7次計画もその後半の政治情勢の激変によって歯切れの悪い終り方となり、1990年4月より開始されるべき第8次計画も、1992年3月末日現在その帰趨が疑われている。

〔インド経済は特殊な経済か？——経済政策の失敗〕

以上のように見ると、インドの計画経済は、種々の外的要因による挫折が大きな原因となっている場合が多いが、経済計画自体としても問題がなかったかどうか、以下におい

てこれを簡単に見てみたいと思う。

その一つに、経済計画の与件とも言うべき経済土壤の問題がある。いずこも同じ、親方日の丸というか——インドの場合は親方チャルカというべきかも知れないが——公共部門企業の非能率には目を覆うべきものがある。それには次第に肥大化してきたインドの官僚機構の問題があるが、もう一つは、生産性の問題がある。ほとんどの公企業が赤字の連続で、とても他の企業に原資を供給するどころの話でない。市場利子率相当の利潤をも上げ得ないのがほとんどであるという状況が続いた。何度も何度も5ヵ年計画を進めるが、その成果ははかばかしくない。しかも、インドの経済はサンダルから人工衛星までと云われるよう、何から何までもインド国内で賄おうとするために、輸出には大いに助成金を出すけれども、輸入には高率の関税あるいは過酷な制限を課する。そのためインドの企業は完全に国際競争力を失っていたというのが実状であった。

〔輸入代替政策——輸入禁止的政策へ〕 遅れて世界市場に乗り出す後発国家にとって、幼稚産業の保護の必要なることは言を俟たないことである。その意味でインドが輸入に相当の制限を課したことはけだし当然と言えよう。また開発のための資本財の輸入のために、輸出による稼得がどうしても必要である。しかもインドには、相当長期にわたって食糧を輸入しなければならないという事情があった。また、インドの輸出品の多くはその価格彈力性の低い第一次産品であり、その性質上供給余力に限界もあった。そのためインドは何度かのルピーの平価切り下げにも拘わらず輸出額を大幅に伸ばすことができなかった。と云うのは、生活必需品などは仮にその価格が下がったからといって急にその需要の増えるものではないからである。そして次第に、インドでは世界でも最も複雑かつ過酷な輸入制限が課せられるようになっていた。そして輸入は、どうしても必要と認められるものしか認可されず、それも所轄官庁のケース・バイ・ケース的な判断によることが多かったと云われる。なお上記の英エコノミスト誌は、このような許・認可行政にまつわる汚職・腐敗の様子を以下のように詳しく伝えている。(6)

☆消費財の輸入は、医薬品といったごく少数の例外を除いて、原則禁止となっている。

☆資本財の輸入規制は、もう少し柔軟ではあったが、制限品目 (restricted items) と自動承認品目 (open general licensing items) とに分類されており、前者については、①その財の輸入が必要不可欠であるとの証明と、②その財が、国内事情面の考慮(indigenous angle clearance) すなわち、その財が、国内企業によっては適正期間内に供給されることが出来ないということの証明が必要であるとされ、①②いずれの場合にも国内企業

の生産物供給価格は問題とはならないというものであった。後者についても、輸入によって生産設備を増やすことがないという条件 (Domestic Capacity Licensing) が課せられていた。

☆中間財については、①禁止品目(banned) ②制限品目(restricted) ③制限付認可品目(limited permissible) ④自動承認品目(open general licence) の4つに分類されていた。また、消費財の輸入が禁止されていたため、消費財生産のための資本財は完全に国際競争から免れていた。インド経済はまさに温室のなかにおかれていたと云えよう。

(4) ルッシャー・M・ララ著、黒沢一晃/小沢俊麿訳「富を創り、富を生かす——インド・タタ財閥の歴史——」。サイマル出版会。

5) ちょうど第3次計画最終年の1965年にブーネのゴカーレ政治経済研究所に私を招聘して下さった故ガトギル博士は、計画の継続すら危ぶまれる状態にあったインドの計画経済を評して、農業国インドの実態を忘れ、重工業偏重に流れた第2次および第3次計画を厳しく批判し、インドの計画経済を研究に来たと云っている私に対して、計画経済の研究など止めて、滞印中に少しでも多くインドの農村の現実を見ておくよう助言されたことが思い出される。

(6) 1988年度の輸入は、①12% ②40% ③32% ④16%であったという。——上掲、英エコノミスト。なお同誌は、この国内事情面の考慮について自動車のタイヤを取り上げ、実に興味ある実例を挙げているが、それによると、タイヤは1978年以来ずっと自動承認リストに載せられていた。ところが、このような輸入の申請の出来るのは、現実のユーザー (Actual Users) に限られていた。ここに、この現実のユーザー (Actual Users) の解釈が問題となるが、実際にタイヤの輸入を願う可能性のあるトラック所有者やバス会社は、このActual Usersとは認定されない。現実のユーザーと見なされ得るのは、自動車やトラックのメーカーに限られ、これらのメーカーは、長期生産設備整備計画 (Phased Manufacturing Programme) なるものを提出しておらねばならず、現実問題としてインドのタイヤは、非能率なインド国産タイヤメーカーの独占するところとなっていた。

また例えば、石油・鉄鋼・ゴム・新聞用紙等々の輸入を規制する機関が16を数え、これらの輸入は世界最高の関税率のもとにおかれ、いずれも百分を超える関税が課せられていた。

〔経済政策の失敗〕

以上のように、独立以来インドは計画経済による国づくりを推進してきた。効率的な計画経済の推進のためには、かなりの程度の統制が必要である。そこでインドでは、慎重な貯蓄率の推計のもとにどの程度の公共投資が可能であるかを常に考えながら、これまで7つの経済5ヵ年計画を実施してきたわけである。

遅れて世界経済市場に乗り出す後発国家が、先進諸国の経済発展の歴史から教訓を得ることは当を得たことである。そしてインドの採った合目的路線の必然的帰結が、国家の一番必要としている産業分野への国家当局による介入であり助成であった。その際、生産活動に直接関係する産業部門と、たとえば道路・発電・通信といった、いわゆるインフラストラクチャーの整備のいずれを優先するか、直接生産活動にかかる部門の助成・育成といつても工業を優先するのかそれとも農業を優先するのかといった問題は、いずれも政治の問題であった。

たしかに、インドが食糧の自給に成功したことは大きな功績であったと言わねばなるまい。独立後およそ30年間にもわたり大量の穀類を輸入に仰がねばならなかったインドが、いまや食糧穀物の自給に成功し、十分な穀物の備蓄を有するようになり、先年のエチオピアの飢饉に際して援助輸出ができるようになっていたのも大きな朗報ではある。しかしながら、その際の農業生産振興策の一環としてとられた、と云うより、その最重点政策であった化学肥料増投政策は、農産物買入価格保証政策と相まって、農村の一部富農階級を極端に優遇することとなり、政府の政策によって恩恵を被る階層とそうでない階層とのあいだに大きな対立を生み出していた。その裏で貧農の過半を占める農民の必需物質たる（菜種・油菜・芥子菜種等の）油用種子の生産が軽視され、大量の輸入が必要であったということは農業政策の欠如というべきではなかったか？

経済計画の立案にあっては、如何なる哲学に立っているかが問われなければならない。インドでは、そのけなげな社会主義型社会建設というスローガンもも拘わらず、一般大衆の福祉・利害が尊重されていたであろうか？

貧困なる国は貧困であるが故に貧困である。なげなしの所得のほとんどを即時的な消費に費やすなければならないが故に、将来の経済建設のための投資——資本設備の拡充——のために割くことの出来る範囲が限られている。資本設備の不備のために生産力の不足に悩んだこともまた事実であった。ところが、供給力の不足を補うことが最大要件であった

インドにおいて、ある時期には需要の不足による生産の停滞があったこともまた事実である。ところで、このような需要の不足は何が原因なのであろうか？ これは国民大衆の購買力の不足の故に他ならない。これは取りも直さず、分配政策の失敗というべきではないのか？

〔民衆の貧困〕 上述のように、インドでは独立以来孜々として、経済建設が推進され、国民所得のかなりの部分を将来の経済建設のための基幹産業の育成のために投入されてきた。数次の5ヵ年計画の推進がそれである。ところが、不思議なことに、これと並行して、第5次5ヵ年計画の初め頃（1975年7月）より、いわゆる20項目計画なるものが実施されてきていた。その位置づけは如何であれ、いわば表向きの計画たる諸5ヵ年計画とともに、姿を変えた計画である20項目計画が何回か発表されていたのである。

この20項目計画は、1975～76年、1976～77年にかなりの実績をあげたのであるが、1980年1月にいたり再編成・再活性化され、新たに『改定20項目計画』として、第6次計画の主たる指導原理となってきた。

私は、この20項目計画を見ることによって、1980年代のインドの社会が何を必要とし、インドの一般大衆が何を求めていたかを知ることが出来ると考える者である。いわばこのような国民大衆のニーズに応えることの出来なかったことが、1990年代初頭におけるインド経済の行き詰まりの根底にあった遠因であると考えるのである。

以下に、一覧のかたちで『改定20項目計画』を紹介する。

〔改定20項目計画〕

1. 灌漑の潜在能力を高め、乾地農業のための技術水準ならびにインプットを開発し、これを一般農民に伝える。
2. 豆類ならびに油用種子の生産を増大させるための特別の努力を傾倒する。
3. 集約的農村開発計画ならびに全国農村雇用推進計画を強化し、これを拡大する。
4. 農地保有の上限規制を実行に移し、余剰土地の再分配を促進し、行政的・法的障碍を取り除くことによって土地台帳の完備を図る。
5. 農業労働者の最低賃金の見直しを行ない、これを実行に移す。
6. 隸従状態におかれている労働者の社会復帰を果たす。
7. 指定カーストならびに指定部族民の地位向上のための計画を加速化する。
8. 問題をかかえるすべての村落に飲料水の供給を行なう。
9. 住宅用地をもたない農村家族に対し住宅用地を提供し、住宅建設援助計画を拡充する。

10. スラムの環境改善に努め、経済的弱者階層の住宅建設計画を推進し、地価の不当な高騰を抑える。
11. 最大限度の電力開発を行ない、各州電力局の機能を改善し、すべての村落の電化に努める。
12. 植林事業を積極的に推進し、バイオガス（有機性発生ガス）あるいはこれに代わるエネルギー源を開発する。
13. 大衆運動として、自発的ベースにもとづく家族計画を推進する。
14. 単位保健所施設の数を増やし、瘧病・結核・盲目といった病気の抑制に努める。
15. 婦人ならびに児童に対する福祉の増進を図り、妊婦・子育て中の婦人や児童、とくに部族階級・山岳民族・後進地域の婦人ならびに児童の福祉の増進を図る。
16. とくに女子に重点をおいて6歳から14歳までの児童の教育に重点をおくとともに、学生あるいは有志グループを動員することによって成人非識字撲滅運動を展開する。
17. 更に多くの公定価格店を増設することによって公共販売組織を拡充する。その際、遠隔地には移動販売店であるとか、産業労働者向けあるいは学生寮向けの販売店であるとか、学生生徒のためのテキストあるいは文房具の優先販売店とかを数多く設置することによって、消費者保護を推進する。
18. 諸プロジェクトの迅速な完成を期すため投資手続きを簡素化し、諸産業政策を一元化する。
19. 密輸・物品の退蔵・脱税に対して峻厳な態度を探り、アングラマネーの取締りを強化する。
20. 能率・施設稼働率の改善ならびに国内資源の活用を推進することによって、公共企業の生産性の向上に努める。

IV. 政治と経済のはざまにて

1984年に登場したラジーヴ・ガンディーは、母親インディラ・ガンディーの始めた自由化政策を更に一層推進しようとするが、硬直した官僚機構がそう簡単には改善できるはずもなく、けっきょくは中途半端になって、インドの経済は完全に行きづまってしまっていた。人によっては、ラジーヴ・ガンディーの生半可な自由化政策によって、インドは起死回生の抜本政策を採るチャンスを逸したとさえ云う者もいるのである。しかもインドは、その貿易収支の赤字を貿易外収支の黒字で補ってきたが、1991年初頭の湾岸戦

争は、勃発時にアラブ地方全体で20万入いたと云われるインド入出稼ぎ労働者の海外からの送金を途絶えさせ、ただでさえ窮屈な外貨準備を枯渇させたと云われる。

すなわち、チャンドラ・シェーカール内閣崩壊直後のインド経済は、非常な危機に瀕していた。物価の上昇は年率12%に達し、外貨準備はわずか140億ルピーとなり、IMFからの18億ドルの緊急借款導入によってやっ急場を乗り切ることができたというのが実状であった。それもG.N.Pの8.6%にものぼった財政赤字を6.5%に引き下げるという条件つきであった——成功した模様——。

1991年6月、ナラシムハ・ラオ政権が成立し、マンモーハン・シンが大蔵大臣となった。そして7月早々には2回にわたって合計20%のルピーの切下げが行なわれた。また7月下旬には、思い切った大胆な新産業政策が発表されているが、その特色の一つは34の業種において51%までの資本参加が認められるようになったことである。

しかしながら、経済政策の成否は決してそのプログラムの良否によるものではない。政治との関わりにおいて、それがどれだけ真剣に推進されるかということにかかっている。その意味で、①今回の為替の切下げが、官僚統制の障壁を越えて輸出の増進につながり、どれほどの外貨獲得に結びつくか？ ②外資自由化政策がどれほどの直接投資をもたらすか？ ③財政赤字の主要原因である公企業の経営不振がどの程度改善されるか？ といった点が、今後のインド経済の成否を決める重大なポイントとなるであろう。

しかしながら、インドの経済危機は決して経済運営の失敗のみに帰せられるべきではない。そのような経済危機のなかにありながら、つねに政争に明け暮れた政治の貧困に帰せられるべきであるというのが、私の主張である。ただ、不信感されて野に下ったV.P.シン内閣が、1990年代においてそのような主張を行なっていたことをここに証言として紹介しておこう。すなわち、1990年6月に政権の座についたV.P.シン内閣は、ただちに第8次5ヵ年計画アプローチ文書を発表するのであるが、それは、当時のインドの民衆のおかれられた貧困状況を認識し、それまでの諸5ヵ年計画の無策——かけ声ばかりで内容の虚しさ——をハッキリと認識した、実に足の地に着いた堅実な政策であった。幻と化したその計画は、資金調達等については未だ不十分なところもあったが、その問題点の把握において的確であったということをここに証言しておきたいと思うのである。

経済政策はいったい誰のためのものなのか？ それがしっかりと認識されていない限り、喉元すぎれば何とやらという俗俚に見るごとく、インド経済の将来の発展はは望み薄ではないか？ というのが、私の率直なインド経済観である。

(黒沢 一晃(くろさわ かほる) 先生 略歴紹介)

松蔭女子学院大学学長（インド経済専攻）

1932年1月 神戸市に生まれる。

1953年3月 兵庫県立第一中学校・神戸経済大学予科を経て、神戸大学経済学部卒業。

1956年3月 神戸大学大学院経済学科修士課程卒業（経済学修士）

1964年～65年 ロンドン大学 School of Oriental and African Studies および
London School of Economics に留学。帰途、インドの Gokhale Institute
of Politics and Economics に招聘される。

1984年～92年松蔭女子学院大学学長。1992年4月、学長退任、教授職に復帰予定。

1989年3月外務省経済協力局の要請を受け、インドに赴き、わが国の対印経済協力についての評価調査を行なう。

主要著書

『インド経済概説』中央経済社。

主要訳書 マリ＝シモーヌ・ルヌー「インド亜大陸の経済」白水社

インド政府計画委員会「インドの第4次5か年計画」松蔭女子学院大学学術研究会

インド政府計画委員会「インドの第5次5か年計画」"

インド政府計画委員会「インドの第7次5か年計画」（共訳）、私家版。

クルディップ・ナイヤル「インド政治の解剖」サイマル出版会。

R. M. ララ「富を創り、富を生かす——インド・タタ財閥の物語り——」"（共訳）

S. チャクラヴァルティー「開発計画とインド——理論と現実——」世界思想社（共訳）

R. M. ララ「リーダーの条件」サイマル出版会——近刊——



インド諸言語中央研究所の 語学研修について

溝上富夫
(大阪外国语大学教授)

〔はじめに〕

インド憲法の第343条に「連邦の公用語(Official Language)はデーヴァ・ナーガリ一文字によるヒンディー語とする」と規定されており、これが俗に、インドの国語はヒンディー語であるといわれる根拠になっているのだが、インドの憲法にはどこを探しても、“National Language”という記述は見当たらない。厳密には、ヒンディー語は国語ではないわけである。しかし、同じ憲法の第351条では、ヒンディー語の普及と発展をはかることをインド連邦の義務としている。その目的は「インドの社会的文化のあらゆる要素の表現手段となり、その本質に干渉することなく、付則の第8条に定められたインドの他の諸言語に用いられている形態・文体・語句を受容しつつ、必要でのぞましい場合は、その(ヒンディー)語彙に、主としてサンスクリット語から、二次的に他の言語から語彙を受け入れつつ、それを豊かにしなければならない。」とある。

この条文で見るかぎり、ヒンディー語は実質的に、国語としての役割を担わされているとみても良い。しかし、すぐその後で、高等裁判所、最高裁判所の正式の用語は英語でなければならないと、英語の優位も述べられていて、これは憲法作成時に、いろいろな利害の対立があり、関係者の妥協の産物であったことを伺わせる。英語は、1965年以後、「補助言語」(Subsidiary Language)と位置づけられているが、実際は補助どころか、最重要言語として、インド諸言語の上に君臨しているのが実状である。

ところで、付則の第8条に定められた他の諸言語は次の14である。1981年の国勢調査による各言語の使用人口を括弧内に示す。但し、アッサム州のみが政情不安のため、この年は国勢調査が行なわれなかったので、アッサム語の使用人口は1971年のをあげる。

テルグ語 (54,226,227) ベンガル語 (51,503,085) マラーティー語 (49,624,847)
タミル語 (44,730,389) ウルドゥー語 (35,323,282) グジャラーティー語 (33,189,039)
カンナダ語 (26,887,837) マラーカーラム語 (49,624,847) オリヤー語 (22,882,053)
パンジャーブ語 (18,588,400) アッサム語 (8,958,977) カシュミール語 (3,174,684)
シンディー語 (1,946,278) サンスクリット語 (3,000)
(なお、ヒンディー語は、264,189,057 である。)

以上の16の言語がインドの「公用語」となっており、紙幣にはシンディー語を除く15

の言語の文字で印刷されている。また、英語、カシュミール語、シンディー語、サンスクリット語を除く言語はいずれも、いずれかの州の公用語となっており、ヒンディー語だけは、複数の州の公用語となっている。

これだけの公用語があれば、当然言語ナショナリズムが高揚して、言語間ひいては民族間の対立が起こりがちで、南インドとくにタミルナードゥ州における反ヒンディー語感情はよく知られている。しかし、言語間の交流・調和を図ろうという試みももちろんある。そうした活動の一環を、次のインド諸言語中央研究所の例によって紹介してみたい。

インド諸言語中央研究所 (Central Institute of Indian Languages, 以下 C I I L と記す) は、インド諸言語の研究と教育を目的として、1969年にカルナータカ州マイソール市に創立された、人材開発省直轄の機関である。わが国の東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所とは、1976年以来、協力関係にある。他に同種の国立研究機関としては、ウッタル・プラデーシュ州のアーグラー市にヒンディー語中央研究所 (Central Hindi Institute) が、アーンドラ・プラデーシュ州のハイデラバード市に英語及び外国语中央研究所 (Central Institute of English and Foreign Languages) がある。これらの研究所の所在地はいずれも地域のバランスを考慮して政治的に決められたものである。インドの16の公用語のうち、英語とヒンディー語とサンスクリット語を除く13の公用語と tribe (部族) と呼ばれる少数民族の言語が、C I I L の研究対象とする言語である。少数民族の言語の記述研究では、とくに定評がある。

しかし、C I I L はまた、教育機関としても重要で、1966年に Educational Commission が決めた、いわゆる「三言語方式 (Three-Language Formula)」——すべてのインド人に3つの言語を習得させようというもの。すなわち、初等・中等教育は地方語で行ない、州間のコミュニケーションの手段としてヒンディー語を必須とし、高等教育ならびに国際間のコミュニケーションの手段として英語を教えると説いた。これが現在でも、インド政府の基本的な言語政策となっている——にしたがって、1970年より、全国の中等学校の教師を対象に、上述の13の言語による語学研修を行なっている。多言語国家インドならではのこのプログラムの実態を、筆者が1991年の夏、シンディー語研究のためthane に滞在中実際に研修生として部分的に参加した体験を踏まえながら報告しよう。

C I I L は語学研修を行なうセンターとして、全国に6つの支部 (Regional Language Centre) を設けて、それぞれが担当する言語の種類を次のように定めている。

- 南部地区支部（Southern Regional Language Centre, マイソールの本部が兼ねる）
 カンナダ語, タミル語, テルグ語, マラヤーラム語
- 東部地区支部（Eastern Regional Language Centre, 所在地はオリッサ州ブバネシュワル市）
 アッサム語, ベンガル語, オリヤー語
- 西部地区支部（Western Regional Language Centre, 所在地はマハーラーシュトラ州プネー市）

インド憲法で定められた公用語の分布略図

(英語とサンスクリット語とシンディー語は
 地図上では示されない。)



グジャラーティー語、マラーティー語、シンディー語
北部地区支部 (Northern Regional Language Centre, 所在地はパンジャーブ州パティアーラー市)
カシュミール語、パンジャーブ語、ウルドゥー語
ウルドゥー語教育センター (Urdu Teaching and Research Centre, 所在地はヒマーチャル・プラデーシュ州ソーラン市と、ウッタル・プラデーシュ州ラクナウ市の2つ)

ウルドゥー語のみが3つのセンターで教えられているのは、受講生が多いからである。各言語につき、大学の講師と同資格の教官が2名いて、指導にあたる（但し、ウルドゥー語については、ソーランに4名、ラクナウに3名いて、ベンガル語も4名の講師がいる）。各センターには、大学の助教授と同待遇のセンター長 (Principal) がいて、管理やマイソールの本部との連絡に当たる。教官は研究者でもあるが、語学教育に圧倒的に多くの精力を費やすなければならないので、100パーセント研究職につこうと思えば、助教授に昇進してマイソール本部に勤務しなければならない。

各言語別の受講生の選抜・決定はすべて一元的にマイソールの本部で行なわれ、支部には決定権はない。研修期間は、毎年7月から翌年5月までの10ヶ月。募集要項は毎年1月に、全国の新聞約2500に掲載されるほか、各州政府の文部省を通じて、教育委員会、各中学校長にも伝えられる。志願者の年令制限は原則として35才までだが、志願者の少ない言語では40才まで認められる。4月に願書を締め切り、マイソール本部の選考委員会で受講生とその研修語学の種類を決める。出願者は願書に希望の語学を第1志望から第3志望まで書くことができる（もちろん、自分の母語を除く）。

1970年から1983年までの14年間にこの研修を終えた者の言語別・出身州別総数は次ページの通りである。

言語により、州により受講者数に大きな偏りがあることが分かる。人気語学のベスト5は、①ウルドゥー語 ②ベンガル語 ③アッサム語 ④タミル語 ⑤テルグ語だが、実際の各言語の使用人口の順位とは一致しない。また、受講生の多い（つまり、熱心な）州のベスト5は、①オリッサ州 ②アーンドラ・プラデーシュ州 ③ヒマーチャラ・プラデーシュ州 ④アッサム州 ⑤カルナータカ州である。オリッサ州が多いのは、同州が創立から1989年までC I I Lの所長をつとめた D. P. Pattanayak 氏の出身地であることと関係があるかもしれない。

研修修了者言語別・出身州別統計（1970～1983）

各州の別 言語の別	南部地区支部				東部地区支部		
	カンナ ダ語	タミル 語	テルグ 語	マラヤー ラム語	アッサ ム語	ベンガ ル語	オリヤ ー語
1. Andhra Pradesh	149	109	—	27	2	16	29
2. Assam	1	11	4	5	23	37	134
3. Andaman	1	2	—	1	—	—	—
4. Bihar	2	1	6	2	2	10	2
5. Chandigarh	1	3	—	—	—	—	—
6. Delhi	—	5	—	3	—	3	—
7. Goa	4	1	—	1	—	7	—
8. Gujarat	—	—	—	—	—	3	—
9. Himachal Pradesh	—	2	1	—	—	—	—
10. Haryana	—	—	73	—	—	—	—
11. Jammu & Kashmir	1	—	—	—	—	1	—
12. Karnataka	—	89	137	47	—	3	—
13. Kerala	57	48	5	—	—	44	—
14. Madhya Pradesh	10	25	10	14	3	31	16
15. Maharashtra	11	6	7	2	—	19	1
16. Manipur	—	—	—	—	—	20	—
17. Orissa	9	22	39	19	329	329	—
18. Pondichery	—	1	2	7	—	—	—
19. Punjab	—	1	—	—	—	—	—
20. Rajasthan	1	6	2	12	—	3	—
21. Tamil Nadu	14	—	25	49	—	2	1
22. Uttar Pradesh	4	4	3	5	1	12	1
23. West Bengal	1	2	—	2	7	2	10
24. Meghalaya	—	—	—	—	—	—	—
合計	266	338	314	196	367	542	194
	南部地区支部小計 1114				東部地区支部小計 1103		

西部地区支部			北部地区支部			ウルドゥー語 教育センター	小計
グジャラート ティー語	マラーティ イー語	シンディー ー語	カシュミ ール語	パンジャ ーブ語	ウルドゥ ー語		
7	28	7	36	18	10	—	438
22	31	4	11	14	25	—	322
—	1	—	—	—	—	—	5
1	—	—	2	6	5	3	42
—	—	—	—	—	—	1	5
1	4	—	6	—	1	1	24
10	3	—	—	—	1	—	27
3	16	1	—	—	1	—	24
—	—	—	—	—	42	349	394
—	—	—	—	—	—	—	73
—	1	—	9	30	13	—	55
3	16	1	2	3	4	—	305
—	2	—	3	1	2	—	162
51	58	17	22	16	14	6	293
117	10	46	3	13	12	—	247
—	—	—	—	—	4	—	24
24	21	7	67	20	19	—	905
—	—	—	—	—	1	—	11
—	—	2	47	—	160	—	210
24	7	1	1	3	7	18	85
1	4	—	2	—	3	—	101
8	10	5	3	3	2	96	157
—	1	—	—	2	1	—	28
—	—	—	—	—	1	—	1
272	213	91	214	129	328	474	総計
西部地区支部小計 576			北部地区小計 671			小計 474	3938

また、受講生は総じて、隣接の自分の言葉と近い関係にある言語を選ぶ傾向にあることが分かる。たとえば、アーンドラ・プラデーシュ州（テルグ語地域）出身者はカンナダ語やタミル語を選び、オリッサ州（オリヤー語地域）出身者はベンガル語やアッサム語を、マハーラーシュトラ州（マラーティー語地域）出身者はグジャラーティー語を、パンジャーブ州出身者はウルドゥー語を選ぶという風に、“National Integration”（国民統合）の推進という、このプログラムの目的からすれば、むしろ北インドの人が南インドの言葉を逆に南インドの人が北インドの言葉を学ぶ方が好ましいに違いないが、冒険を避けてイージーな道を選ぼうとするのは、どこでも変わらぬ人情なのかもしれない。ただ、ハリヤーナー州出身者 73 名の全員が南インドのテルグ語を選んだのは極めて不自然であり、調べてみると、同州において第2言語に、隣接のパンジャーブ語（シク教徒たちの母語）を採用させないためにテルグ語を採用したという、きわめて政治的な理由が明るみに出た。

1984年以降の受講者数の統計が得られないのは残念だが、1991年度の言語別受講者数は次のようにになっている。カンナダ語 21、タミル語 25、テルグ語 18、マラヤーラム語 17、アッサム語 24、オリヤー語 18、グジャラーティー語 19、マラーティー語 13、シンディー語 19、カシュミール語 10、パンジャーブ語 17、ウルドゥー語 71、合計 301 である。

筆者は、こうのうちブネーのセンターで研修を受けていた3つの言語の受講生にアンケート調査をしたが、それによると、まず平均年令は、マラーティー語が 31 才、シンディー語とグジャラーティー語は 30 才で、マラーティー語に 1 人女性がいただけで、他はすべて男性であった。

☆ 受講生を母語別に見ると次のようになる。

<グジャラーティー語>ヒンディー語 10、オリヤー語 6、マラーティー語 2、アッサム語 1

<マラーティー語>ヒンディー語 11、オリヤー語 2

<シンディー語>ヒンディー語 11、アッサム語 3、ベンガル語 3、オリヤー語 1、マラーティー語 1

☆ 志望の動機は次のようである。

<グジャラーティー語>グジャラートの人達とコミュニケーションがしたい 6、グジャラート文化に興味がある 3、マハトマ・ガンディーの母語である 3、好奇心 3、語学を教えたい 2、国民統合のため 1、オリヤー語に翻訳したい 1

<マラーティー語>マハーラーシュトラの文化に興味がある5, マハーラーシュトラの人達とコミュニケーションがしたい3, マラーティー文学に興味あり1, 国民統合1, 不明3

<シンディー語>好奇心5, シンディー人の隣人や友人とコミュニケーションがしたい2, シンドへ行きたい2, 言語問題2, 隣国の言葉だったら1, 第2志望だった1, アッサムの人の知らない言葉だから1, ベンガル語と語彙が似ていて易しそうだから1, 不明4。

シンディー語の志望動機が一番バラリエティーに富んでいた。なぜその言語を? という問に対しても得ない回答も含まれているが。

次に、それぞれの言葉の学習を始めて約3ヶ月たった時点で、どの点が学習上困難かという質問をしたが、その回答は次の通りである。

<グジャラーティー語>文法性9, 会話3, 性と数2, 繰りと発音1, 発音1, すべて難しい1, 全然難しくない1(発音や会話が難しいと指摘したのはオリヤー語話者に多かった)

<マラーティー語>全然難しくない5, 全般3, 文法性2, 性と数1, 不明2(困難点なしと答えたのは、全員がヒンディー語話者であった)

<シンディー語>発音9, 困難点なし4, 文法2, 文字と発音2, 文法性1, 性と文字1(シンディー語特有の入破音は半数以上の受講生が難しいと答えている)

こうして採用された受講生は、もちろん10ヶ月の有給休暇をそれぞれの学校からもらって、各センターにやって来るのだが、往復2等列車による旅費が支給されるほか、授業料の一部も負担してもらえる。さらに、研修旅行の費用も食費を除いて負担される。しかし、宿舎としてあてがわれる学生寮の設備は貧弱で、2~3人の相部屋で食事にも不満があり、学習意欲の減退にもつながっているという。10ヶ月の研修を終えて試験に受かると(60点が合格点)、修了証明書をもらって、勤務校にもどって、その言葉を教えることができる。その場合は、特別手当として月100ルピー(約500円)が支給される。

さて、研修の内容についての説明に移ろう。10ヶ月を14週間の初級(Basic Course), 13週間の中級(Intermediate Course), 13週間の上級(Advanced Course)に分け、初級では基礎文法の修得と会話に重点がおかれ、中級では文化の理解に重点がおかれ、上級

では文学書を読むことになっている。初級用のテキストは、各言語とも An Intensive Course in という、マイソールで編纂されたかなり分厚いテキストを使用している。これは、日常会話を中心とする文例からなる共通のモデルを基本として、個別言語ごとにその特徴を加味して書かれたものである。一番早く出版された An Intensive Course in Marathi は千ページを超える大冊である。An Intensive Course in Sindhi の例でいえば、12の単元(Unit)と72課からなる、882ページという分厚い本であるが、基本文例だけならさほどではなく、大部分はドリルと練習問題に割かれている。しかし、分量がたっぷりあるので、これをこなすには相当な時間と忍耐を要する。この本は、複雑な文法体系をもつシンディー語文法が会話を通じて自然に、しかも易から難へと系統的に学べるようになっていて、非常によくできている。各課の終りにある文法ノート、巻末の語彙リストも大いに役に立つ。インドの本の常で、誤植が多いのが欠点だが、デーヴァ・ナーガリ文字とシンディー文字（ペルシャ文字に改良を加えた52文字から成る）の両方で印刷されていて、実に重宝である。本家のパキスタンでも、シンディー語を第2言語とし

<学習時間割>

Period	Time	Monday & Tuesday	Wednesdays & Thursday	Friday
I.	10:50 ～11:50		Pattern Introduction	
II.	11:55 ～13:00		Pattern Drills	
	13:00 ～13:30		Tea Break	
III.	13:30 ～14:20		Conversation	Script Reading
IV.	14:20 ～15:10	Pattern Exercise	Picture Guided Narration Narration	Revision
V.	15:10 ～16:00		Language Laboratory	Weekly Tests
VI.	16:00 ～16:50	Scaript Reading	Script Script Reading Reading	

で学ぶ人のために、これほど親切に書かれた信頼すべき本は出版されていない（※パキスタンのシンド州ではシンディー語が唯一の公用語である）。ヒンディー語やウルドゥー語の素養のある者なら、かなりの程度まで、本書で独学が可能である。ほぼ1課を1日の割合で進む。初級の時間割は左の通りである。

この通りみっちりやればかなりのハードスケジュールだが、教官の席が一つ空席になっていて一人しかいない場合もあり、実際は、午前中90分、午後90分、計3時間ぐらいしかやっていないこともある。L.S.も使っていないことが多い。大体、午前中は教科書中心の授業で、午後はオーラル練習が中心だった。ある教官にいわせると、受講生の忍耐力は1日3時間が限度で、それ以上はいくらやっても能率があがらないという。しかし、彼らはこの期間、語学ばかりをやればいいのであり、しかもさほどの予習・復習を求められないという事情のもとでは、1日3時間というのは、いかにも少なすぎると私には思えた。しかし、同情すべき理由もある。それは、センターが独立の建物をもたず、カレッジの間借りをしているためもあって、研修会場に使用される教室は、古い学生食堂に仕切りを設けただけの狭い汚いものであり、屋根は大雨の影響で受講生の頭上に落下寸前のまま放置されている、というひどい状況だということである。

中級・上級のテキストは教官がその都度、ガリ版刷りのプリントを渡している。つまり、予習は求められないわけである。この点が、わが国や欧米の語学教育と全く違う点であり、効率を高めるには予習は絶対必要ではないかと教官に問うてみたところ、面白いことに、「文字言語に頼るより、耳から聞いて理解する能力の方が彼らは優れている」という返事だった。文学作品といえども、辞書を引いて訳してくるよりも、当日教官が音読して聞かせた方がよく分かるというのである。全く、一般の日本人には解せないことである。このような経験は、私自身もした。週末の筆記試験では、私は誰にも負けなかったが、シンディー語の映画を見て理解する能力では、完全に彼らに脱帽であった。おそらく、彼らの「血」の中に、学習しなくとも、文字言語に頼らなくても、話し言葉を聞いただけでかなりの程度理解できる能力が備わっているのであろう。それを文化というのであろう。

しかし、彼らの学力差も著しい。毎週テストがあり、50点満点で、20点から48点ぐらいまでの分布がある。総じて、地理的にシンド地方（パキスタン）から遠ざかるほどシンディー語を難しく感じており、アッサム人、ベンガル人、オリッサ人とも、彼らの母語には、文法的性も、能格表現もない。動詞の変化もシンディー語に比べるとはるかに簡単であり、発音も〔s〕が〔ʃ〕、〔θ〕が〔tʃ〕となるので、困難さはひとしおで

ある。授業そのものを、はじめのうちはヒンディー語で行なうので、ヒンディー語そのものが余りできない彼らには二重苦である。ヒンディー語地域出身者は、言語の親近性のため、他の母語集団より有利で、さすがに試験の成績も比較的よかった。しかし、類似性ゆえにかえって混乱を起こすことがあり（たとえば、a # はヒンディー語では男性単数のマーカーだが、シンディー語では男性複数マーカーである），ヒンディー語と同じ構造をもつシンディー語の能格表現の理解に手こずっていたのは、全く不思議であった。シンディー語は難しくないという、地元プネー出身者（母語はマラーティー語）は、母音の長短表記をつねに間違えていた。総じていえることは、われわれ日本人は外国語を文法で覚えるのに対して、インド人は異言語（外国語とは云えないでこう云おう）を体で覚えようとする、という違いがある。いずれも一長一短であるが。

教官にとっては、受講生の語学への適応性だけでなく、環境への適応性も悩みで、最初の1ヶ月は慣れるのにかかり、授業にはならないと告白する教官がいた。日頃、黒板を背にして生徒を教える立場にある者が急に生徒にもどった戸惑いを隠せない者もいるという。インドでは、日本の学校のように、教師の研修といったことが日常化されていないのだ。また、平均年令30才といえば、大半はすでに既婚者で、故郷に妻子を残しての「単身赴任」である。そこから来る精神的緊張は相当なものらしく、そのために勉強が手につかない者も多いとか。30才の教育者にしては、精神的な未熟さだというのは易しい。しかし、やはり次の点は斟酌されなければならない。つまり、インドは日本とは全く異なり、heterogeneousな社会であり、出身者の州を去って他州に行くというのは、地方の田舎からはじめて東京へ出て来るのとは全くレベルの違う「カルチャー・ショック」を伴うということである。まさに、「異国」なのである。インド全国におそらく何十万といいる中等学校教師のうち、このプログラムにわずか300名ほどの応募者しかいないのはなぜか、という疑問に対する答えのひとつは、このことで説明がつくと思う。

授業中、受講生の不出来を嘆いていた教官も、しかし長期的には楽観的である。中級コースの終りから上級コースの間に設けられた2週間の研修旅行（各言語の話されている地域を実際に訪れて住民との交流を通じて、言葉の実践力を養う）は、この研修の目玉だという。そして、10ヶ月の研修が終わる頃には、7～8割の受講生が、難しいシンディー語が話せるようになり、なかにはシンディー文学を自分の母語に翻訳する者も出るという。グジャラーティー語やマラニティー語の場合は、すでに学習開始3ヶ月で会話に不自由しない者がいた。

全国に散らばる、この研修の修了生のアフターケアの問題等、この語学研修制度の問題点が多い。しかし、近く語学教育にコンピューターを導入しようとしており、インド政府もそれなりに力を入れ始めている。わが国も、このような形で、政府機関で、沖縄語やアイヌ語の研修が行なわれれば、すばらしいのだが。

〔溝上 富夫(みぞかみ とみお)先生 略歴紹介〕

大阪外国語大学教授（現代インド・アーリアン比較言語学）

1941年5月 神戸市に生まれる。

1965年3月 兵庫県立兵庫高等学校を経て、大阪外国語大学インド語学科卒業。

1968年4月以来 大阪外国語大学勤務。

1976年4月 インド国立デリー大学文学部より、マスター・オブ・アーツ取得。

1983年4月 同大学より、Ph.D. 取得。

主要著書 『実用パンジャーブ語会話集』 大学書林 1986年。

Language Contact in Panjab--- A Sociolinguistic Study of Migrants'

Language ---Bahri Publications Pvt.Ltd., New Delhi 1987年。

『文化紹介 ベンガル語中級会話集』（共著）大学書林 1989年。

分担執筆「多言語社会の文化諸相」世界思想社（近藤 治 編「インド世界」所収）1984年。

「パンジャーブ語」「ラーンダー語」大修館（「言語学大辞典」所収）1992年。

主要論文 'Japani se hindi men anuvad ki samasyaen' Videshi Bhashaon se Hindi men Anuvad ki Samasyaen Delhi, 1987年。

「ベンガル語とヒンディー語の諺の比較」「東南アジア及び南アジア諸国における諺・格言の用法に関する比較研究」 大阪外国語大学 1988年。

「カシュミール語の文法構造」「アジア アフリカ文法研究17」 東京外国语大学 1989年。

主要訳書 W.Owen Cole, Piara Singh Sambhi 「シク教——教義と歴史」筑摩書房 1986年。



ガンディーとタゴール —第一次世界大戦勃発をめぐって

森本達雄
(名城大学教授)

はじめに

ガンディーとタゴール——悠久の歳月を誇るインド史の流れのなかでもとりわけ苦汁にみちた、そしてそれゆえに国民がひときわ明日への希望にかがやいた今世紀前半のインド史を象徴するのが、これら二人の名前である。しかし、現実に二人の辱知をえた人は、異口同音に、その人格と思想において、これほど互いに相違した二つの個性はなかったと証言する。たとえば、実践面ではガンディーに最も近く、精神面ではタゴールから最も多く影響を受けたと告白するジャワハルラール・ネルーは、名著『インドの発見』にこのように書いている――

タゴールとガンディーとは疑いもなく、この二十世紀前半における、インドの傑出した二大人物であった。これら二人を比較し、対照することは、教えられるところが多い。その性格や気質において、互いにこれほど違った二人の人物はありえないだろう。タゴールは貴族的な芸術家であり、のちにプロレタリアに同情をよせる民主主義者になったが、本質的には、インドの文化的伝統を、言いかえると、生を全面的に受容し、歌や舞踊をもって生きてゆくという伝統を代表していた。いっぽうインドの農民の権化ともいうべきガンディーは、インドの古代からのもう一つの伝統、すなわち自己放棄と禁欲主義を代表していた。しかも、タゴールはなによりもまず思想の人であったし、ガンディーは一徹な、やむことのない行動の人であった。

たしかに一見この二人は、その風貌、天性、気質、宗教観、文明觀、そして日常の生活様式にいたるまで、すべての面で両者の生地（タゴールはインド亜大陸の東端のカルカッタ、ガンディーは西端のポールバンダルに生まれた）の隔たりほどに遠くかけ離れていた。それでいて、それぞれの思想の系譜をたどるとき、二人ともにまがいなきインドの伝統精神の後継者であった。すなわち、タゴールは「ウパニシャッド」の、ガンディーは「バガヴァッド・ギーター」の精神を、現代に具現した「百パーセント、インドの息子たち」（ネルー）であった。ガンディーの祖国と人間解放に捧げた生涯は、禁欲と自己犠牲によって解脱を求める「カルマ・ヨーガ」の実践者のそれであり、タゴールの人間愛の文学は、人生と自然への信愛によって解脱を求める「バクティ・ヨーガ」の表出であった。しかもそれら二つの道は、同じ目標に至る異なる道であり、言わば、一

枚の銅貨のように表裏一体をなしていた。ネルーは言葉をついで言う——「両者ともに、それぞれの流儀で世界觀をもっていたが、同時に両者ともに全面的にインド人であった。彼らはインドの、異なってはいるが調和的な面を代表し、互いに他を補い合っているようと思われた」と。

本稿は、筆者が十年来書きつづけている『ガンディーとタゴール』(講談社近刊)の一章であるが、ここに扱った第一次世界大戦勃発時は、ガンディーとタゴールがそれぞれ南アフリカとインド(シャーンティニケタン)にあって、共通のイギリス人の友C・F・アンドルーズをとおして、まだ見ぬ友への尊敬と友情をあたためていた時期であり、互いの個性の相違がいっそう鮮明にうかがえる。

*

1914年6月、「インド人救済法」の成立によって、二十年にわたる南アフリカでの鬭争にいちおうの決着をみたガンディーは、同年7月18日に「喜びと悲しみのこもごもに入り混じった感情をいだきながら」「後髪をひかれる思いで南アフリカの岸を離れた」。そのときの複雑な気持ちを、ガンディー自身このように説明している——「喜びと言ったのは、わたしにとって、それが長い歳月の後の帰国であり、ゴーカレの指導のもとで祖国のために奉仕したいと熱望していたからである。また悲しみと言ったのは、南アフリカを離れることは、わたしにとってひじょうに辛いことだったからである。それというのも、南アフリカは、人間としての経験の甘さや苦さを存分に味わいながら、わたしが人生の二十一年を過ごしたところであり、また生涯の使命に気付いたところであったからである。」

ガンディーはいっときも早くインドに帰って、「祖国のために奉仕したいと熱望していた」が、たまたまそのころ在欧中の「政治上の師」ゴーカレの招きに応じて、これから的是での活動に助言を仰ぐべく、イギリス経由で帰国することにした。同伴者は、妻カストゥルバーイと、サティヤーグラハ(真理把持)運動の熱心な協力者で、渡印を希望していたドイツ人の建築家、ヘルマン・カレンバッハの二人であった。船旅の途上に伝えられる次のエピソードは、いかにもガンディーその人の人柄を彷彿させて興味深い。

ある日ガンディーは、カレンバッハが高価な双眼鏡を二台も所持していることを知った。友人がことのほか双眼鏡を愛好していることはわかっていたが、かねて二人はいっさい

の不必要的贅沢を排して、慎ましい無所有の生活をおくることを誓い合っていた。そこでガンディーは、「そのような代物を所有することは、われわれが志していた簡素の理想とは相容れないことを友人に印象づけよう」とつとめた。議論の途中でガンディーは言った——「いつまでも、双眼鏡ごときを論争の種にしておくくらいなら、いっそ海へでも捨ててしまってはどうでしょう。」

それから先を、カレンバッハはこのように回想している——「私にはとてもそうするだけの勇気はなかった。そこで私は、「どうにでもお好きなようにしてください」と言った。するとガンディーは、心になんらの痛みもけんもなく、さっさと双眼鏡を二台とも海のなかへ投げ込んでしまったのである。」

船が大西洋上のマディラ諸島にさしかかったあたりで、ヨーロッパが一触即発の戦争の危機に瀕しているとの噂が乗客たちのあいだでささやかれているのを聞いて、ガンディーは驚いた。噂にたがわず、7月28日に第一次世界大戦が勃発し、ロンドン到着二日前の8月4日にイギリス参戦の報が伝えられた。

こうして、ガンディーははるばるイギリスを訪れてきたものの、お目当てのゴーカレが病氣療養でフランスに出かけていたうえに、戦争の影響でロンドン＝パリ間の通信が途絶えていたために、やむなく戦時下のロンドンでゴーカレの帰りを待たなければならなかつた。そしてこの間も、行動の人、奉仕の人ガンディーは、いたずらに時を過ごすことはできなかつた。

彼は早速、インド人野戦衛生隊を組織することを当局に申し出て、イギリス在留の同胞に応募を呼びかけた。インド人のなかには、今こそ積年の願いであった自治要求を政府につきつけて、同胞の地位の向上をはかる絶好の機会であると主張する者も数多かつた。「イギリス人とインド人とではまるで違っています。インド人は奴隸であり、イギリス人は主人です。主人が危急にあるからといって、どうして奴隸が主人に協力しなければならないのでしょうか。主人の危急を好機にすることこそが、自由を求める奴隸の義務ではありませんか。」こう言って、彼らはガンディーの提唱に反論した。しかし「われわれインド人が完全に奴隸になりさがっているとは信じていなかった」ガンディーは、「イギリスの危急をわれわれの好機に変えるべきではない。そして戦争が続いているあいだは、われわれの要求をつきつけないほうがかえって妥当であり、将来を見とおすことである」と、同胞を説得した。

そんなとき、ガンディーの戦争参加の報を聞いた南アフリカの同志ヘンリー・ボラクが

同地のサティヤーグラヒ（サティヤーグラハの実践者たち）を代表して電報を寄こし、このたびの彼の行為は日頃のアヒンサー（非暴力）の宣言と矛盾しまいかと、問い合わせてきた。ガンディーはつねづね、アヒンサーの立場から戦争の罪悪について口をきわめ、戦争参加を犯罪として拒否してきたはずである。ポラクが驚き、疑義をただしたのは無理からぬことであった。それはガンディー自身にとっても「戦争への参加がけっしてアヒンサーと両立するものでないことは、火を見るより明らかであった。かといって、人間は自らの義務についていつも明らかであるとはかぎらない。真理の信奉者は、しばしば暗闇のなかを手さぐりで行かなければならぬという、苦悩の末の決断」であった。彼はなによりも愛のカルマ=ヨーギン（行為的実践者）であったのである。

そのころガンディーは、同じ疑問に答えて、身内の一人であり南アフリカ時代の協力者であったマガンラール・ガンディー宛ての書簡に、その動機を次のように詳しく説明している――

「あなたがたみんなは、どうしてわたしがことあろうに負傷兵の看護をひきうけたのか、知りたがっておられることでしょう。最近まで、南アフリカでわたしは、サティヤーグラヒとしてわたしたちがどのような方法でも戦争に協力してはならないと言っていました。こうした協力は、戦争を支持することになるからです。屠殺場で手伝いをしたくないという者は、肉屋の掃除の手伝いをもすべきではありません。しかし、私はイギリスで生活をしてみて、自分がある意味で大戦に参加していることに気づきました。ロンドンは戦時下の食糧の入手を海軍の保護に負っているのです。とすれば、この食糧を摂ることもまた間違いました。残された唯一の正しい道は、どこか遠くへ行って、イギリスのどこかの山か洞窟にこもり、そこで、いかなる人からも援助を求めずに、自然が施してくれる食糧と隠れ家で生きながらえてゆくことです。わたしはまだ、これをやってのけるのに必要な精神力を持ち合わせてはおりません。それゆえに、戦争のために働くかずに、戦争によって穢された食糧だけを享けるというのは、わたしには卑劣な行為に思われました。幾千という人びとが、ただそれを自分の義務と考えるために、生命を投げ出して前進しているときに、どうしてわたしだけがじっと坐っておれたでしょうか。この手は、銃の引き金をひくことはないでしょう。となれば、残るのは負傷者の看護だけです。そこで、わたしはその仕事を買って出たのです。」

言うまでもなくガンディーは、「アヒンサーの見地から、戦闘員と非戦闘員とのあいだを区別するものではなかった」から、自ら銃をとって殺害せず、負傷者の看護をすること

で、自らの行為を正当化するつもりは毛頭なかった。彼は言う——「盜賊団に参加を志願して、彼らの荷運びをしたり、彼らが仕事をしているあいだの見張り役をしたり、あるいは怪我をした者の手当てをする者は、盜賊と同じように強盗の罪を犯しているのである。同様に、戦場で負傷した兵士を介抱するだけの者でも戦争犯罪から免れることはできない」と。それゆえ、敵味方を選ばぬ看護の奉仕活動は、非暴力の信奉者として戦争参加を是認する口実ではなく、戦時下に生きる者のとるべき、唯一の、せめてもの罪滅ぼしであったといえよう。

それでは、インド人であるガンディーが、なぜそれほどまでに「精神のディレンマ」に苦悩しつつも、イギリス帝国に協力しなければならなかつたのか。インドが植民地として自動的に戦争に巻きこまれるまえに、なぜ自らすんで戦争参加を申し出たのだろうか。その主な動機は、先に引用したマガンラール宛ての書簡に明らかのように、個人は国家や社会から孤立して生きることができない以上、国家や社会の要請に応えて自分にできるかぎりのことをしなければならないという、市民としての義務感であった。もちろんこの場合、国家や社会の目的に不正や偽瞞が認められないことが前提であり、目的が不正であれば、個人はいかなる資格においてもそれとかかわってはならないし、いわんや、そのような目的に協力することは自ら罪を犯すことである、とガンディーは考えていた。

それゆえ、第一次世界大戦の時点では、ガンディーはまだ「概して、国民大衆の立場から見た政府は、それほど悪くないと思い、イギリスの行政官たちも偏狭で愚鈍なところはあるにせよ、正直だと信じこんでいた」ために、「私は一般のイギリス人がその時点においてするであろうことをしようとしたまでである」という後年の告白は、当時の心境を明かすものとして注目に値する。そしてこの信赖感は、そのまま、「イギリス帝国をつうじて、自分と自分の国民の地位を改善することを期待していた」という底抜けの楽観主義と相通じるものであった。

ところで、これほど「忠実な帝国の臣民」をして、わずか数年後に、イギリス支配を「悪魔的な政府」と呼ぶ「手に負えぬ反逆児」へと変身させたのは、ほかならぬ、人民不在の、高慢で非人間的な帝国主義の政治機構そのものであった。ガンディーはもともと、いわゆる觀念的・教条的なイデオロジストではなかった。彼は自己の歴史体験や思索をとおして、あの独自の思想と行動の論理を形成していったのである。それゆえ、彼がイギリス帝国主義の体質を見きわめ、その「手に負えぬ反逆児」となるためには、なによりも政府のさし出す数々の苦き杯を自ら存分に飲み干さなければならなかつた。ここに、ある人は

革命家ガンディーにある種のもどかしさや苛立ちを感じ、またある人は、かえってそこに、体験のみがもつ強靭な独自性を見出すのである。1914年の真摯な戦争協力者が、1921年11月17日号の『ヤング・インディア』紙では、次のように高らかに宣言するのである――

「いまや、わたしにとって、すべて事情が変わってしまった。わたしの目が開かれたようである。経験がわたしを賢くしてくれたのである。現在の政治体制は完全に誤っており、それを終わらせるか、それとも是正するために特別な国民的努力が必要であると考えている。現在の政治体制そのものには、自己改善のいかなる可能性もふくまれてはいない。----- それゆえわたしは、帝国をわたしのものと呼んだり、自分自身を帝国の臣民と言うことに誇りをもつことはできない。それどころかわたしは、自分がパリア(非人)であることを、帝国の不可触民であることをじゅうぶんに承知している。だからこそ帝国の根本的な建て直しか、完全な崩壊をたえず祈らずにはいられない。」

たしかに、ガンディーを「アヒンサー(非暴力)の使徒」「非暴力主義者」と呼ぶのは正しい。しかしいっぽう、ガンディーのアヒンサーを、その意味内容において、絶対不变の教義や行動規範と考えることには問題がある。彼はアヒンサーの追求を生涯の命題として持ち歩きながら、年とともに、ますますその内容を浄化し、深化していったのである。すなわち、アヒンサーは、その根本精神において一つであり、変わることはなかったが、その具体的解釈はそれぞれの時期によっていくらかニュアンスが異なっていたことを見落としてはならない。ただ一つ言えることは、それは一歩たりとも後退することなく、年とともに、いよいよ厳密に、昇華の一途をたどったということである。

それゆえ、大戦勃発時の積極的大戦参加をもって、彼のアヒンサーのすべてを論じ、その限界を云々することはできない。事実ガンディーは、数年後に自ら帝国の臣民であることを否定したとき、南アフリカ時代のボア戦争とズールー族の反乱のときの再度にわたる野戦衛生隊の組織活動と、第一次世界大戦におけるイギリスとインドでの帝国への協力の申し出を、「私の過去四度の過ち」として、国民の前に自らの過失を懺悔したのである。

ガンディーの意向はともあれ、運命の意志はガンディーを戦場に遣ることは望まなかつた。彼の呼びかけに応じて集まった「インドのあらゆる地方、あらゆる宗派の」80名の若い志願兵たち(大半はイギリス留学中の学生であった)とともに、6週間にわたって衛生兵としての訓練をうけ、いよいよ前線に赴くことになったやさき、ガンディーは、南ア

フリカ以来の過労がたたったものか、肋膜炎にかかって倒れたのである。医者や友人ばかりでなく、当局までもが、酷しいヨーロッパの冬を避けて一刻も早くインドへ帰るよう熱心に勧めてくれた。すでに、9月にロンドンに帰ってきたゴーカレとの面談もすませていたため、さすがにこれらの好意ある勧告に逆らう理由はなく、ガンディーは12月19日に妻とともに帰国の途についた。友人カレンバッハは敵国ドイツ人であるため、インドへの入国を拒否され、ロンドンで別れを惜しまなければならなかった。

ところで、乗船すると早速ガンディーがベンガル語の学習にとりかかっているのはおもしろい。彼自身はなにもその動機を語ってはいないが、それはかならずしも帰国後の政治活動の準備とばかりは考えられない。数あるインドの地方語のなかからとくにベンガル語を選んだ心底に、タゴールの作品を原語で読んでみたいというひそかな願いがあったものと思われる。

*

ここで遠く海を隔てたインドの、同じ時期のタゴールに目を向けてみよう。1914年5月、ノーベル賞の受賞騒動にも一段落をみたタゴールは、夏の休暇をヒマラヤ山系の高原避暑地ラームガルで過ごそうとしていた。そのころ詩人は、ほとんど毎日のように友人アンドルーズに宛てて、身辺の消息や思いを書きつづっていたが、幸いそれらの書簡が後年『友への手紙』と題して受信人の手で一巻にまとめられて出版されており、第一次世界大戦前夜の詩人の切迫した精神の緊張を手にとるように今日に伝えている。以下、まず同書から、5月半ばの数日間の詩人の微妙な精神の動搖の軌跡をたどってみよう。そこには、動物的な本能にも似た鋭敏な直観力をもって時代の激動を察知し、「人類の幸不幸を己の幸不幸」のように歎び、あるいは憂慮せずにいられなかった「ゲーテ的世界精神」「時代の予言者」としてのタゴールの面目が躍如としている。

まず、ラームガルへの旅立ちの前夜と思われる5月10日付のシャーンティニケタンの学園からの手紙では――

「わたしたちは、せっかくの休暇のため特別な仕事の計画をたててはなりません。怠慢でいることが心の負担になるまで、まったく休暇を浪費することに同意しようではありませんか。一ヶ月かそこらでしたら、わたしたちも社会の無用の人間でいることがあります――有用であろうと努めることは、大きな過失を招くことがあります――熱心

のあまり、種子を間近につめて播きかねませんから」

と、文面には休暇を前にした気持ちのはしゃぎさえ感じられる。ここには、長いヨーロッパ旅行の身心の疲労につづくノーベル賞受賞後の「いろいろな形で、ほとんど毎日のように襲ってくる障害」からしばし解放されて、思いきり無為をきめこんで、精神と肉体の文字どおりの「レクリエーション」をたのしもうという子供のような期待感がありありとうかがえる。

こうして、いよいよラームガルにやってきたタゴールは、大自然の懷に深々といだかれて、念願の無為と孤独を心ゆくまで満喫することができた。到着まもまい14日付の第一信に彼は書いている――

「当地でわたしは、自分が世界中でいちばん必要としていた土地に来たように感じています。----わたしを囲む山々は、平和と陽光をこぼれんばかりになみなみとたえたエメラルドの器のように思われます。孤独は、美の花弁をひろげ、その胸の中心に叡知の蜜をたくわえている花のようです。わたしの生活はみちたりています。それはもはや、ぱらばらにひき裂かれた断片的なものではありません。」

次の日も彼は、その歓びをいっそう熱っぽく、「この地に来てみてすぐに、わたしは自分がこれまで腹半分で生きていたことがわかりました。ここに来てからというもの、私は自分自身をとりもどしています」と書き、さらに一日おいて17日には、「永遠の真実の真直中に裸のまんま生まれて、宇宙の心臓の生命の鼓動を自分の全存在をもって感じができるということ——それがわたしの魂の呼びです」と、大自然との合一の法悦と新しい創造の靈感の訪れへの期待に胸をときめかせている。

ところが、しばし（なぜか手紙は17日がら21日まで4日間あいている）の暗転のあとで、詩人の心に訪れたのは、アンドルーズの表現を借りれば、「ほとんど死の苦悶にも似た精神の痛み」であった。4日間の意味ありげな沈黙のあとに書かれた次の手紙では、これがつい数日前まで綿々と心の歓びを書きつづっていた同じ手紙の主かと疑いたくなるような、重苦しい息づかいへと急変する――

「わたしは曠野を苦闘しながら進んでゆきます。山頂から射してくる光は明るいが、それは暗い谷間の斜面にななめに色濃く影を落としています。わたしの足は血にまみれ、わたしは息もたえだえにあえぎながら歩いていきます。疲れ果てて、わたしは地面に身を横たえ、泣きながらあのかたの名を呼びます。わたしは知っている——死をくぐりぬけてゆかなければならぬことを。そして神はご存知だ——わたしの心をひき裂いてい

るのは死の苦悶であることを。」

苦痛は騒ぎ立つ一陣の熱風のように通り過ぎた。3日後には、ふたたび詩人は「今日わたしはある山の檜の木のようにすこやかな感じであります。空からわたしのもとに届けられる光を蓄えておいて、嵐が来たときに、自分の力を嬉々として試してみようとしています」と、魂の闇夜をくぐりぬけて「身も心も完全に目覚め」、創造への意欲を体内に脈々と感じはじめたことを告げている。こうして、シャーンティニケタンに帰った詩人は、休暇を終えて学園にもどってきた子供たちの元気な顔と笑い声に囲まれて、いつものように教育と詩作に没頭することができた。アンドルーズの目には、「1914年の6月は、師にとってはすばらしく幸福な一カ月」に映じたほどであった。

「しかし」と、アンドルーズはやがてふたたびタゴールを襲った精神の苦痛を次のように回想している——「7月初めに、暗闇がまたもや彼の生活にふりかかり、ふたたび彼を圧倒するかに思われた。これといって外的要因があるように思われなかつた——健康上の障害はなかつたし、気候は悪くなかった。それに学校のほうもすばらしく順調に発展していた。それなのに、詩人は彼を寂寞の思いへとかりたてる不可解な耐えがたい精神の重圧について、くりかえし私に話して聞かせたのである。」

タゴールは、この内面の不安と焦躁感ゆえに一ヵ所にじっと定着することはできなかつた。彼はあたかも内からこみあげる不安や焦躁感につきあげられるかのように、あるいは、どこか新しい土地へ行きさえすれば一気に心の鬱積を振り払うことができるとでもいうように、いたたまれぬ思いで転々と身のおきどころを変えはじめた——シャーンティニケタンからアラハーバードへ。それからまた、兄たちや知入をたよって、アーグラ、ダージリン、シライドホというふうに。さらにまた、筆者が詩人の身近かな人たちから直接聞いた話では、シャーンティニケタンに滞在しているときでも、今日はこの学舎、明日はあの学舎というふうに、学園内の建物を毎日のように渡り歩いたということである。

このようにして、1914年夏から二カ月ほどのあいだに、タゴールの心は歓喜から苦悩へ、そしてふたたび苦悩から歓喜へ----と、ちょうど振り子がしだいに振幅の大きさを増しながら動くように、両極のあいだを烈しく往復していたのである。それではいったい、彼の心に去來したこの精神の不安や焦慮はどこから来たのであろうか。これまでしばしば、多情な詩神の誘いにみちびかれるままに書かれたタゴールの詩作品が、たとえ同一時期のものであっても、主題・様式・ムードといちじるしく多彩であることが、彼の芸術の目立った特色の一つとして指摘されてはいた。事実、彼の詩心は同じ一日のうちに

めまぐるしく揺れ動いたといわれている。しかし、このたびの精神の動搖は、そのような芸術家氣質や詩人の氣まぐれとは明らかに趣を異にするものであった。そしてアンドルーズの言うように、そこになんらかの外的要因が認められなかつたとするならば、それは通常の因果関係にもとづく心理的・精神的作用とは次元を異にするなにかにちがいなかつた。たしかに、先に紹介したいくつかの手紙の断片からも想像できるように、詩人自身、歎びの感情の因って来たるところについては、いくらか読む者にも納得のできる具体的な記述をしているが、苦悩については、きわめて抽象的・比喩的にその事象を語るにとどめている。たぶんそれは、詩人が自分の胸の内を他人に明かすことに躊躇いや羞らいを感じたからではなく、不安そのものがどうにも説明のつかない「漠然とした」「言いようのない」ものであったからであろう。そして、彼は後日、それが「澄み切った雲一つない空から、突然、稻妻が走るようにふりかかってきた」ことをアンドルーズに告白している。

ところで、今日われわれはこの謎を解明するために、わずかな資料をたよりにあれこれまことしやかな想像をめぐらして、互いに賢しらな憶説を主張し合う必要はさらさらない。なぜなら、当座は本人自身にも出所のわからなかつた烈しい苦悶が、やがて時日の経過とともに、立ちこめていた霧が霧れてゆくようにおのずからその正体を現わしはじめたからである。そして濃霧の奥から最後に姿を見せたのは、第一次世界大戦の勃発という人類未曾有の不幸の顔であった。いまやついに、タゴール自身にも身近な人たちにも、二カ月にわたる詩人の胸の重苦しいつかえが、因ってどこから来ていたかが歴然と判明したのである。

そのころ、頻繁に詩人と書簡を交わし、だれよりも師の胸中の苦痛を熟知し憂慮していたアンドルーズは、後年このように書いている——「いま、人類が殺人的な戦争によって突然ばらばらにひき裂かれていたあの当時をふりかえるとき、詩人がそのきわめて高感度な感受性をもって、まさに起ころうとしていた人類の悲劇を、漠然とながら事前に察知していたことはたしかだったようと思われる。そうでなければ、師の烈しい精神の苦悩は説明がつかないからである。」また、最も信頼できるタゴール伝の著者クリバラーニは、「当時詩人と起居を共にしていた人たちや周辺にいた人たちの証言」から、それを「愛してやまないこの世界に、一つの大きな災厄がふりかかるとしていたことへの予感にも似た思い」であったと説明している。

事実、戦争が始まる何週間か前に、タゴールはやがて地球にふりかかるとしていた突然の破壊を、くしくも「破壊者」と名づけた一篇の詩に書いている——

見よ、すべてを亡ぼしつつあるものが　いま　やって来る。

心痛の高潮が　苦海にひろがる。

雷鳴が闇へとどろき、稻妻が血走った雲間にひらめく——

死の戯れのさなかに抱腹咲笑する——なんという狂氣か！

それにしても、われわれには依然として大きな一つの謎が残る。それは、ヨーロッパの空にまだほとんど戦争の暗雲の影さえ認められず、ヨーロッパのほとんどの政治家や知識人でさえまだそれに気づいていなかった早い時期に、しかも、ヨーロッパから数千マイルも離れた、外国の支配下でのきわめて制限された不十分な情報しか入手できないインドで、いや、それさえも迅速、正確には伝わって来ないおおよそ文明生活とはかけ離れた僻鄙なヒマラヤ山麓やベンガルの小村で、どのようにしてタゴールが大戦の勃発を予感し、硝煙を嗅ぎつけることができたか、という謎である。そして、それについては身近な人たちも口をつぐんで語っていない。あえて言うならば、愛する者の不幸の前兆を、人はしばしば遠く離れていても、俗にいう「虫の知らせで」予感できるように、タゴールもまた、愛してやまない世界と人類にふりかかろうとしていた災厄の前兆を、いちはやく察知できたということであろうか。もちろん、客観的には、前年までのヨーロッパ滞在中の見聞が、なんらかの形で彼の鋭い直観の背後にあって貴重なデータとしてはたらいていたことは事実であろう。しかしわれわれは、それをもってこの謎のすべてを解き明かす決め手とはできない。なぜなら、5月の最初の予感をさらに前ぶれする一つの事件が、遠くヨーロッパ旅行以前に彼の心をいちど横切っていたからである。

それは、詩集『ギタンジャリ』に代表されるタゴールの生涯でももっとも敬虔で神秘的な宗教詩の生まれた精神の高揚期であった。ある日詩人の心は、なにか名状しがたい差し迫る危機感に襲われ、西の地平線の彼方に黒い不吉な雲が累々と集まっているのを見たのである。タゴール自身の言葉によると、「わたしは、人類の空に雲が集まっているのを見る。雲はとどろき、編隊を組んで行進してゆく。彼らの胸は烈しく鼓動し、足下にいっさいの障害物を踏みつけてゆく。累々と重なるこれら雲を、衝突させ、とどろかせるものは何か。わたしは人類の空に、雲たちが集まっているのを見た」のである。

『ギタンジャリ』のあの深遠な宗教的ヴィジョンと、現実透視のこの予言者的ヴィジョンの二元性が、タゴールのなかでみごとに矛盾なく調和し、一元化しているところに、彼

の靈感の大きな特色がある。タゴールにあっては、神を追求し、神を愛することは、そのまま、世界と人間を追求し、世界と人間を愛することであった。それゆえに彼は、神を見るのと同じ目で世界と人間を見、神を直観するように、世界や人間の現象を直観したのである。それは豊富なデータの収集と、その正確な機械的分析による客觀論理以前の、同時に、遙かにそれを超えた詩人の透徹した「ヴィジョンそのもの」であった。

前年のノーベル賞の受賞は、タゴール固有のこうした人類的・世界的な思想傾向をますます拡大徹底させ、「世界市民」としての自覚を強化したのである。ヨーロッパを戦場とする人間殺戮は、いまや彼には、アジアとは直接かかわりをもたない他所ごとではなかった。彼にとって「戦争は、人類の胸部の傷のようなものであり、その痛みと恐怖は、見かけはどんなに離れているようでも、手足の先ざきまで共にされるべきものであった」(K・クリパラーニ)のである。それゆえに詩人は祈る——「世界の罪惡は炸裂して、血の海となる。おお、主よ、願わくば、この罪惡拭い去って、われらを全滅の危機から救いたまえ」と。

*

このようにみてくると、第一次世界大戦にたいするガンディーとタゴールの対戦態度のいちじるしい相違は、二人の個性の特質を象徴しているようでおもしろい。タゴールが大戦二カ月前に、戦場となるべきヨーロッパから何千マイルも離れたインドの一隅にあって、いちはやく戦争の脅威を予感し、人類の惨事に「ほとんど死の苦悶にも似た精神の痛み」を感じとったのとは対照的に、ガンディーは船旅の一般客とともに、「ニュース報道によって戦争勃発の報を聞いて驚いた」のであった。

このことは、政治家としてはいくらか迂闊とも鈍重とも誹りをうけることになるかもしれない。しかしガンディーは、この時点でも、またその後も、隣国や世界の動向に鷹のような鋭敏な目をくばり、その変動を一刻を競って他より早く察知し、それによって自国の運命を少しでも有利に導こうとする、老猾な、いわゆる商人政治家ではなかった。彼があらゆる政治行動の決定の尺度としたのは、隣国や世界の動向ではなく、己の信じるところの真理であった。隣国の善意を心底より信じ、他国の不幸や危急を自國の好機に利することを願わぬこの政治指導者にとっては、片時も油断なく外の世界に向けて警戒の目を光らせておく必要はなかった。この意味で、ガンディーを世の常識からみた「政治家」と呼ぶ

のは当たらない。事実、彼自身は自らが嘗めた理不尽な人種差別に憤り、同時に同じ苦悩を嘗めている同胞を救うためにやむなく民衆の指導に立ちあがったのであり、政治手腕によって自分と同胞になんらかの利得をもたらそうとする打算や計算はいささかもなかった。

ガンディーの『自叙伝』を繙いておもしろいのは、南アフリカからイギリスへの船旅をつづった「ゴーカレに会いに」の章でも、先に紹介した友人カレンバッハとの望遠鏡事件が話題の中心であり、大戦の報についてはわずか十行たらず、しかもそこには事実だけが淡々と記されていて、世界をゆるがした大戦について一言の感想すら見あたらないことである。このいっぷう変わった『自叙伝』の著者にとっては、読者に伝えるべき重大事は世界の動乱よりも、内面の道徳的・精神的問題であったということであろう。このことは逆に、ガンディーの政治思想を内面から明らかに照射することになるのである。

こうしてガンディーは、第一次世界大戦の勃発を事前に察知できなかつばかりか、その報道を聞いても、さして心が動搖するふうでもない。しかも、ロンドンに上陸するや、ただちに旅先にあって、「自分と自分の民族の現状を改善しようとの期待」から、異国ができる範囲での最善と思われる行動——すでに述べた衛生隊の組織運動——を開始するのである。その電光石火の行動力は驚くばかりである。ただ、その結果は、いまにして思えば、タゴールの言う「熱心のあまり、種子を間近につめて播きかねない」感がしなくてないし、友人のアンドルーズに言わせれば、「ガンディーは戦争に巻き込まれただひとりの友」ということになるのであるが。

フランスのノーベル賞作家で、「二十世紀のヨーロッパの良心」といわれているロマン・ロランが、後年のガンディー=タゴール論争を論じて、タゴールを評して「鳥の詩人、鶯のような大きな雲雀」と呼び、他を「タゴールのように天翔けることのできないガンディー」と評したのは、まさに適評と思われる。「鶯のような大きな雲雀」は、空高く舞いあがり、鋭い眼で世界の未来を見はるかし、限りなく美しい声で天と地の歌をうたう。こうして彼は、人類に未来を予告し警告する「鳥の詩人」、言いかえれば「観る人、ヴィジョネール」であった。これにたいして、「タゴールのように天翔けることのできないガンディー」はつねに言った——「わたしは遠くの景色を見たいとは思わない。わたしには一步前進でけっこう」と。

あるとき、ガンディーを訪ねてきた若いアメリカ人の宣教師が、ガンディーにあなたの信じる宗教とは何か、インドの未来の宗教はどうなるだろうかとたずねた。ガンディーは、それらの質問に多くの言葉をもって答えずに、たまたまその部屋の隅に寝ていた二人の病

人を指して言った——「奉仕することがわたしの宗教です。わたしは未来のことは思い描みません」と。いま眼前にいる病める人、悲しむ人、悩める人に愛の手をさしのべるのが、ガンディーのいう宗教であり政治行動である。人類の未来の不幸を杞憂する前に、人びとから現在の不幸を取り去らなければならない。現在の不幸を積みのこしておいて、未来的幸福はありえないというのである。こうして彼は、鶯のような大きな翼をもって天翔けることはできなかったが、一步一步、自分の足で険しい山道を登っていったのである。

それではガンディーは、直観や靈感とは無縁の現実主義の亡者であったか。そうではない。彼は現実の闘争や行動が行きづまり、挫折したとき、しばしば心を静め耳を澄まして「内面の小さな静かな声」を待った。ことに彼が生涯にくりかえした断食のいくつかは、不意に訪れた「内面の小さな静かな声」の命ずるままにおこなわれたものであり、それは周囲の情況の常識や論理を超えたとっさの決断であった。この意味で、タゴールが未来を観る人であったとするならば、ガンディーは未来の声を聴く人であったといえるかもしれない。

〔森本 達雄(もりもと たつお)先生 略歴紹介〕

名城大学教授(近・現代インド文学・思想専攻)。

1928年 和歌山県に生まれる。1951年 同志社大学神学部卒業。

1964～67年 インド国立ヴィシュヴァ・バラティ大学準教授を経て、1967年より現職。この間、1961年にタゴール生誕百年祭に日本代表として第一回訪印。以後、インド国立ジャワハルラール・ネルー大学、ネルー研究所客員教授。シムラ高等文化研究所におけるシンポジウム、インド祭準備委員として、またインド国立文学院主催の国際セミナーにも数次にわたり参加。

主要著書 「インド独立史」中央公論社；「インドのうた」法政大学出版局；「ガンディー」講談社。

主要訳書 ガンディー「わたしの非暴力」、ネルー「忘れぬ手紙より」みすず書房；「タゴール著作集」(全12巻)、K・クリパラーニ「タゴールの生涯」、「ガンディーの生涯」第三文明社；他。



南インドのブーラーマン司祭たち

田 中 雅 一

(京都大学人文科学研究所 助教授)

1. はじめに

インドは多様である。自然環境、人々の暮らし、言語、どれをとってもわれわれ日本人の想像を越えた多彩な世界がインドという国には潜んでいる。しかしながら、同時にインドをインドたらしめているような共通要素の存在を否定することもできない。例外が多々あるということを承知の上であえてそのような共通項を指摘するなら、それはヒンドゥー教であり、それと密接に結びついたカースト制度である。いうまでもなくインドにはヒンドゥー教以外の宗教も多いし、カーストを否定する人々も多い。また同じヒンドゥー教と言っても、その中身は多様であり、それだけではなんの説明にもならないことが多い。しかし、ヒンドゥー教とカースト制度のふたつを無視してインドを語ることも不可能であるというのも事実である。この短い文章では私が1988年以来つきあっている南インドはチダンバラムのシヴァ寺院の司祭たちについて紹介し、寺院を中心としたヒンドゥー教のあり方をみていくと同時に、あまり知られていないブーラーマン・カーストの内部組織について考察したい。

ところでカーストとは一体なんであろうか。一言で言えば、それは序列化された世襲集団と定義できる。しかし、その実状についてわれわれ日本人はしばしば誤解している。たとえば手元にある『広辞苑』でカスト（カースト）という項を見てみると「インドのアーリア人が維持していた極端に閉鎖的な身分制度。バラモン（僧侶）・クシャトリヤ（王家・武士）・バイシャ（平民）・シュドラ（奴隸）の四姓（四種姓）をいい、職業・交際・通婚・習慣など厳重に規制された。現在これから派生した数千にのぼる亜カーストがある。」と説明されている。ここからわれわれはカーストとはなにかと尋ねられると、バラモン、クシャトリヤ・バイシャ云々と答えることになるのである。そうすると、現実にインドで見かける床屋、洗濯屋、壺作り師、金細工師、鍛冶屋などさまざまなカーストはこの定義では亜カーストということになる。人類学においてはこのような亜カーストこそをカーストとし、先の四姓をヴァルナとして区別する。ここでもこうした人類学の用法に習い、職業集団をカーストとして話を進めることにしたい。だが、こうして定義されたカーストも外からはなかなか見えてこないが、さらにいくつつかの小集団に分かれる。これらは地縁的な通婚単位集団なのである。ここで紹介するバラモン（ブーラーマン）の場合も外からはひとつのかースト集団ととらえてもいいかもしれないが、内部でいくつもの細かな集団に分かれていることを考慮する必要がある。

ブラー・マン司祭親子



なお本稿の資料は文部省の科学研究費の援助によって収集が可能となったものであり、その報告書『インドの宗教と社会』（長野泰彦・井狩弥介編）に所収の拙著「自立への志向と相互依存」と叙述の一部が重なるところがあることをことわっておく。

2. ナタラージャ寺院

南インドは「寺院のくに」として知られている。王の庇護のもと一〇世紀から一三世紀頃に多くの巨大な寺院が建立された。チダンバラムに祀られているシヴァの正式名は、「踊りの王」を意味するナタラージャ、サバーという五つの建物の主を意味するサバーナヤカあるいはサバーバティという。ここから寺院の名もナタラージャ寺院とかサバーナヤカ寺院と呼ばれる。

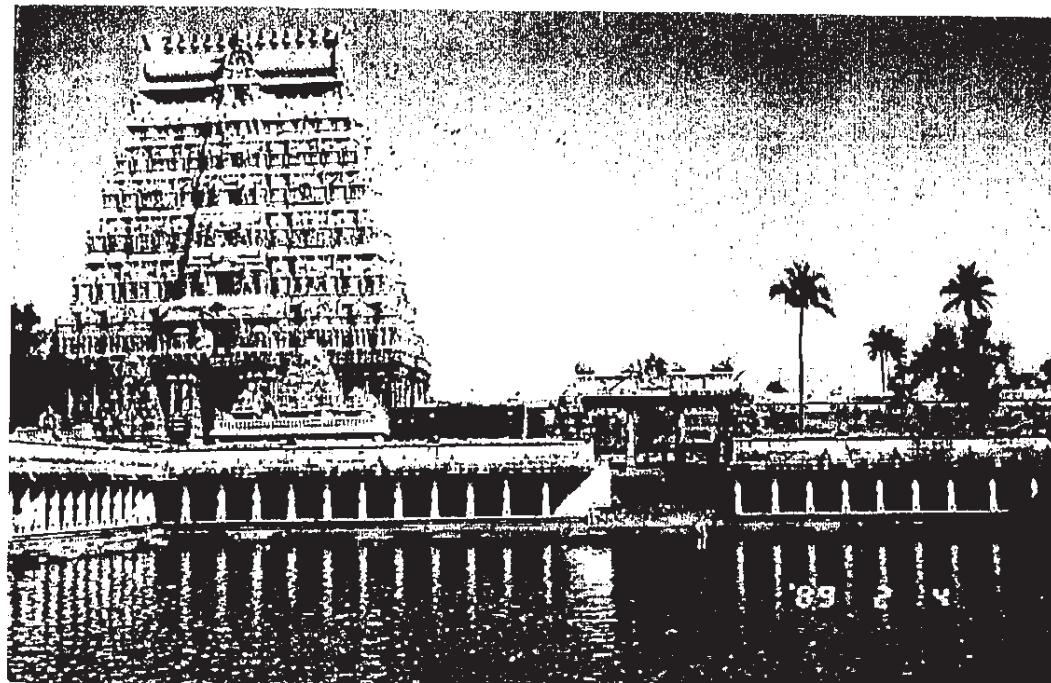
伝説では六世紀頃に実在した王が、この地で水浴びをして皮膚病を治したことをきっかけとして、寺院が建立されたという。また、七世紀から八世紀頃に活躍した聖者たちがナタラージャ寺院を参拝したという記録が残っている。ここから、規模は小さかったにせよ、八世紀頃には寺院が建設されていたと推察できる。ナタラージャ寺院は一〇世紀から一三世紀にかけて現在ある主要な建物が建造された。そして、その後も度重なる修復と新たな建物が追加され今日に至っている。

地図から分かるように、チダンバラムは、タミルナードゥの州都であるマドラスより南に二四五キロほど下ったところにある、その人口は、一九八一年の国勢調査によるとおよそ五万六千人である。

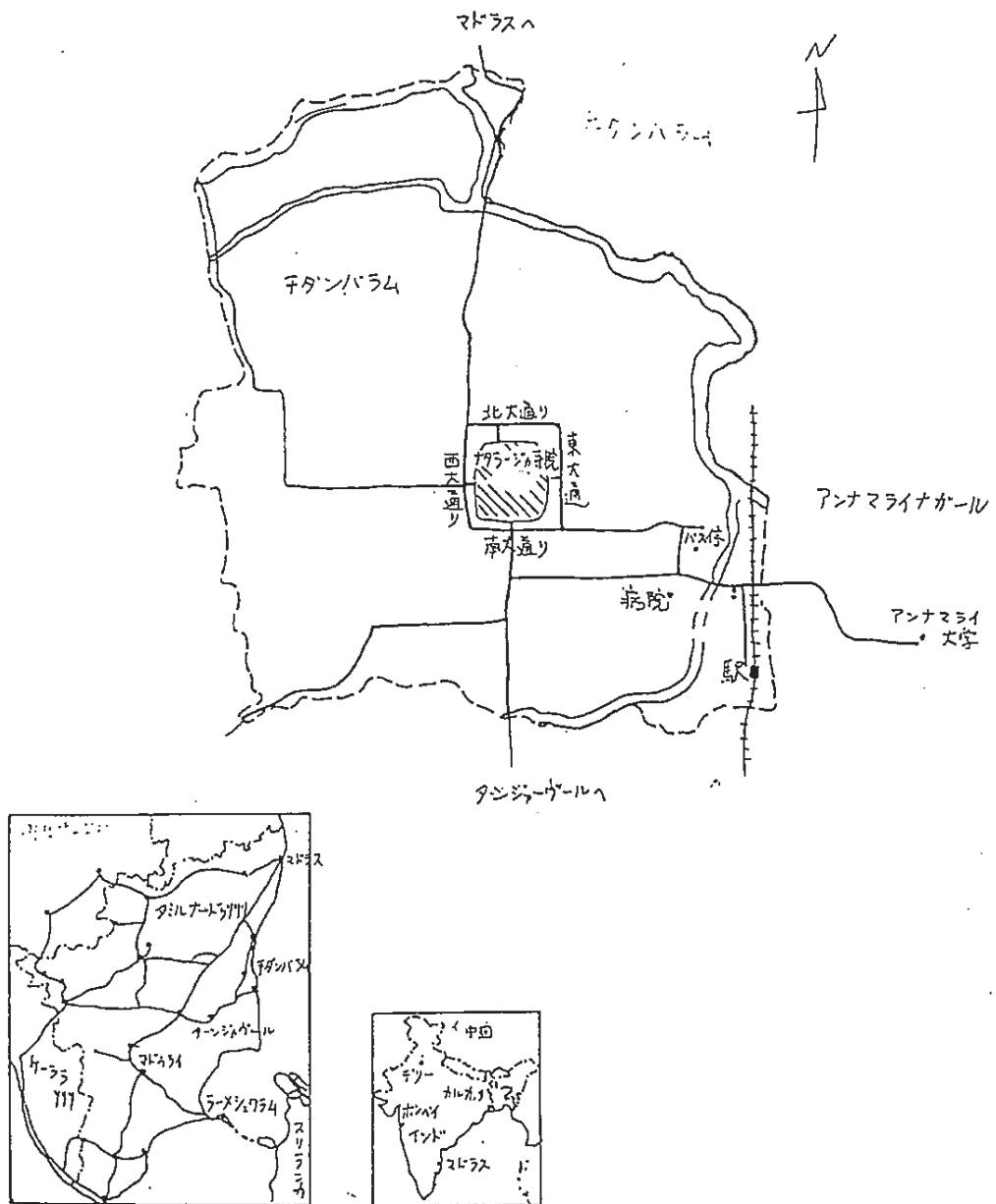
チダンバラムが有名なのは何よりもナタラージャ寺院の存在による。この寺院はほぼ町の中心を占め、その面積はおよそ一六ヘクタールである。日本の社寺仏閣のように、広大な敷地に多くの建築物が建っている。寺院の組織は、その建築上の構造と密接に関係しているため、ここではやや詳しく寺院の構造について説明する。

外側から見ていくと、この寺院はまず東西南北に走る四つの大通りに囲まれている。マドラスから来たバスは北西の角から北の大通りへと入る。北の大通りは郵便局を除くとほとんどが普通の家で占められているが、弁護士や医者の家が目立つ。東の大通りには、司祭たちの家や宿泊施設が集中している。巡礼の季節には何台ものバスがとまっている。南の大通りにも、司祭たちの家がいくつかあるが、店舗が目立つ。西の大通りはチダンバラム第一の繁華街となっていて、とくにサリーなどを売る衣料品店や宿泊施設が集まっている。また、この通りの裏手には青物市場があって、活気にあふれている。

ナタラージャ寺院



地図 チダンバラム



寺院には、境内に通じる四つの門があり、そこに向かうには、これら四つの大通りから延びているサンナディという小道を利用しなければならない。各々の道が四つの小門と、南インドの寺院建築に特有のゴープラ（塔門）に通ずる。両者は、各々の寺院を取り巻く二つの壁（ここでは外壁と内壁と呼んでおこう）の入口である。二つの壁の距離は約三〇メーターである。北側を除き、大通りと小門を結ぶサンナディの両わきには参拝客のために供物や縁起譚を売る店、雑貨店、食堂などがいくつも並んでいる。小門は、寺院を取り巻く四つの外壁に作られている。ここには、礼拝の間に鳴らす鐘が備え付けられている。

さきに、司祭たちの住む家が東の大通りに集中していると述べたが、これらの家は大通りに面していて、その裏はそのまま寺院の外側の壁となっている。だから、間口は五メーターほどの長屋風だか、家の奥行きは大通りから小門までの八〇～一〇〇メーターあるということになる。外側の壁と内側の壁の間は庭園となっていて、寺院の様々な儀礼に必要な花やココヤシ、果物が栽培されている。

外側の壁とゴープラの間には、参拝の対象となる神々が何体か安置されている。詳しくは図一と二を参照して欲しい。ゴープラの内部は寺院の境内で、靴やサンダルをはいていってはいけない。石畳が敷かれている、各建築物や壁との間はかなり余裕がある。ここには全部で二〇の寺院そしてラージャサバーと呼ばれる千本柱のホールと、今は使われていない百本柱のホールがある。また北側には、南北八〇メーター、東西六〇メーターの巨大な人工池（タンク）もある。これをシヴァガンガイという。さきに紹介した縁起で、王が水浴びをしたのは、このタンクのもととなつた池であったという。大きな寺院は北西にあるシヴァの配偶神シヴァカーミ女神とシヴァの第二の息子ムルガン神を祀るパンディヤナーヤカ寺院である。これらの寺院の内部にはいくつかの小祠がある。

本尊を祀るシッサバーを取り巻く建造物（ここでは「本堂」と呼ぼう）には東と西とに二つの入口がある。かなり急な階段を降りていくと、ナタラージャ寺院の内部を一巡する回廊がある。東の入口から右廻りにこの回廊を一巡してみよう。突き当たってから右（西方向）へ曲がると、左側が供えものを料理する巨大な台所である。そこからさらに進むと、右手には金色の旗竿が天井まで伸びている。ここから、シッサバーに祀られている本尊のナタラージャを直接拝むことができる。旗竿の反対側は、シヴァの踊りの舞台となったというヌリッタサバーである。ヌリッタサバーの上には、右足を高く掲げ耳につけているポーズをとるシヴァ神ウールッタヴァ・ターンダヴァムールティの祠がある。近くに聖化された供物（プラサーダ）が売られている。またヌリッタサバーの西側には、ヴィシュヌ神

図1 ナタラージャ寺院 (1)

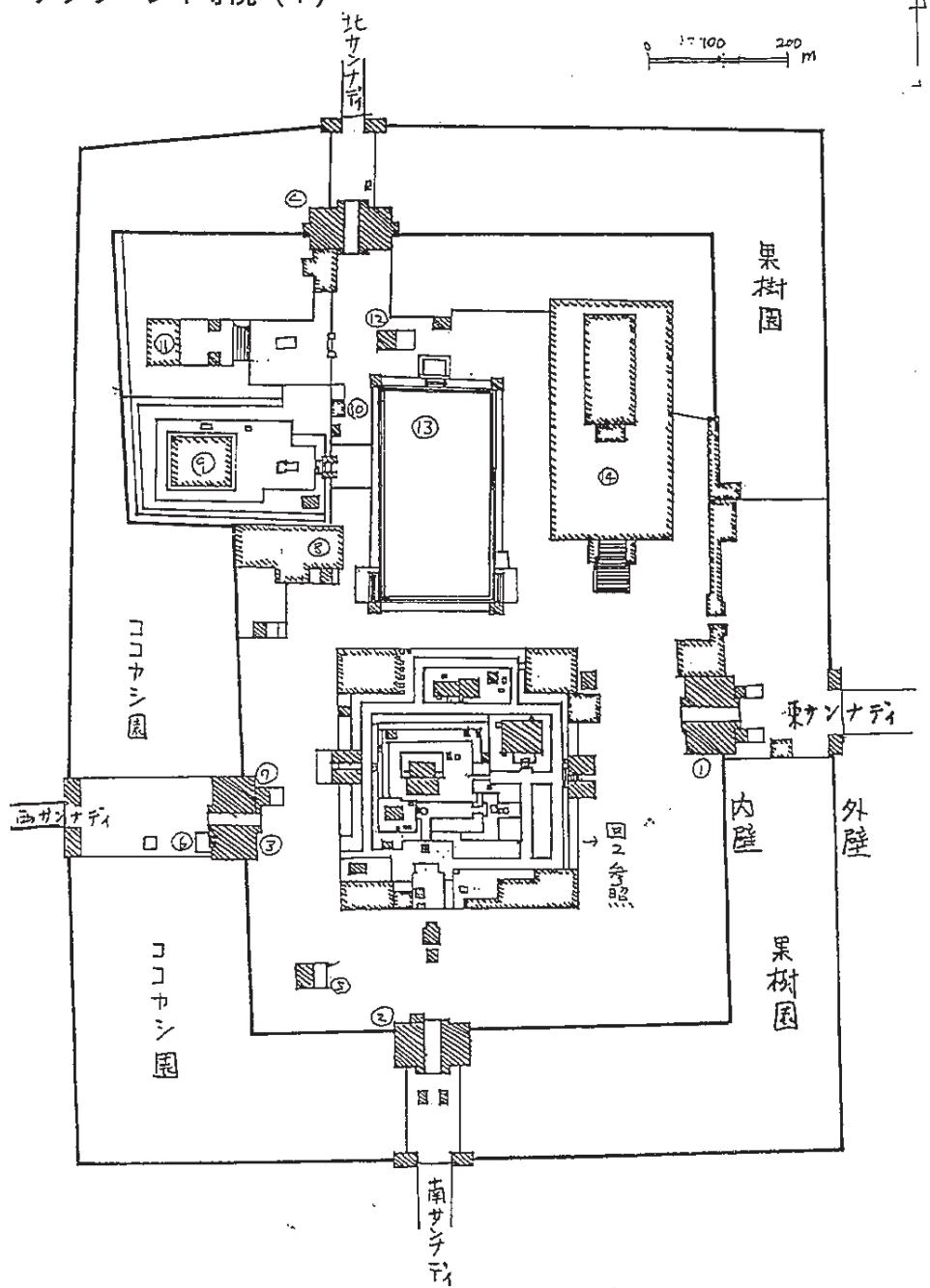
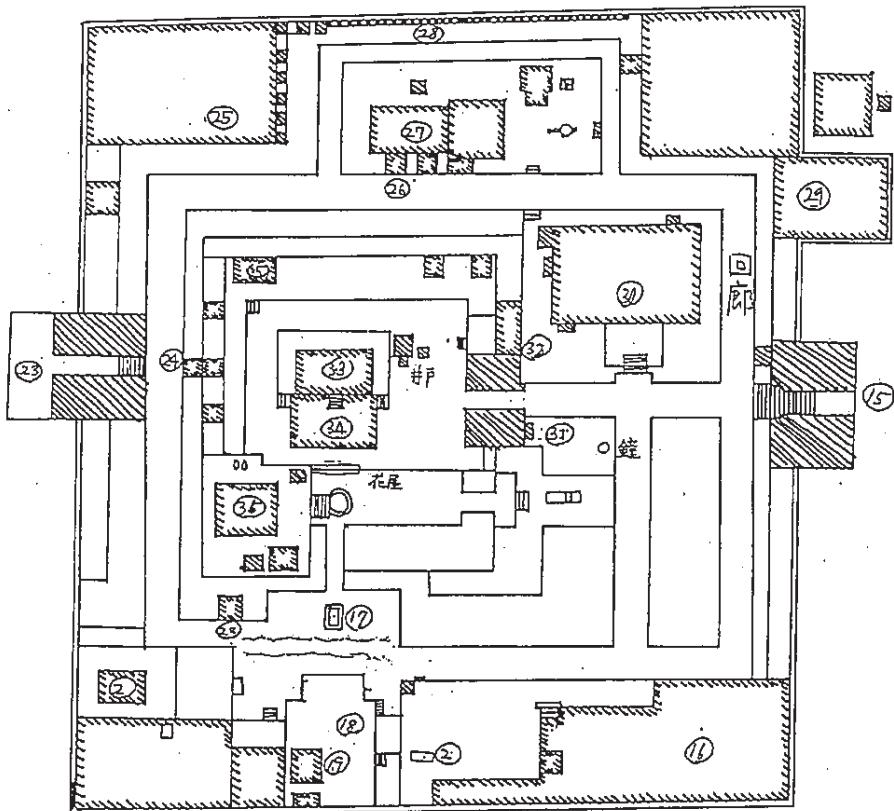


図2 ナタラージャ寺院(2)

0.2 50 100
m.



- | | | |
|-------------------|---------------------|------------------|
| 1. 東ゴーブラ | 13. シヴァガンガ(タンク) | 25. ヴァーハナマンダパ |
| 2. 南ゴーブラ | 14. 千本柱のホール(ラージガルバ) | 26. ダクシーナムーティ小祠 |
| 3. 西ゴーブラ | 15. 東の入口 | 27. ムーラスターーナ寺院 |
| 4. 北ゴーブラ | 16. 台所 | 28. シヴァの聖者たち |
| 5. ムックルニ・ヴィナーヤカ寺院 | 17. 旗桟 | 29. ヤーガシャーラー |
| 6. カルバカ・ヴィナーヤカ寺院 | 18. スリックサバー | 30. デーヴァサバー |
| 7. ヴィーラ・スプラマニヤ寺院 | 19. クルコトガラ・タングアムーティ | 31. マンバラ・グイナ-カ小祠 |
| 8. 百本柱のホール | 20. ブラサーダの壇場 | 32. ナヴァグラハ小祠 |
| 9. シヴァーカーマンダリ寺院 | 21. ラクシュミー女神寺院 | 33. シッサバー |
| 10. ドゥルガー寺院 | 22. ダンダースグバーニ祠 | 34. カナカサバー |
| 11. パーンディヤ・ナーヤカ寺院 | 23. 西の入口 | 35. ゴーヴィングラージャ寺院 |
| 12. ナヴァリンガ寺院 | 24. 7-エーチ・ヴィナ-カ小祠 | |

の配偶神であるラクシュミー女神の寺院が建てられている。回廊沿いにはダンダーエダパニという名のムルガン神を祀る祠がある。この本尊は柱に刻まれたものだ。

さらに回廊を進もう。再び突き当たってから右、すなわち北へと進む。真ん中ほどには西側の入口に通じる階段があり、そのちょうど反対側にはシヴァ神の長男である象頭のアーカーサ・ヴィナーヤカの祠がある。

ここからさらに北に進むと、祭祀のときの行進用に使う乗り物を保管する部屋に突き当たる。ここを東に曲がる。少し歩くと左にダクシナームールティというシヴァ神らの小祠がいくつある。さらに進むとムーラナーダルというシヴァリンガ（陽根）を本尊とし、ナタラージャの建築群の中で一番古いといわれるムーラスターーナの入口に出る。これは東向きに建てられていて、それを取り囲むようにしてシヴァの六三の聖者たちやほかの神像が祀られている。

回廊に戻ってさらに歩いていくと、祭りの時に行うホーマ（護摩）用の部屋に突き当たる。こうしてわれわれは再び最初の回廊へと戻ったのである。さて、ここで東の入口をまっすぐ進んでシッサバーの方へと向かうことにしてよう。

まず右側には祭祀像を安置するデーヴァサバーがある。そしてシッサバーのある中庭に通じる門の左側にマーンバラ・ヴィナーヤカ、右側に九惑星神の小祠がある。この門をぐるぐるとシッサバーがあり、中にナタラージャとその妻シヴァカーミスンダリが祀られているのである。この建物に隣接してカナカサバーがある。二つのサバーは、金箔の屋根で覆われている。東と西の階段を登って、信者たちはカナカサバーまで入ることができる。

さて、カナカサバーの南には東向きに建てられているゴーヴィングラージャ・ペルマルという名のヴィッシュヌの寺院がある。この寺院とさきにすでに触れたラクシュミー女神寺院は、ヴィッシュヌ派の司祭たちによって儀礼が執行されている。一つの境内にそれも隣り合わせでシヴァとヴィッシュヌの寺院があるというのは極めて特異である。しかも、両者の管理・運営は相互に独立している。

以上の説明から、ナタラージャ寺院はいくつかの祠が集まってできている集合体であるということがわかる。もちろんここで触れたもの以外にも多くの小祠がある。

3. 儀礼と祭り

この節では、寺院における宗教活動を簡単に紹介することにしたい。まず、毎日の公的な礼拝について述べたい。

南インドの寺院で最も重要な活動は日々の礼拝である。これは世界（宇宙）の発展と安寧を祈願して行われるものである。ここでは、一四の寺院や祠で毎日決まった時刻に礼拝が行われる。シッサバーにおいては毎日六回（朝三回、夜三回）の礼拝が、シヴァカーミ女神、パーンディヤ・ナーヤカ、ムーラスターでは毎日四回（朝二回、夜二回）の礼拝がなされる。その他の当番司祭のいる一〇の寺院では朝夕各一回礼拝が行われる。午前の最後の礼拝が終わると本堂およびその他の寺院の扉は閉じられ、五時まで中に入ることはできなくなる。同じことは夜にも生じる。最後の礼拝が終了すると、翌朝の六時まで扉が閉じられ、中には鐘をたたく人と、司祭たちだけが残る。また夜はゴープラの扉も閉まる。以下では、本尊の安置されているシッサバーの礼拝について簡単に紹介しよう。

シッサバーの一日はナタラージャの目覚めから始まる。かれは毎夜配偶神シヴァカーミとともに過ごす寝室に行くが、ここからナタラージャ神（正確には彼を象徴する足）をシッサバーに戻す。ほどなくしてから第一回目の礼拝がその日の当番司祭によって行われる。ナタラージャに歓待のために水、花などを捧げる所作を行い、台所で用意した供物を供える。細部に相違はあるが、このような歓待が六回行われる。そして、最後の礼拝の後には、ナタラージャを象徴する足が寝室へと運ばれるのである。

つぎに私的な儀礼行為に移ろう。人々は病気治癒や試験合格、就職などの祈願および感謝のために寺院にやってくる。一般にヒンドゥー教徒は何か厄災をこうむると、その除去のために神に祈り、もし祈願がかなえられたならば、神のために特定の行為を行うと約束する。その行為には様々なものがあるが、チダンバラムではアルチャナが一般的である。

アルチャナはココヤシなどの供えものを神に捧げる行為である。これを行うのは、各寺院にいる司祭か、自分が懇意にしている司祭を通じてである。シッサバーには礼拝を行う司祭とは別に、アルチャナを専門に受け取るような司祭たちがいる。司祭のいない祠でも、頼めばアルチャナを供えることができる。アルチャナは手ごろなこともあり、シッサバーだけでも一日に七〇〇くらいの奉納がなされる。

これらに加えて、寺院では多くの祭りが行われる。ナタラージャ寺院で特筆しなければならないのは、夏と冬に一〇日間の大がかりな大祭である。これらの祭りによって、一年がちょうど半年ごとに区切られる。大祭以外の祭りの期間は、一日で終わることもあれば、数日続くこともある。

一般に言えることは、ナタラージャ寺院の祭りは、プラーマン司祭を中心とした洗練されたものが多く、神の取りつく憑依やトランス、また火渡りなどの自傷行為がともなうよ

うな儀礼は行われないことである。祭りによっては狂燥的な要素がないではないが、全体としては整然としたものであるといえる。

4. ナタラージャ寺院の司祭たち

ナタラージャ寺院の主人公はディークシタルと呼ばれる司祭たちである。かれらには寺院のいたるところで会うことができる。白い儀礼用の腰巻を優雅に巻きつけ、上半身は裸、ブーラーマンの印である聖紐を左肩から右脇へと斜めにかけている。手には寺院の供物の残り（プラサーダ）を入れるアルミ製の容器を携えているかもしれない。髪は頭の横側だけ前後左右剃りし、真ん中だけ剃らずに残す。原則として髪を切らないから、一メーター近く伸びている人もいる。それを手際よく丸めて頭の右側に束ねる。ちなみに、タミルナードゥ州の他のブーラーマンは回りを剃ったり、髪を伸ばすのは同じだが、髪は後ろに束ねる。

ディークシタルは、一九八八年当時世帯数が一九六、人口は六八六人の小さな集団である。かれらが寺院を集合的に管理し、その多くは参拝者からの収入によって生活している。二～三の例外はあるが、ほとんどがチダンバラムに住む。司祭以外の定職をもつものは一〇名足らずである。しかし、かれらもチダンバラムに住む限りは、司祭として働く。遠隔地への巡礼は盛んであるが、動物供犠が行われるような寺院に足を運ぶことはない。

かつては三〇〇〇人の司祭がいたといわれるが、現在司祭の資格がある既婚男性は二六五人である。かれらはチダンバラムにおいて最も地位が高いと主張し、また他のカーストからもそのようにみなされている。まずかれらの間に伝わる神話を紹介しよう。

あるとき大きな儀礼がチダンバラムから遠くはなれたベナレスの近くで行われることになり、ブーラーマナ神によって三〇〇〇人のディークシタルが招待された。かれらはチダンバラムを去ることを躊躇したが、結局ブーラーマナの招待を受け入れる。寺院の儀礼に間に合うように、急いでチダンバラムに戻ってくると、一人足りないので大騒ぎとなる。すると、天から声が聞こえてきて、見当たらないのは他ならぬシヴァであるということが判る。シヴァは、したがってかれらの一員なのである。ディークシタルは、自分たちの社会はみな平等だからリーダーはいない、シヴァ神自身がリーダーだと口を揃えて言う。

ディークシタルたちは、神事に関わる司祭として淨・不淨にたいするきわめて厳格なルールを遵守する。食事規制では厳格な菜食主義者であり、精力のつくタマネギやニンニクも避ける。地位の高いブーラーマン以外と食事はしない。結婚はディークシタル同士でのみ可能である。

特筆すべきは女性の管理である。女性は成熟すると、ディークシタルの家々の往来と寺院の内部以外に、外に出ることは望ましいものと思われていない。そして、生理が始まると夫の顔を見てはならず、話しかけてもいけない。すでに同居している場合は、実家に帰り、そこで三日間土間に隔離される。生理中は彼女が家族の中で最後に食事を摂る。この間夫は儀礼を行うことができない。不浄期間は、死者が出た場合も出産の場合も、ともに一〇日であるが、死の場合四〇日間アルチャナ（私的な供物）をすることができず、寺院での公的な礼拝は一年間控える。また出産の場合一〇日間アルチャナができないが、礼拝は四〇日を経ると可能となる。妻が妊娠中は礼拝をしない。かれらはこのような浄・不浄についての規則を厳格に守っているという点に高い自負をもつ。

ディークシタルたちの間ではかつて幼児婚が一般的であった。結婚すると、司祭として活動することができると同時に、寺院の運営に関する発言権を得る。しかし、それだけでもなく、幼児婚は小さな頃からの女性を管理するというブーラーマンの伝統的な価値と密接に結びついていると推察できる。ディークシタルは四つの父系外婚集団（ゴートラ）に分かれ、この間で通婚をする。他のブーラーマンとは食事をすることはあっても、通婚関係はない。ゴートラの間に地位の相違はない。結婚すると、少女は母に連れられて毎月二回夫の家を訪れ、祭式に参加する。このとき妻は、夫の後ろにまわって、ダルバ草で夫の肩に触れる。ここに一体であると同時に、主従の関係があるという夫と妻の関係が明瞭に認められる。なお、夫妻は同居するまで口をきいてはいけない。初潮が始まり、同居が可能となると判断されると、初めて実家から夫の家に移り結婚生活に入る。妻は、夫を神に等しい者とみなして仕えなくてはならない。夫が死んだ場合、女性には再婚が禁じられている。これは死が同居前に生じた場合でも同じである。再婚は男性のみ可能である。

しかし、通婚圏はチダンバラムを越えないため、結婚後夫方で居住するとしても、女性の側にそれほど孤立感が生じるというものではない。同じことは、未亡人の処遇にも認められる。彼女たちが惨めな生活を強いられているとは思われない。先に述べたように毎月生理中は実家に帰らねばならないし、出産の場合では妊娠八ヶ月から実家に戻ってそこで出産する。また、女性の地位の低さとの関連でしばしば採り上げられるダウリ（持参金）も、二〇〇〇ルピー（約一万元）と少額で、社会問題とはなっていない。子供についても、女子に比べて男子への偏向が強いとは思われない。女性は、不浄の源泉として排除されたり、また母とみなされるのではなく、何よりも妻として夫の宗教生活の要とみなされている。それゆえにまた、厳しい管理の下におかれているといえる。

なにもディークシタルに限ったことではないが、淨性にこだわるブーラーマンの特徴として、女性の管理がきびしく、男女とも他カーストとの交友範囲が狭くなるという傾向がある。

5. チダンバラムのブーラーマンたち

ブーラーマンの伝統的な職業は司祭や学者だが、一言でブーラーマンと言っても、様々な集団が存在する。インド全体で考えると、同じブーラーマンでも、言葉が異なれば個別の集団を形成するし、また同じ言葉をしゃべっても、地域的にさらに細かく分かれているというのが実状である。そして、同じ地域に住んでいても、ブーラーマンというカーストの内部でさらに細かい集団（サブ・カーストまたは亜カースト）に分かれる。ただし、このような細分化は、ブーラーマン以外の人々にはあまり知られていない。

さて、タミルナードゥ州ではブーラーマンと呼ばれるカーストがいくつかに分かれているという報告はあるが、それらの関係は地域的な差が大きく、一般化することはなかなか困難である。しかし、よく言われていることは、どの様な神を信仰するかによってまず大きく二つに分かれるということである。それはシヴァを信仰するシヴァ派のブーラーマンとヴィシュヌを信仰するヴィシュヌ派のブーラーマンである。両者の間に、優劣の差というものは原則的には存在しない。各々が、その内部でさらに細かく分かれている。学問を伝統的に行なってきたブーラーマンが最も地位が高く、つぎに、かれらの通過儀礼や家庭祭祀を司る司祭を伝統職とするサブ・カーストが存在し、さらにブーラーマン以外のカーストの通過儀礼や家庭祭祀の司祭を伝統職とするブーラーマンが続く。その下に寺院の司祭が位置する。もちろん、これは伝統的な職業によって地位の序列化を試みた場合のことであって、現在多くのブーラーマンたちはこのような伝統職についてはない。

寺院においてディークシタルとともに宗教儀礼に関与するのは、ソーリヤーと呼ばれるブーラーマンである。後者は多いときには六人いたというが、現在は三人いる。相互に親族関係があり、代々この寺院で宗教儀礼に関与してきた。かれらの基本的な義務は、ディークシタルを補佐する形で、本尊への日々の礼拝やホーマの時に呪文を読唱することである。

ソーリヤー・ブーラーマンは、ある意味で儀礼を執行するディークシタルよりも儀礼の進行について詳しく、呪文を熟知している。かれらなしに、大きな儀礼は進行しないといつてもよい。このため、かれらは尊敬をこめて尊師と呼ばれる。同時にかれらはディークシタルの家庭司祭でもある。すなわら、かれらは、ディークシタルの妊娠、出産から婚礼、

死にいたる通過儀礼や祖先崇拝などを執行する。かれらは、他のカーストの家庭司祭となることを禁じられている。新築儀礼や厄災を祓う儀礼を行うことができるだけである。なおソーリヤーの家庭祭祀は自分たちが相互に行う。他のブーラーマンがするということはない。

ソーリヤー・ブーラーマンのもつ知識は、ディークシタルより優っていると思われるが、にもかかわらず、その地位はディークシタルより低いことを自他ともに認めている。むしろ、ナタラージャ寺院を訪ねる有名な政治家や芸術家、聖者たちと接することのできるのはディークシタルがわれわれに与えた権限のおかげであり、この寺院で働くことを名誉とするとさえ述べている。

ディークシタルは、ソーリヤー・ブーラーマンが寺院の司祭を務めることができないから、自分たちより地位が低いと言う。ディークシタル家庭祭祀には、ソーリヤー・ブーラーマン以外にアイヤル・ブーラーマンが参加することもある。かれらは儀礼の執行者ではなく、呪文を唱えたり、祖靈として供物を受け取る脇役にすぎない。しかし、アイヤル（あるいは別名スマールタ）の中には、家庭司祭の役目を他のブーラーマンにたいして行う者もいる。アイヤルはシヴァ系のブーラーマンの中で多数を占める。それはさらにいくつかに分かれるが、そのなかでヴァダマーのみがナタラージャ寺院に関係する。

ヴァダマー・ブーラーマンの役割は多岐にわたるが、まず料理人として毎日の供物を用意する。寺院の台所には全部で六人の料理人がいて、三人ずつ朝夕交替で供物を用意する。

また、ティルマンジャナムという役目もヴァダマー・ブーラーマンが担当している。それは礼拝時に必要な水などを運ぶ雑用役である。シッサバーとムーラスターाを担当するものが朝夕交替で二人、シヴァカーミ女神寺院に一人、パーンディヤ・ナーヤカ寺院に一人いる。かれらはシッサバーの中に入ることができるが、神様に触ることはできない。

類似の役にティルッタールムライという役がある。本来はヴァダマーが行うのだが、今はどちらもディークシタルがこの役に就いている。これは、礼拝で使用するランプなどの道具を磨いて綺麗にしたり、礼拝中にこれらを司祭に手渡す役割を果たす。二人で朝と夜交替し、シッサバーとムーラスターाの二社を担当する。

最後にサヴァンディ・ブーラーマンとよばれる二人のブーラーマンに触れておく必要がある。サヴァンディ・ブーラーマンはラーマンの中でいちばん身分が低い。また不吉な存在とみなされている。かれらの仕事は、死や邪神あるいは悪霊たちに関わる。サヴァンディ・ブーラーマンは、ディークシタルの死体を火葬場まで運び、一日目には喪主から食事を受ける。ま

た、新築儀礼では邪靈を宥めるために、動物の代用として冬瓜を切断する。これを切断するのが、サヴァンディ・ブーラーマンの役目である。寺院での大きな祭りの最初の日あるいは何か突発的な不淨が寺院周辺や内部で生じた場合に、火をつけた藁束を引きずって邪靈たちを宥める。この藁を引きずるのがサヴァンディ・ブーラーマンである。このような儀礼は不淨に関わるのでディークシタルやソーリヤー・ブーラーマンが直接執行することはない。

サヴァンディ・ブーラーマンは、必ずしも世襲集団ではない。かれらはたんに貧しいからこのような危険で不淨な仕事についているのだと言う。だが日常生活ではブーラーマンとして守るべき規則を守らないから不淨であり、ディークシタルやソーリヤー・ブーラーマンの家の内部に入ることは許されない。ちなみに、他のブーラーマンでは、死体を近親の者が火葬場まで運ぶ。他のカーストでは、不可触民を呼ぶこともあるという。

他の寺院ではサヴァンディ・ブーラーマンのような役割を果たすものが存在しない。ナタラージャ寺院では考えられることだが、他の寺院では同じサヴァンディ・ブーラーマンが祭りの時に祭祀像を運ぶことさえある。したがって、この地域では、ディークシタルたちがとくにこの種のブーラーマンを必要とすると言える。

6. ディークシタルとグルッカル

以上、ナタラージャ寺院と、その司祭でかつ管理者であるディークシタルおよびかれらを取り巻くブーラーマンたちについて検討してきたわけである。最後にディークシタル以外のブーラーマン寺院司祭との比較をしたい。

南インドの巨大なシヴァ寺院にはその寺院に密接に結びついた司祭集団が存在する。例外もあるが、その多くはグルッカルとかアーディシャイヴァと呼ばれる人々であり、他のブーラーマンに比べると地位が低い。かれらはブーラーマンとみなされないこともある。地位が低い理由のひとつは、かれらが寺院司祭として多くの人々に無差別に奉仕する这样一个に求められる。家庭祭祀の司祭の場合も含み、他人へのサービスで生活をするブーラーマンは地位が低い。また、かれらの知識はけっして高いものではない。

しかし、当の寺院の司祭たちはこのような主張を受け入れているわけではない。かれらだけが、寺院に安置されている本尊に近づき、接触することができる。他の人々、かれらより地位の優位さを誇るブーラーマンさえ、本尊に触ることはおろか、内陣に入ることさえも許されていない。したがって、寺院の内部における神への近さからカーストの地位の優劣を考えるならば、司祭が最も地位が高いと言うことになる。だが、グルッカルの主張

にもかかわらず、かれらの地位が相対的に低いということは一般に認められている。

すこし細かな事例を挙げよう。グルッカルには、各家庭に代々関係を継承するグルと呼ばれる尊師がいる。かれも同じグルッカルの一員である。かれは寺院で行われる儀礼に参加し、呪文を唱えてその進行を指導する。しかし、儀礼を実際に執行するのは寺院の司祭である。ここにはディークシタルとソーリヤー・ブラー・マンとの間に認められたのと同じ分業形態を認めることができる。しかし、その地位に関する認識は逆転している。グルの方が寺院司祭よりも地位は高いとみなされているのである。この相違はどこから来るのかを以下で考えてみたい。

ディークシタルとグルッカルの相違を説明する要因として最初に指摘できるのは教義に関する事である。グルッカルは中世に成立したと言われるアーガマという聖典に基づいて儀礼を執行するのにたいし、ディークシタルの方はインド最古の聖典ヴェーダに則って儀礼を行う。そして、礼拝で印契をしたり香煙を使用しない。ディークシタルたちがアーガマよりも古いヴェーダに則って儀礼を行うということが、その地位の高さの理由のひとつと考えられる。

グルッカルが司祭になるためには、四段階のイニシエーション儀礼を受ける。これによってはじめて、寺院で礼拝を執行する資格を得、シヴァーチャーリヤと呼ばれる。第二段階からのイニシエーションは結婚が条件となる。ところが、ディークシタルたちは結婚だけが司祭となるための条件であって、結婚後一定の年齢に達すると寺院で礼拝をすることができる。イニシエーション儀礼を受ける必要はない。かれらは生まれながらにしてすでに司祭というわけである。

グルッカルたちはシヴァが自分たちの祖先であると考えているが、さきのディークシタルの神話では、シヴァはディークシタルの一員であった。両者の神話を比較すると、ディークシタルの方がシヴァ神との距離が近いことになろう。

最後に、現世放棄者との関係について触れておこう。九世紀の聖者であり思想家であったシャンカラは四つの僧院を創設した。そのうちの一つとみなされているカンチープラムの僧院長シャンカラーチャーリヤはグルッカルにとってサブ・カースト全体のグルである。同じことは、アイヤルなどのシヴァ派のブラー・マンにも妥当する。ところが、ディークシタルは、シヴァ派ではあるがシャンカラーチャーリヤにたいして特別の感情も身分的な差も感じてはいない。かれらの上に立つのはシヴァ神だけである。換言すると、ディークシタルはシャンカラーチャーリヤなどの高僧（現世放棄者）との関係で身分を低く考えると

いうことはない。かれらは現世放棄というスタイルに高い評価を与えていないと言ってもよからう。

以上の諸要因が、グルッカルよりも地位が高いというだけでなく、チダンバラムでディークシタルの地位が最高位であるという考え方についでいるように思われる。さらに、知識の高さや淨性、女性についての管理、寺院の共同管理にみられるような経済的自立度の高さなどがディークシタルの地位の高さと密接に結びついている。

7. まとめ

ここでは南インドのヒンドゥー寺院を中心とするヒンドゥー教の実態とそれに密接に関わっているブーラーマン司祭たちの生活、さらに他のブーラーマン集団を紹介し、集団間の関係を考察してきた。チダンバラムにみるこうしたブーラーマンのサブ・カースト間の関係は必ずしも南インド全体に一般化できるものではない。いくつかの理由からむしろそれは例外的とみなした方がよいと思われる。その意味でわれわれはまたインドの多様性を知らされたことになったのかも知れない。

〔田中 雅一(たか まいち)先生 略歴紹介〕

(学歴等)

- 1955年3月 和歌山市に生まれる。
- 1973年3月 和歌山県立桐蔭高等学校卒業。
- 1978年3月 東北大学文学部（宗教学・宗教史専攻）卒業。
- 1980年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程前期（修士）終了。
- 1986年7月 ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（ロンドン大学）
大学院人類学科 Ph.D 課程終了。

(職歴)

- 1986年8月 国立民族学博物館第2研究部助手
- 1988年6月 京都大学人文科学研究所助教授。
- 1990年4月 国立民族学博物館客員部門助教授に併任。

(主要論文)

- 1981年 ヒンドゥ教の人類学的研究における二つの立場——「原子論」と「全体論」
『論集』8号。
- 1986年 礼拝・アビシェーカ・供儀——淨・不淨から力へ；スリランカのヒンドゥ
寺院儀礼『民族学研究』51号。
- 1987年 バクティをめぐる一考察『民族通信』35号。
- 1989年 カーリー女神の変貌——スリランカ・タミル漁村における村落祭祀『国立
民族学博物館研究報告』13巻3号。
- 1989年 クリシュナからクリシュナーへ——スリランカ・タミル漁村における
『南アジア研究』1号。
- 1989年 ヒンドゥ奉納儀礼の研究——カーヴァディとそのコンテクスト——
田辺繁治編著『人類学的認識の冒険』同文館。
- 1989年 For a Sociology of Hinduism ZINBUN: Annals of the Institute for
Research in Humanities · Kyoto University
- 1990年 司祭と靈媒——スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の分業関係
『国立民族学博物館研究報告』15巻。
- 1991年 ヒンドゥ王権論再考——スリランカ、ムンネーシュヴァラム寺院の
松原正毅編『王権の位相』弘文堂。
- 1991年 ヒンドゥ教の神々——その「体系的記述」をめぐって 谷 泰 編『文化を
読む——テクストとフィールドのあいだ』人文書院。
- 1992年 自立への志向と相互依存： 南インド・シヴァ寺院におけるブーラーマン司
祭の世界 長野泰彦・井狩弥介『南アジアの宗教と社会』法藏館（予定）



インド思想・仏教へのいざない

——十七条憲法の制定とその前後（覚え書き）

山 口 恵 照

(大阪大学名誉教授・東方学院講師)

「遠くて近い国」といわれることがある。インドは日本にとって、特に仏教を通じて見ると、長い間、遠くて近い国であった。

「長い間」とは、仏教が日本に伝えられてから明治にいたるまでを意味する。仏教が大陸から日本に伝えられたのは西暦六世紀前半⁽¹⁾、欽明天皇の時代である。それより明治（1868年）にいたるまで、種々様々な消長・変遷はあったけれども、仏教は伝来当初の基本線に則して展開し、一貫して日本の文化に大きな影響を及ぼして來た。

古来、日本人には、大陸から伝えられた仏教を通じて「仏陀（ぶだ）の国・インド（印度）」に対する大きな憧れと尊敬の念があった。そしてインドへ行きたいという願いをもつものも少なくなかったが、この願いは、日本が大陸と海によって隔てられていた事情もあって、なかなか果たせなかった。平安時代のはじめ、真如法親王（平城天皇の第三皇子・高岳親王）⁽²⁾は唐に渡り、唐から雲南、ラオスを経てインドに向かったが、途中で客死し、雄図を果たし得なかった。かれがインドに向かったのは真言密教のルーツを究めるためであり、これは当時インドにおいて盛んであった大乗仏教の奥義にかかわるものであったと云われる。

日本に伝えられた仏教は、周知のごとく伝来の当初から主として大乗仏教であった。これは、東アジアに伝えられた仏教が主として大乗仏教であり、これが朝鮮半島を経由して伝えられたからである。

この場合、留意すべきは次のことであろう。仏教がインドから東アジア——中国に伝えられたとき、中国において翻訳され定着して中国的仏教となり、漢字文化圏の一環として中国固有の漢字文化とともに日本に伝えられた。このことは、飛鳥時代に法隆寺が建立されたとき、その建築様式が当時の中国や朝鮮の国々の寺院に倣って、いわゆる七堂伽藍の様式をもったこと、また、この寺院を学問寺として大乗經典『法華經（妙法蓮華經）』『維摩經』『勝鬘經』が学ばれたとき、これらの經典がすべて漢訳であり、經典を講じた師匠は大陸や半島から渡來した異邦人であったこと、これらのことからして明瞭である。

法隆寺を特徴づけた七堂伽藍の様式はその後、奈良時代にいたって大きく継承され、金堂・講堂・塔・鐘楼・經蔵・僧房・食堂という、総じて七類を基調とし、周知のように真言宗や禪宗のそれぞれ特色ある七堂として展開した。

法隆学問寺において大乗經典が学ばれたことは史実によってよく知られている。ここに

次のことが想定される。それは、『法華經』等の大乗經典が推古帝・聖德太子等によって学ばれたとき、大陸伝来の漢訳經典をテキストとして当初は中国固有の漢訳式読み方によって理解したものを次第に日本語式読み方によっていくように努め、これに成功したこと、である。書紀の記録では、『法華經』等の三經典が学ばれたのは五ヶ年という比較的短期間ににおいてであり、この期間に三經典の注釈書が聖德太子によって『法華義疏』等としてまとめられ、このうち『法華義疏』は太子の真筆本が今日に伝えられている。このことは、単に驚くべきことというよりは、当時の学問が相当に進んでいて、漢訳仏典を独自に理解する素養すら偲ばせるものがあり、留意を必要とする。「素養」というのは、漢訳仏典とは別に当時伝えられていた中国固有の漢字文献に対する理解度を意味する。恐らく幼少年期において、漢字漢文に接してこれを読んで理解する慣わしがあり、しかも漢字漢文に対する理解が相当に行き届いていたに相違ない。漢訳經典がインドに生まれたサンスクリット（梵語）の經典（ストラ、修多羅）の翻訳として独自のスタイルをもっており、固有の漢文のスタイルから見れば異流の、ときには破格のものであった、ということを承知の上で『法華經』等⁽³⁾が学ばれたことは、『法華義疏』等の注釈が、中国的学び方に準じて学ばれた漢訳經典はインドの仏典をテキストとして生まれたことを明確に意識して著わされている、ということから知られるのである。

- (1) 「上宮聖德法王帝説」（以下、「帝説」とも略する）の所説による。尤も、仏教の公伝の時期（西暦538年）は正しくは宣化天皇期（535～538年）に連なる。
- (2) 高岳親王は高丘親王とも伝える。真如法親王は真如親王とも伝え、いずれも出家得度後の僧名。唐にも見切りをつけて、当時の日本人としては破天荒な、実際にインドを目指した真如法親王の足跡はマレー半島南端に及んだのであるが、遂にそこで玉骨を埋められた。杉本直治郎『真如親王伝研究——高丘親王伝考——』（昭和40年、吉川弘文館）参照。
- (3) 『維摩經義疏』にいう、「維摩詰」とはインドのヴィマラキールティを音写したもの、中国（秦）では「淨名」と意訳する。「經」はストラ（修多羅）と音写する。

聖德太子において、その幼少年期、漢字漢文に対する素養が積まれたということは、飛躍するようだが、インドにおいてサンスクリットの学習の慣わしが古来、アーシュラマ（

住期) の方式によっていることからして間違いないことだと推定される。

インドにおけるサンスクリットの学習の慣わしは、仏教の開祖・釈尊の誕生以前に始まり、ウパニシャッドではバラモン・クラス（司祭・教育の階層）の務めとして伝えている。これを「梵行(ぼんぎょう)」（プラフマチャリヤ）と称することは、釈尊が梵行を修めたことからも知られるが、釈尊が梵行を修めたことは、釈尊の菩提樹下における成道（成仏）の宣言にもとづいて知ることができる。いわく「生すでに尽き、梵行すでに立ち、……」と。この宣言は梵行の成就を意味するから、この場合、梵行の成就をもたらす梵行の開始と経過とが問われねばならない。

梵行の開始はクシャトリヤ・クラス（王族・武士の階層）に属する釈尊にあっては、バラモンと同様、人生の初頭——幼少年期にあった。「日常生活に不自由しない、めぐまれた環境において学問・武芸に従事した」と仏伝に記すのは梵行の経過を示していると考えられる。聖徳太子が幼少年期において学問・武芸につとめ、これに秀でたことは一般に知られているが、この場合、日本語・日本詩（和歌）をはじめとする日本のもうものの伝統に対する素養を身に付けながら、一方、当時の異国の先端文化に接してこれを攝取したことは想像に難くない。筆者はこの点を考察して、梵行に従事すること釈尊のごとくであったと判断したい。というのは、太子の場合、後に大きく実を結んで摂政の偉業となつたからである。(1)

聖徳太子は推古期を通じて摂政であった。摂政とは周知のように天皇に代わって国政を司る最高責任者を意味する。これはしかし、太子の場合、仏教を重んじてこれを日本國の平和のための普遍的原理として掲げ、この原理を具現化しつつ日本國の末永い平和・安泰を企図した点、特に留意を要する。当時の日本國には、国論を二分し国運を左右する問題があった。今日流にいえば、異国の仏教の採否に関して開国（容認）か鎖国（拒否）かいずれを選択するかという問題だが、当時の二大氏族であった蘇我・物部の両氏がそれぞれ開国派・鎖国派に相別れて国政の主導権争奪の死闘を演じ、その結果、蘇我氏が勝利をおさめた。しかし、その後の政情は天皇家をめぐってなお不安定であった。このような状況を背景として始まった推古天皇期の摂政聖徳太子には一つの決断が生まれた。——日本國の末永い平和・安泰をもたらすためには、政権を担当する最高責任者をはじめとして国政の枢要を占めるすべてのものが勝敗を超えてめざすべき平和の理念と、この理念をめざさしめる普遍的原理を具現化しなければならない。

摂政としての太子のこのような決断が法隆学問寺や四天王寺の建立・経営、「法華經」

等三経の講讀となった、と筆者は考えたい。

国政の担当者がめざすべき平和の理念とは、十七条憲法の第一「和をもって貴しとし、忤うことなきを宗(むね)とせよ」という和の精神に示唆されている。このような平和の理念は仏教の普遍的原理の具現化によって着実にめざされなければならない。憲法第二条はこのような要請によって掲げられた。「篤く三宝を敬え。三宝とは仏と法と僧なり。すなわち四生の終帰、万国の極宗(お結ぬ)なり。」

三宝とは仏教の全体を意味する。これによって仏教の全体が尽くされるのである。生きとし生けるものの最後のよりどころであり、あらゆる国々が仰ぎ尊ぶ究極の規範である三宝を心から敬い、三宝を興隆させることは、仏教の普遍的原理を具現化し、日本國の眞の平和・安泰をもたらす所以(ゆゑん)にほかならない。ここに、法隆学問寺が建立され、篤敬三宝において『法華經』等三経が学ばれ講述されて『法華義疏』等三経の注釈が著わされた所以を認めることができよう。

総じて国の中基本法である憲法の最初に和を貴ぶべきことが主張せられ、そのための篤敬三宝と三宝興隆の決意が表明されたことは、恒久の平和・安泰という日本國の目標を実現するための普遍的原理の具現化が仏教の導入によって図られたことを意味する。そしてこのような国是の大本はその後歴代王朝によって継承され、大きく発展したのは天平の時期においてであった。奈良の東大寺の建立、大仏開眼の供養は、仏教を基調とした文化の発展のピークを象徴するものである。

大陸伝來の仏教による、このような文化発展の過程において注目すべきことは、神仏習合という事態である。「神仏習合」とは、神と仏とは一つであるということで、日本固有の神と異国より渡来した仏とは本地（本源）と垂迹（化身）との関係にあり、仏は神々の本源にして、本源の仏が権（仮）りに神と現われたもうたものゆえ、仏と神とは不二一体である、というのである。⁽²⁾

こうして春日大社の祭神は東大寺本尊・毘盧遮那仏（びるしやなぶつ）の化身にましますということになった。このような神仏習合の思想が諸仏と神々との融合を可能ならしめ、神仏の対立・競合でなくして平和共存を実現して仏教を日本の国土に定着させ、日本文化の発展の一基調となったと考えられる。

仏教は大陸から渡来して以後、異国情緒ゆたかな仏像・仏画・堂塔・伽藍をもって日本の固有の文化を圧倒したようだが、単にそのようではなくて、思想や文学の点で、決定

的な影響を及ぼした。このことは、仏法僧という三宝が人類の思想の普遍性に立脚して当時の国是の目標を充足し、人心の収攬を可能ならしめた点からして想像に難くない。この点については、時代は後になるが、四方僧伽（四方の人）の模範・鑑真和上を記念した唐招提寺とほぼ時期を等しくする次の歌を想起してよいであろうか。——あをによし、ならのみやこは咲く花の、薰ふがごとくいまさかりなり。

仏教が大陸から渡来したとき、その採否が異国の強大な武力を背景とすることなく、受入側に属する国政担当者の主体的選択に委ねられたことは、幸いであったといえる。このことは、日本の思想・文学の歴史をかえり見て評価すべきものではなかろうか。（3）

- (1) 太子は幼少の頃から聰明で知恵があった。大人になってからは、一度に八人の言うことを聞いてその言い分を聞き分けた。そこで、お名前を厩戸豊聰八耳命という。（『帝説』第二部） 帝説については、中村 元 編集『聖徳太子』（「日本の名著」2、中央公論社、昭和58年）参照。
- (2) このような「習合」の事態は広く解すれば「二者不二」とも考えられ、大乗仏教においては夙に神々は仏（釈尊）家の眷属として仏弟子とともに對話衆となつた。また、釈尊の世寿は人壽として有限であるが、本壽を数えれば無量であり、無量劫のいにしえにおいて成仏し、今、娑婆世界に人間として化生し、方便身をもって衆生濟度に從事しているのだという。『法華經』方便品においてもこのように本覺（本生仏）と始覺（現身仏）の不二を説く。
- (3) この点は、明治維新の開国・文明開化の歩みが、「黒船」の到来等「外圧」を契機としたことに比べられよう。

この場合、さきにとり上げた「神仏習合」の発想に留意したい。神仏習合というのは、仏は本地であり神は垂迹であるという考え方である。本地は本源を、垂迹は本源の仮現、つまり、仮の姿（権現、ごんげん）を意味する。日本の思想の歴史において、このような神仏習合が果たした役割は誠に大きい。これは、仏主神従、あるいは神主仏従という主従の関係において、仏教の下に神道を、あるいは神道の下に仏教を従わしめるというのではなくて、仏（本地）が衆生（全人類）を普く濟度（救済）するという大願をもって神をこの国土（日本）に遣わしめたもうたのだ、という仏の無量心とこれを果たそうとする菩薩の大行（たいぎょう、利他行）とを基調として、日本の思想史、文学の伝統に大きな影響を及ぼしたと看られるからである。

摂政以前の聖徳太子について留意したいことがある。それは太子の幼少年期において中国の漢字漢文の素養が積まれたことである。(1) このことは次のように評価されよう。

一、当時の学識クラスに準じて漢字漢文を学び、これを日本語で理解した。このことは、漢訳仏典を本格的に学ぶ準備を意味する。

二、インドの教養クラスがいにしえから伝えた四アーシュラマ（人生の四期）の最初の時期である学道期に準じて、立派な大人となって活躍するための教養と一生涯の課題である人間完成のための素養が積まれた。(2)

一について 『法華経』等の三経が講学せられ、三経それぞれの義疏がまとめられたことは、少数の優れた研究者の存在を評価させるだけではなくて、漢訳經典が日本語で理解され、その成果が漢文で表現されたことを意味し、仏典の講学のその後の基本路線を方向づけたといえる。この場合、漢訳經典が日本語で理解されその成果が漢文で表現されたことは、その過程において漢字の日本語式の発音（読み方）、ならびに漢文の日本文式読み方が進行していたことを予想させるものであって、前者は萬葉仮名による萬葉集の編集を、後者は訓点による〔仏典〕漢文の日本文式読み方を案出したと考えられる。

萬葉仮名は周知のように、当時にいたるまで伝承された口伝の日本語の音韻を示す表音文字として漢字を用いたものであり、これはやがて片仮名・平仮名としてまとめられた。また、訓点が考案される以前、準訓点ともいるべき「ヲコト点」が案出され、やがて訓点として完成されて、漢文のスタイルをそのままにして日本文式に読むことを容易ならしめたと考えられる。

このようにして大陸文化と接触する以前の日本語・日本文の伝統は仏教の伝来以後、漢字・漢文を元手(もと)として文献（文書）の基礎となる文字を案出し、口語文（はなし言葉）の文字化に成功したことが明らかであって、その歴史は比較的新しいけれども、『源氏物語』『枕草子』が示唆するごとく、中国式漢詩漢文のスタイルのほかに、和歌に倣った漢字仮名混淆のスタイルを開拓することになった。この点は仏教文献（仏典）の歴史に關しても注目さるべきである。

二について 『法華経』等の仏典の講学に参加した者の幼少年期を学道者として意義づけることは、釈迦のアーシュラマ第一期における「梵行」に対応させて理解すべき二つの点を偲ばせる。一つは漢訳仏典を理解する前提として漢字漢文を学びこれに習熟したこと。もう一つは釈尊の梵行が当時の慣わしとはいっても、釈尊自身の求道を促して、釈尊をして人生の最大の問題である生死を解いて「さとり」を開き、涅槃（ねはん、寂滅）を実現

することをめざさしめたように、太子の学道期は後に「法華經」等の仏典の講讀によって仏教を体得し、「篤敬三宝」⁽³⁾の仏教者を指導者とする和國（平和日本）の樹立をめざしたという点から首肯されるであろう。

仏教が日本に伝えられ公認されたのは前に述べたように、聖德太子の摶政就任にさき立つこと約半世紀前、欽明天皇の時期であった。仏教の公伝以後、聖德太子の摶政就任にいたるこの期間、仏教の採否をめぐって日本の政情は安定していなかった。しかし、鎮國派の物部氏が敗退し、推古天皇・聖德太子摶政の時期を迎えて以後、「仏教興隆」の詔が発せられて、仏教による文化興隆の国是に基づく基本法（十七条憲法）、官僚組織の大本（冠位十二階）が定められ、大陸（中国）から留学生・学問僧が招かれて、法隆学問寺において「法華經」等の大乗仏典が講学されたことは、総じて仏教を中心として文化興隆の基本路線を方向づけたものであるから、その意義を前記のごとく客観的主体的に理解し評価することは認められてよいであろう。

聖德太子の没後、間もなく推古天皇の崩御と相成り（628年），この後、大化革新を迎えて蘇我氏に代わる藤原氏が出現する（646年）が、政情は必ずしも安定しなかった。けれども、推古期に始まった内政・外交の基本は歴代王朝を通じて継承せられ、仏教は文化の基調として重んぜられ発展の路を辿って行った。造寺・造塔に関していえば、川原寺（655年）、崇福寺（668年）、大安寺（673年）、薬師寺（680年）、山田寺（685年）、法起寺（685年）、長谷寺（686年）等、幾多の寺院が建立せられ、持統天皇にいたって天下の諸寺五四五を数えたという（692年）。また、約半世紀にわたるこの間、新・仏典〔「無量寿經」（640年）・「金光明經」・「仁王經」（676年）等〕の講説が行なわれ、三論宗・法相宗等、新仏教学派の講学も始められたことが史書に記されている。

これらの事態は仏教を基調とする大陸文化の影響によるものであるが、単に大陸文化に影響されたとか、大陸文化を模倣した結果ではなく、新・律令制定、新・造寺造塔、新・仏典講学のすべてが積極的かつ主体的な文明開化を推進する営みであり、このような営みが奈良への遷都、平城京の建設となつたのではなかろうか。平城京は一面において大陸文化の模倣であるが、他面、仏教に学び仏教を基調として創めた独自の普遍的文化体系ともいるべきもので、いわゆる南都六宗はここに創まり、それぞれ独自の仏教学をもって平城京文化の基調をなし、その後の仏教講学の伝統を形成して行った。また、ここに記紀や萬

葉集が編集せられ、その後の歴史書や歌集の伝統の基調が形成せられた。

総じて日本文化の基調がこの時期に定まったとも考えられるが、ここになお注目すべきは主体的な崇仏敬神の伝統が窺われることである。推古天皇十五年（607年）に法隆寺が建立され、ここにおいて仏典の講学が仏教興隆の詔に呼応して始まり、同年「敬神の詔」が発せられ、また大陸中国との国交が開かれ、遣隋使・小野妹子とともに留学生・学問僧が隨行している。これは、すでに制定された基本法が新・官僚組織において運用される場合、固有の敬神の伝統が重視されたことを意味し、仏教を中心としてスタートした文明開化の営みが、海外諸国に追従する單なる崇隋倣外ではなくて、自主的な崇仏の精神と固有の神道とを基調とする主体的なものであったことを窺わせるのである。このような自主的主体的な傾向は、近代明治期の文明開化の精神をあらわす和魂洋才に対する和魂洋才ともいうべきものであり、神仏習合の発想を可能ならしめた背景となつたのではないかと考えられる。

- (1) 聖德太子は高麗の慧慈法師に就いて仏教を学び、「法華經」や「維摩經」等、大乗の深い教えに通じ、また、小乘部派の教えを学んだ。他方、中国の古典である三玄（莊子・老子・周易）や五經（周易・尚書・毛詩・礼記・春秋）、さらに天文・地理を学んだという（『帝説』第二部）。これによって太子の博識の一端を知ることができる。
- (2) ここにとり上げた二つの素養の中、前者については註(1)に述べたごとくである。後者については、いろいろあるが、要約すれば、太子の后・橘太郎女の太子追想の言葉に尽くされよう。——わが大王（聖德太子）は、世間は虚偽であり唯仏のみ真実であると申していました。以上は、法隆寺に蔵する繡帳二帳に縫いつけてある龜甲の文字である（『帝説』第三部）。
- (3) 十七条憲法第二条「篤く三宝を敬え」。第二条については、第十条、第十四条とともに、仏教主導の和國の要件を示唆する点に留意すべきものがある。

神仏習合の発想はだいたい、奈良時代にいたって定着した觀がある。推古期における仏教——飛鳥仏教はいわば新文化の潮流として、その後に到来した内政・外交の糸余・変転を通じて一貫し、約一世紀を経て平城京・奈良文化として開花したが、その際、固有の神道は「敬神の詔」の示すごとく、仏教に従属せしめられることなく存続し、仏教と連携・習合するにいたった。春日大社が興福寺に隣接して伝えられ明治維新にいたるまで共存の

形を維持したことは、神仏習合の発想のルーツをこの時期にさかのぼって考えさせるものである。

神仏習合の思想的根拠は、さきに述べたように本地垂迹・権化（化身）の考え方にある。総じて神々の存在は本地である仏に基づく。仏が現われて神となったのだ。それゆえ、神々は仏の化身である。仏が仮（かり・權）のすがた（相・姿）をもって現われたのが権現・権化であり、神がそれなのだという。

このような神仏習合の発想の源はさかのぼって見るとインドにある。インドにおいて大乗仏教が興ったとき、神々は仏の家の眷属としてその基本構想の中にとり入れられていたのである。

大乗仏教の初めには、通常、釈尊の説法を聴聞する対話衆として直系の弟子たちとともに諸菩薩・諸天が記されるが、このうち「諸菩薩」は仏道を歩む求道者たちであり、「諸天」は神々（デーヴァ、神・天）を意味する。従って、神々は仏の家（サンガ）のメンバーであるということができる。

また、この場合、仏はガヤー（伽耶）の郊外において悟った釈尊だけでなく、釈尊の本仏が出現し、釈尊はその本仏と不二の関係をもって語られている。このことは、神仏習合の発想に対応するものがあり、留意を要する。

釈尊（釈迦仏）はガヤーの郊外において誕生したが、その後、世寿八十歳にして衆生教化の縁の尽きるまで、衆生の導師（天人師）として活躍した。これは阿含經の仏伝によって明らかであるが、このような導師は今日流にいえば「人類の教師」として他に比類がなく「無上士」と呼ばれるにふさわしい。このことはひるがえって考えると、釈尊（釈迦牟尼仏）が人間として誕生する以前、つまり前世（過去世の生涯）において成仏のための多くの修行をつみ重ねた結果であるに違いない。稀有の無上士となった釈尊はカピラ（迦毘羅）城において釈迦族の王子として誕生する以前、いかなるものであったのか。というに、釈尊はこの世に誕生して仏となるにふさわしい修行をすでに遠い過去において開始し、多くの修行をつみ重ね、それを踏まえてこの世に誕生し、修行を全うして成仏したに相違ない。このようにして釈尊の過去世の物語は釈尊の前世（前身）を経じて成仏の因たる菩薩行をもって次のように特徴づけたと考えられる。——およそ菩薩はその修行、つまり菩薩行をもって必ずしも佛となるもの、すなわち佛の候補者の地位にある。釈尊は過去世において菩薩行に従事したに相違ない。

菩薩とは「菩提薩埵」の略称である。菩提薩埵とは、菩提心つまり道心をもって仏道の

修行にはげみ、仏（観者）たらんとするもののことである。ここに菩提心を道心といったのは、「阿耗多羅三藐三菩提心（あくたらさんみやくさんぼうしん）」を無上道心と名づけるところからであり、さとり（観）をめざして仏道の実践にはげむ菩薩の求道心を意味する。

ところで、大乗仏教になると、菩薩は注目すべき新たな意義を担うにいたった。本生物語（ジャータカ）のごとく釈尊（釈迦佛）の因位をその過去世に位置づけて顯出した菩薩から転じて、すべての衆生がもし釈尊のごとく菩提心を發して修行にはげむならば、将来、必らず成仏する。――

大乗仏教はこのように釈尊の菩提心を生きとし生けるすべてのもの（一切衆生）に向かって開放した点に劃期的な意義をもつが、ここに問題が生ずる。たとい釈尊の菩提心を一切衆生に開放しても、一切衆生が菩提心を發し得ないならば、それは無意義である。しかしそれは無意義というべきではない。なぜならば、一切衆生は悉く仏性をもっていて、修行にはげみ仏となること（成仏）ができるからである。それゆえに留意すべきは、菩提心は釈尊の場合のごとく一切衆生に向かって開放されねばならないということである。たとい仏道修行にはげむことができても、人は皆、常にすべての生類をその苦惱から解放しようと願うことができなければならない。このようにして、上求菩提・下化衆生といい「自利利他」というのは、菩提心の本質を現わさんとするものであると考えられる。(1)

ここに四弘誓願も連関している。これは要するに、一切の煩惱を断じてすべての衆生をさとりの彼岸に渡そうと願い、仏の教えのすべてを学び、無上のさとりを成就しようと誓うことにはかならない。

衆生無辺誓願度 煩惱無量誓願断

法門無尽誓願學 仏道無上誓願成

無辺の衆生を度し無量の煩惱を断じ、無尽の法門を学び無上の仏道を成就しようと常に努めて怠らない。――法隆学問寺において仏典の講学・講説をもって始まつ大乗仏教の菩薩行(1)は、その後の仏教の伝統の枢要とせられ、やがて天平期の三宝興隆を迎えたのであった。また、この間、大陸の仏教国へ留学生・学問僧が派遣せられ、大陸の仏教の積極的な受容が企てられたことは、総じてその後の仏教の発展に寄与したと考えられる。

- (1) 太子は「勝鬘經」「維摩經」「法華經」三經の義疏を著わしたが、これらはいずれも大乗菩薩行を解いて末永く伝えるためであった。太子は勝鬘夫人を七地の色身と看なして、十大受・三大願の修行を自身の行動に比べ、また、維摩居士のごとく空觀に立って在家（在俗）のままで理想を實現する道を讃え、さ

らに、生きとし生けるすべてのもの（衆生）の濟度を目指す方便仏を解く『法華經』によって大乗至極の教えに帰している。

また、聖德太子は周知のように、四天王寺を建立した。七つの寺院を建立したともいう。四天王寺と法隆寺と中宮寺と橘寺と蜂丘寺と池後寺と葛寺とである（『帝説』）。四天王寺は仏法と仏法に帰依する人を守護する四天王、すなわち、持国・增長・広目・多聞の諸神を祀り、国家の平和を守護するが、他方、境内に、施薬院・敬田院・悲田院・療病院の四院を建てて、社会福祉事業の先駆となった。

聖徳太子の摂政の時期は、年表によると、推古天皇の元年から三十年までとなっている。この時期における仏教受容の趨勢はさきに述べたごとくであるが、この時期を中心とする前後の国情は年表を一見しても只ならぬものが伺われる。端的にいえば、内外ともに非常時であった。しかし、三宝興隆に基づく国運隆盛の機運はこの時期において明確に方向づけられた観がある。そこで、聖徳太子摂政の時期を、その前後の時期と併せて一覧してみたいと思う。

百済の聖明王が仏像などを伝えたと『上宮聖徳法王帝説』に記す仏教の公伝から約半世紀余、仏教に好意的（？）であった百済からは丈六の仏像のみならず（546年）、医・易・暦等の博士が来朝し（554年）、経論や僧・仏工が献上された（577年）。一方、新羅からも仏像が献上されて（579年）、仏像礼拝の可否が蘇我・物部両氏の政権争奪にからんで漸次やかましい問題となってきたようである。「蘇我馬子が塔を大野丘北に起こす（584年）」「物部守屋らが仏像を難波の堀江に投ず（585年）」とあるのはこのことを表しているのだろう。このようなとき、百済は仏舎利、餽盤博士、瓦博士、画工を献上している（588年）。またこの頃、法興寺の建立が着工されている（588年）が、内外の情勢には風雲急を告げるものがあった。対外的には半島經營の失敗があった。高句麗の南下により日本に援兵を請うていた（547年）百済は、新羅と戦って敗れ（554年）、いろいろな経緯のあった任那の日本府が新羅に滅ぼされ（562年），それ以後、新羅の征討、任那の復興の道詔は出された（571年）けれども、半島經營は意のごとく進まなかった。半島への対応をめぐって、蘇我馬子大臣、物部守屋大連の両者が国政の主導権争いを演じ、両氏の紛争が激化したのである。やがて物部氏を滅ぼした蘇我氏が制覇するにいたって、争いは天皇家に及んだ。ここに皇位の継承が危惧されるこのような

状勢に際して、「上和らぎ下陸び、上下ともに礼あって國家がおのずから治まる」ように念願されて登場したのが摂政皇太子である。摂政皇太子の重責は次の点で注目に値する。

一、天皇の国事の代行、国の最高責務の遂行。二、天皇と摂政の立場。

天皇の国事の代行として国の最高の責務を果たす摂政というのはなかなか困難な役割である。平常の時期はとにかく、非常の時期に際して決断をくだし責務を果たさなければならない。これを誤ることは許されない。しかし、総じて決断が個人のものである以上、決断をくだし得ないとき、責任のとり方が問題である。決断をくだし得ないとは、およそ進退きわまる場合を含むのであるから、このとき選ぶとすれば、名譽ある孤立において独自の道を選び歩み出すことだ。これをさし置いてほかに道はあるまい。

ここに新國是の大本が和の精神から創められた意義を思うべきであろう。というのは、内外ともに多難な情勢において発足した推古天皇期の最初から摂政となり、その第一歩が仏教興隆の詔であったことから窺い知ることができる。推古期第十二年に発布された十七条憲法の第一条に「和を貴ぶ」と記されているのは第二条の仏教興隆の精神に合致し、まず内外の平和安定を先決とすることを意味している。

ただし、十七条憲法が発布されたのは天皇即位後第十二年であり、この間、かなりの規模で新羅征討軍が派遣されている。これは新羅によって滅ぼされた任那の日本府の失地回復のためであったが、かなりの負担であったようで、第二回目の派遣軍の將軍であった来目皇子は筑紫において没している（603年）。

悲運というべきこのような状況において何が決断されたのか。年表を一覧して明らかであるのは、対外交渉・外交政策の変更である。対外交渉が対朝鮮第一より対中国（対隋）に転じ、平和政策主導に移ったことをうかがわせる。これは、冠位十二階の制定（604年）・十七条憲法の制定（605年）に続いて、遣隋使が派遣されたこと（607年）から知ることができよう。

小野妹子が遣隋使として隋に派遣されたことは、日本の外交史上、初めて中国と直接の交渉が開かれたことを意味し、劃期的なことである。これを裏付けるのが、翌608年に帰朝した妹子に続いて隋使・斐世清が来朝し、同年、妹子が再び入隋、留学生・学問僧が隨行していることであり、明らかに大陸の文化を積極的に受容することが意図されていると言える。

この点に符号するのが法隆寺の建立（607年）である（法隆寺金堂薬師如来光背銘）。前述のごとく、法隆寺は法隆学問寺として建立されたのであり、仏教の学問を推進するこ

の道場において、ここに新学問・新文化への歩みが力強く開始されたということができる。

留意すべきは、この前後、朝鮮半島との文化交流も続いていることである。百濟より僧觀勒が来朝して、暦本・天文地理書を献上し（602年）、初めて暦日を使用し「元嘉暦」を始めたこと（604年）。また、高句麗の僧彌徵が来朝して、紙・墨・絵具の製法を伝えている（610年）。

天文地理書が献上され暦日を使用して元嘉暦が始まられたというごときことは、当時、中央政府の体制が漸く整いつつあったことを示唆している。また、紙・墨・絵具（筆等）の製法が伝えられたことは、文書を記し文献を確定・普及させる上に大きな影響を及ぼしたであろう。前述のごとく、勝鬘・維摩・法華の三經典の義疏が僅か数年間にまとめられたこと（611～615年）は、文字通り「経巻」を制作するための物的条件が整備されてはじめて可能であったといえる。

しかし、三經義疏の制作が文字通り僅か数年間で実現されたとは考え難い。ここに義疏の制作の背景を考えたいのである。仏教の公伝以後、推古天皇期にいたる約半世紀の間に、法興寺（飛鳥寺）・四天王寺等の諸寺院の建立⁽¹⁾があり（588年、593年），半島からの帰化人が重用されて仏工・鍼盤博士・瓦博士・瓦工が活躍したこと、高句麗の学僧慧慈に聖德太子が師事したこと（595年）が記されて、寺院の建立、仏教の学問の準備がすすめられていた。名実ともに大和飛鳥の大地に仏教が根づきつつあった。

これは、義疏の制作についていえば、この時期すでに「勝鬘經」等の個々の經典の読解が積極的に開始され、数世代を一貫して継承されたに相違ない。筆者はここに經典の読解が「義疏的」に推進されたのではないかと考えるのである。義疏的とは、インドにおいて誕生し展開した大乗經典の漢訳文とその注釈文とに関わるのだが、經典の語句や文章の解説を内容とする注釈書によって經典を読解する場合、經典や注釈書はともに「仏教漢文」であるから、日本語に固有の文字が無かったこの時期において、たといどのよう日本語で理解したとしても、理解した成果は經典・注釈書双方に共通の「仏教漢文」のスタイルに依らなければならない。このようにして、当時すでに成立していた海外（大陸）の注釈書のスタイル⁽²⁾によって三經義疏がまとめられた理由を考えることができる。

筆者はこの場合、「公伝」を契機として經典・注釈書の仏教漢文を日本語的に読誦する工夫・努力が推進されたと考えたい。日本語的に読誦するとは、慧慈等の海外の学匠は經典・注釈書の教授に関して固有の漢訳語・漢訳文の方式を探ったであろうが、学匠に就学

する学生の人々は聖徳太子をはじめとして皆母国語である日本語に基づいて音訛し意訛しようと努めたことを意味する。このことは、明治以後、西洋の近代文化に学んだ日本が、ローマ字のアルファベットを主流とする西洋の諸国語を日本語に基づいて理解し日本語的音訛を生み出したことと対比してよろしいであろう。⁽³⁾

日本語固有の文字が存在しなかったこの時期、経典や注釈書の理解は、経典や注釈書の仏教漢語・漢文を用いて表現せざるを得なかった。ここに次の問題が生ずる。

一、仏教漢語の日本語的読みかた

二、仏教漢文の日本文的読みかた

上記の問題に関して、まず第一の問題は日本語の名詞とくに固有名詞の文字化ということであろう。「推古天皇」「聖徳太子」等、例をとり上げると、どこで区切りをつけるかの問題すら困難であるが、海外からの渡来者の名前、——「慧慈」「彌徵」などの日本語的受容からして、漢字の日本語的文字符化が試みられたであろう。同時に、「明日香（あすか）」「飛鳥（あすか）」など、同一の地名の表記に当たって、さまざまな漢字が当てられ、その結果、地名の表記において二種以上の「当て字」が許容されることになったのである。⁽⁴⁾

今日、仏教経典の読誦がいわゆる「漢音（かんおん）」と「呉音（ごおん）」との二種を伝えて、同一の経典の音読に二種あることが知られているが、これは、経典の読誦の伝承において少なくとも二種の系統を認めていたことを示すものであり、また、仏教漢語の日本語的読み方（かた）と同時に日本語的文字符化の成功を意味するものだと言うことができる。

経典の読誦は今日、漢音と呉音とのいずれも、総じていえば、仏教漢文もしくは仏教呉文の中国固有の読み方に準じている。一字・一句、上から下へ順序正しく、省略しないで音読するいき方からである。が、漢文（呉文）を構成する漢語（呉語）を中国式の読み方と別に日本語式に音読しつつ理解する場合、「文」を構成する語順において漢文と異なる日本文（和文）に基づいて、漢文（呉文）の日本（文）式（和文式）の読み方が工夫されていったと考えられる、「日本文」つまり和文は当時「口伝」つまり「話し言葉」であったけれども。

筆者はこの場合、いわゆる「漢文」の日本文式読み方が「返り点」「送り仮名」を付する、つまり「訓点」をもって整備されたことを想い、「返り点」や「送り仮名」の考案が「漢文」の日本文式読み方と日本の讀解ないし理解に資したと判断したい。経典を読むとは今日、

如是我聞（にょぜがもん、じょしがぶん）が普通であるが、訓点を付するときには、

如是我聞（かくのごとくわれ聞く）となる。

いわゆる「棒読み（ぼうよみ）」と「漢字・仮名の書きおろし」と、今日普通にいうこのような二種の読み方はいつ、どのようにして確定したのか。この問題は、さきの一、二の問題に関わるが、二種の読み方の紀元は、さかのぼって行けば、法隆学問寺における三經義疏の製作・完成の作業に辿りつくであろう。三經義疏の製作・完成はどのようにして可能となったのか。

史書によると、推古天皇・聖德太子撰政第十九年（611年）に「勝鬘經義疏」成る、とあり、これより後、隔年毎に他の二經疏、「維摩經義疏」「法華義疏」が製作されたと伝えている。この場合、注目すべきは、三經義疏がすべて聖德太子によって完成されたといわれていることである。これは、太子の真蹟本「法華義疏」の示唆する通り、三經義疏が聖德太子の指導によって出来たことを意味し、太子の割期的な業績だといってよいが、しかし、太子のみの製作というべきではなくて、その背景となったものを想うべきであろう。

恐らく仏教公伝の頃から「法隆学問寺」の先駆となるものがあつて、これを云わば「道場」として仏教の研鑽が開始されていたのではなかろうか。仏教公伝（538年）にさかのぼって見ると、この時期から推古期にいたるまで約五十年を隔てる。この期間の内外の情勢は誠に多事多難であったけれども、仏教の受容は崇仏派によって一貫して継続せられ、年次別に見ると、すでに触れたことであるが、次のような諸事蹟が注目される。

百濟聖明王が仏像を伝えた（538年）。

百濟が天皇のために丈六の仏像を作った（545年）。

百濟より医・易・曆等の博士が来朝した（554年）。

百濟、經論・僧・仏工を献上（577年）。

新羅が仏像を献上（579年）。

蘇我馬子が塔を大野丘北に起こす（585年）。

百濟が仏舍利・鍼盤博士・瓦博士・画工を献上（588年）。

法興寺着工（588年）。

半世紀余のこの時期、内外の多難な情況にかかわらず、半島からの仏教の渡來はかなり

積極的に容認せられたといえる。わけても医・暦等の専門家（諸博士）や仏工の技術者が渡来し、経論が献上されたことは、先進の大陸文化の伝播を意味し、經典・論書の学問が「寺院」等の専門の道場において開始されたことを推知させるのである。ここにまとめて考えられるのは次のことだ。

一、中国の古典（医書、暦書）や仏教の經論が〔朝鮮の〕学匠の指導のもとに読誦された。

二、読誦の最初は〔朝鮮〕の学匠に倣って前記の「棒読み式」であったが、漢文中の漢字は一字ずつ個別に日本語式読み方を工夫して行った。

三、漸次、「訓点式読み方」も工夫した。

一、二、三の各項を可能にするのは、現代から見て考えられる限り、当時の学生（学者、學習者）たちがすべて日本語で理解したことであって、このことは、程度の差はあっても、学生すべてが共通の母国語である「日本語」をもっていた、ということを意味する。共通の日本語をもっていなければ、協力して理解を共通にもつことはできない。(5)

それでは、当時の日本語はどのようなものであったか。日常の会話における話し言葉はとにかく、標準語となった日本語は確かに存在した。これは神代のいにしえから伝えられて「大和言葉（やまとことば）」の集成である「和歌（うた）」（「古事記」や「萬葉集」となった「原・古事記」「原・万葉集」の元手を意味する）からして推定することができる。

八雲たつ いづも八重垣 つまごみに

八重垣つくる その八重垣を

葦原の しけしき小屋（さや）に 菅畠

いや清（さや）敷きて わが二人寝し

上の二首の古歌は、須佐男之命と神武天皇とに帰せられているが、このような古歌の由緒はともかく、人類普遍の男女相愛を内容とするこのような古歌を生み育んだ背景を思うと、これは間違いなく日常会話の日本語の社会ないし伝統というべきものであったと考えられよう。

(1) 前記の注(1)（10～11ページ）参見。

(2) 三經義疏の成立した頃、海外においてそれぞれの義疏と並ぶ注釈書がすでに

存在していた。いまその代表的なものについていようと、勝鬘經義疏に対しては嘉祥大師吉藏の「勝鬘寶窟」がある。「寶窟」の該博な説明に対して「義疏」は簡明な説明を特徴とし、ときに独自の見解を入れている。「維摩經」には僧肇の「注維摩經（維摩詰所說經注）」があり、これを参照して著わされたのが「維摩經義疏」である。「義疏」はしかし、世俗の中に仏教の実践を活かす大乗菩薩としての維摩居士を主体的に明かしている。また「法華義疏」に対しては、すでに光宅寺法雲の「法華經義疏」があり、これを指南として「義疏」が著わされたことが知られているが、独自の見解を打ち出して「法華經」を讀じている。

- (3) この場合、問題は文字化しない時期の日本語の音韻体系はどのようなものであったかということである。萬葉仮名から案出された表音文字「仮名」の体系は、いわゆる五十音図から見ると、全体として大乗經典のサンスクリットの音韻体系に対応している。文字化以前の日本語の音韻体系の問題意識は、仮定ではあるがサンスクリットの音韻体系を受け入れ易かったのではなかろうか。
- (4) 今日、「あ・ア」「阿・亞」、「い・イ」「以・伊」、「う・ウ」「卯・宇」のごとく、仮名が漢字を借用して成立したことは明らかであるが、萬葉仮名の作成にいたるまで、また、萬葉仮名の後、仮名の定着にいたるまで、それぞれ幾世代を要したであろうか。萬葉仮名も仮名（五十音表文字）も、漢字漢文を踏まえて日本語と漢語との両音韻の対応と、これに基づく日本語の表音文字とを追求して生まれたものであり、かつ又、仏教漢〔訳〕語を交じえて、幾世代をかけて一貫して追求した結果であるという意味において、日本語の文字化は漢語と日本語と仏教語の三者の協同といった視点から評価さるべきものを示唆している。
- (5) 二重の読み方は、いうまでもなく、中国の古典や仏教の經典を理解するためには工夫した結果であり、その背景には「日本語」を駆使した日本人の、言葉に対する鋭い解剖学的分析力と、文章を構成するための優れた直観的総合力を認めてよいかも知れない。

ところで、海外から渡來した異国の文化に接したとき、文字をもたらぬこの国の社会はいわゆる漢文古典に対してどのように応じたであろうか。この問題を仏教公伝以前にさかの

ぱって見ると、かなりむずかしいことになるが、仏教公伝の頃とそれ以後に時期を限定すると、次のように考えられる。

- 一、海外渡来の学匠の指導を受けて日本語として読みこなす工夫を重ねた。
- 二、インド生まれの經論の翻訳スタイル（漢訳文）を中国古典との対比において理解し、仏教の主要語句、主要内容の享受につとめた。

仏教の公伝以前、はるかにさかのばれば、海外の文化の伝来は大体、五世紀頃からかなり頻繁になっていて、儒教・易・曆・医・天文・養蚕・機織・裁縫などが知られ、船山古墳（九州熊本県）から出土した太刀銘には「漢字」が記されている。また五世紀後半には、百濟より陶工・画工、呉国から織縫の工女、高句麗から皮革工が来て、陶器・絵・織物・皮革の製法が伝えられ、須恵器・馬具・金銀細工の製作が起こったことが知られている。さらに六世紀のはじめには、百濟より五経博士段楊爾を貢す（513年）、南梁の司馬達止が来朝し仏教信仰を伝えた（522年）、と書紀に伝えている。

これらの事蹟の推移は、文字の無かった日本語が文字をもつ異国の文化に接して新たな変容・展開の契機を迎えたこと、異国の文物に学んで、中国を宗家（総本家）とするもの、インド（印度・天竺）を宗家（総本家）とするもの、といった大陸文化の発祥の基本点に着眼するにいたったのではないかと推測させる。というのは、仏教が伝来すれば、仏教文献（漢訳經論）と中国古典（四書五経）との対比において上記の事柄（基本点）に注目するようになった筈だからである。このことは、仏教文献が中国固有のもの（漢字漢文）とインド固有のもの（〔大乗〕仏教）とをもっており、両者の総合において理解されるところから認められてよいと思う。

この場合、仏教文献はさきに示したように、漢字漢文による漢訳經論であり、漢訳經論は中国固有の古典とはスタイルを異にする。

仏説妙法蓮華經（薩達摩分陀利〔華〕修多羅）

如是我聞・一時仏住・王舍城・耆闍崛山中・与大比丘衆・万二千人俱・皆是阿羅漢

・・・・

このような漢訳經論のスタイルは「大學」等の中国固有のスタイルと対比すれば相違すること誠に明瞭である。さらに、内容から見て、仏教經論と中国古典はその考え方や考え方、いいかえると、思想の方法や内容において対照的に異なるものがある。聖人（聖者）の教えとして両者に共通するものをもつけれども、仏教經論は仏法僧の三宝をもって人間の理想的な生き方を過去未来現在の三世にわたって積極的にアピールしている。これに対して、

中国古典は人間一代の理想的現実的な生き方を追求している。

飛躍するようであるが、筆者はここに、当時の指導者たちが、日本のめざすべき人類普遍の文化の宗家に関して、新たにインドの教えに注目し期待するものがあったと判断したい。中国を宗家とする古典の教えとは別個に、新たにインド（天竺）の教えを「三宝（仏教）」に学び、「三宝」を伝えなければならない。これが、新文化の建設を図った当時の指導者たちの精神であったのではなかろうか。(1)

この点については、紙幅の都合上、要約メモにとどまるけれども、以下の事柄に留意したい。

- 一、三宝（仏教）を篤く敬うて（篤敬三宝）、和を貴ぶ（正法立国・立正安國）。
- 二、一は大乗經（「三經」等）の伝える仏教によって実現される。
- 三、「僧伽苑」（寺院）——「法隆學問寺」等を道場として「三宝」を学び、立国（安國）の礎（いしえ）とする。

上記の一、二、は十七条憲法、とくにその中の最初の三条の考察、三、は「大乗三經義疏」と聖徳太子の持言と伝える「世間虚偽・唯仏是真」（「上宮聖徳法王帝説」）の考察から、更に稿をすすめたいと思う。

(1) 尤も、「中国を宗家とし」また「インドを宗家とする」という場合、二宗家は史書によって前者がさき、後者があと、ということになるが、社会思想史・精神史から見ると、仏教漢文の伝える「大乗」の「帰依三宝」の精神が前者と相提携し、永くこの国（日本）のいき方（伝統）の根幹となってきた。これは速断のきらいを伴うが、排仏毀釈を経た明治以後一百二十年余にわたる文明開化の歩みをふり返って、改めて評価さるべきことでないかと思う。

〔山口 恵照(やまぐち えいしょう)先生 略歴紹介〕

(生年および学歴)

1918年4月 愛知県に生まれる。
1941年12月 京都大学文学部卒業。
1962年3月 文学博士（京都大学）号取得。
1968年3月～7月 文部省在外研究員として、アメリカ合衆国、ドイツ連邦共和国、
インド共和国へ出張。研究テーマ「近代インド学における古典哲学と仏教」

(職歴)

立命館大学予科教授、同文学部助教授を経て
1955年3月、大阪大学文学部助教授、1963年8月、同教授（インド哲学講座）。
1982年4月、大阪大学退職、同大学名誉教授。
1984年4月、東方学院講師。

(主要研究テーマ)

インドの哲学・宗教における諸体系と仏教。

(主要著書)

『サンキヤ哲学体系序説』（1964年、あぽろん社）。
『古代インドの宗教』（「アジア仏教史・インド篇Ⅰ」（1973年、校成出版社）（共著）。
『サンキヤ哲学体系の展開』（1974年、あぽろん社）。
『宗教的生涯教育』（1982年、あぽろん社）。
『ヨーガの知恵』（1987年、東方出版）。



インド現存の両界系密教美術

頬富本宏

(種智院大学教授・文学博士)

I. はじめに

わが国で花開いた真言・天台の両密教は、平安時代の初めに入唐した弘法大師空海（774～835年）と伝教大師最澄（767～822年）によって打ち立てられたことは周知されている。両大師は、いずれも中国において、中国人の阿闍梨から密教を授けられたのであるが、それらの中国人密教僧を1～2代遡ると、すぐにインドの阿闍梨まで至ってしまうことになる。たとえば、空海の場合、伝法灌頂を授かったのは、長安・青龍寺の惠果（746～805年）和尚であったが、その惠果は、混血のインド僧不空（Amoghavajra, 705～774年）の弟子であった。つまり、わが国の密教は、中国の密教の直接の影響を受けるのみならず、インドとも密接につながっているのである。

その証左の一つとして、わが国の密教の基本となっている金剛界・胎藏の両部曼荼羅の典拠となった『金剛頂經』と『大日經』という両部の大經に関わる密教遺品のうち、インドに現存しているものを紹介してゆきたいと思う。

II. 密教の時代区分

インド密教史の歴史的時代区分によると、それを、初期・中期・後期の3期に分類することができる。これらは、密教の母国インドにおける密教の展開を基本としたものであるが、あらゆる密教圏にも適応することができ、現代では最もスタンダードな分類法となっている。

詳しく述べると、初期密教とは、インドにおいて4世紀から6世紀にかけて成立した、陀羅尼を中心とする未体系な密教であり、わが国の分類でいう雑密に該当する。次に、中期密教とは、7世紀の頃に新しくインドで成立した『大日經』、『金剛頂經』などを基盤とする体系的な密教であり、唐代の中国を通して日本にもたらされたのは、この階梯の密教である。日本で重視する純密がこれにあたることはいうまでもない。

最後の後期密教とは、8世紀頃にインドで新たなタントリズムの展開とともに成立した密教で、俗にタントラ仏教と呼ばれている。この階梯の密教は、それまでほとんど取り上げられなかった性的行法や生理的行法をも大胆に導入しており、時としては左道密教の名のもとに激しく嫌悪される。このクラスの密教は、宋代の中国で漢訳されたものの、儒教的倫理観に支配された士大夫の国で受容されるはずはなかった。また、日本にも入宋僧の

成尋(じょうしん)などによってそれらの一部の漢訳が届けられているが、陽の目を見ることは遂になかったのである。

中期密教を代表する經典は、日本にもなじみの深い「大日經」と「金剛頂經」である。もっとも、インド・チベットで用いる4種のタントラ分類法によれば、「大日經」は、第2段階の行タントラ *Caryā-tantra* に、また「金剛頂經」は、第3段階にあたる瑜伽タントラ *Yoga-tantra* に配される。この階梯の相違が、後に「大日經」をして、「金剛頂經」流行の陰に隠れさせる一つの要因となるのである。

なお、日本の密教で日常よく読誦される「理趣經」は、チベットのマンダラ集などごく一部の例外を除いて、インドではその美術遺品を見いだすことはできないようである。

III. 「大日經」・胎藏曼荼羅系遺品

「大日經」と「金剛頂經」という両部の大經のうちで、時間的に一足早く成立したのは、間違いなく「大日經」である。「金剛頂經」と比較すると、その内容には、未だ大乗仏教の要素を残しており、いわば密教化の度合いが完全ではないといえる。

このような成立段階の相違、および「金剛頂經」をベースにして後世の無上瑜伽密教の大流行があったことなども起因して、インドには「大日經」・胎藏曼荼羅系の密教を示す美術遺品はまったく存在しないという判断が、これまで長い間尊重されてきた。けれども、故佐和隆研博士のオリッサ州調査を画期的な契機として、われわれ種智院大学のスタッフによる数回にわたるオリッサ州・ビハール州をはじめとするインド全域の密教遺跡・遺品の図像調査によって、相当数の「大日經」・胎藏曼荼羅系の資料を発見できたことは幸いであった。次に、それらの中心的なものを取り上げてゆきたい。

イ 胎藏大日如來像

「大日經」・胎藏曼荼羅系密教資料の中でも、やはり中心となるのは、本尊の大日如來である。日本の現図胎藏曼荼羅に現れる大日如來は、長髪で宝冠をいただき、瓊瑤を身につけたいわば莊嚴化された菩薩形である。両手は左手の掌の上に右手を重ね合わせるという禪定(法界定)印を結んでいる。この形が胎藏大日如來の基本形であるが、一方、別系統といわれる「胎藏圖像」に描かれる大日如來が、純然たる如來形とはいえないまでも、現図や「胎藏旧圖樣」系の大日如來のように、長髪の菩薩形ではなく、肉髻らしき姿をとる如來頭で、しかも衣のようなものをまとっていることは周く知られている。

胎藏系の大日如來の圖像については、チベット訳「大日經」の中に、

「菩薩の身体であるにもかかわらず、（如来の特色である）獅子座に坐したまわれて」とあるように、菩薩形の大日如来が意図されていたと考えられるが、如来形の姿をとる大日如来像も、チベット、韓国、日本などにかなりの例を見ることができる。

インドの胎藏系大日如来像は、これまで確実視されるものは発見されていなかったが、碑銘学や図像学の最新の成果を駆使した近時の調査によって数体の作例を発見することができた。しかも、その図像表現が、いわゆる菩薩形と如来形の二種に分かれる事実が確認されたことは特筆すべきである。

(1) 如来形胎藏大日如来像

オリッサ州カタック地区のラリタギリ Lalitagiri 遺跡は、近在するラトナギリ Ratnagiri、ウダヤギリ Udayagiri の両遺跡とともに、古来「八つのギリ（小山）の仏教寺院」の伝承を伝えてきた。ラリタギリ遺跡は、十数年前にオリッサ州政府の考古局の手によって簡単な試掘が行なわれ、参道や奉獻塔群の跡が推定されていたが、中心となるべき大塔（ストゥーパ）や僧院の発掘はなされていなかった。しかし、1989年頃から、部分的な発掘が始まり、奉獻塔などが相当数出土している。

ところで、地表に遺存して村人の手に保管されていた仏教尊像の数も相当量に達するため、インド中央政府考古局は、1959年、現地に簡易収蔵庫を設置して、同地出土の尊像の大部分を保管している。

それらの収蔵品のなかに、如来形の胎藏大日如来像が存在している（図1）。同像は、高さ110センチ、幅75センチの石板に高浮き彫りされた比較的小規模の石像である。石質は、オリッサ地方に多数出土する変成岩の一種であるコンダライト石である。

像容は、一面二臂で定印を結び、獅子座に坐している。また衣文の彫りの跡がほとんど認められないため、定印を結ぶことと相まって、これまで地元の学者の間では、ジャイナ教のジナ（勝者）像と考えられていたようである。何となれば、中世以降のジャイナ教像は、仏教図像の影響を受け、印相、台座、脇侍などが仏教の彫像とほとんど同軌であり、厳密な区別をつけ難い。

しかし、幸いなことに、われわれは、同像の光背の上部に彫られている胎藏大日如來の真言を見出すことができたのである。

同真言は、サンスクリット語で、書体はナーガリ一体に近いが、一部にはより古い書体の字も認められる。年代測定も容易ではないが、7世紀後半から8世紀にかけての年代と考えて大過なかろう。

図1 如来形胎藏大日如来像



これをローマ字化すると、

Namah̄ samanta-buddhānām̄ āh̄ vīra hūm̄ kham̄.
となる。

この真言は、日本で通説化している胎藏大日の真言である
「ノウマク・サンマンダボダナン・アビラウンケン」

Namah̄ samanta-buddhānām̄ a vi ra hūm̄ kham̄.

と大略一致するが、一部に微妙な違いが認められる。もっとも、日本に伝わっている漢訳資料でも、不空訳の「聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌」、訳者不明の「大日如來劍印」などでは、明らかに前者の系列の真言を伝えている。

筆者の推測によれば、大日如來の真言は、元来は「勇者=勝者 Vīra」に対する呼びかけを表した前者の系統であったが、「大日經疏」を著した一行や、その「大日經疏」を自己の教學の基礎文献とした空海などによって、むしろ五大・五字の教義として確立され、後の五輪塔の思想へと展開して行ったものと考えられる。それはともかく、ラリタギリの定印如來像に刻入されている真言が、胎藏大日如來のそれであることは、美術史のみならず、密教史上においても特筆すべきことである。

次に、図像的に見た場合に、同像の大きな特色は、頭部の髮髻冠にある。髮髻冠 jatā-mukuta が、胎藏大日如來の図像的特徴の一つであることは、漢訳、チベット訳のいずれよりも明白である。

けれども、厳密にいうならば、漢訳とチベット訳では、jatā-mukuta という複合詞に対する解釈が違っている。すなわち、漢訳の善無畏・一行訳の「大日經」卷二「入曼茶羅具縁真言品」では、

「髮髻を以って冠と為し」

とあることから、髪を高く結い上げた髪をもって冠と見做していたことがわかる。つまり、語学的にいえば、jatā-mukuta という複合詞を「冠のごとき髪髻を持つもの」として所有複合詞的に解釈したものといえる。漢訳の理解が、善無畏個人に起因するとすれば、善無畏系といわれる「胎藏図像」が如來の姿に近い大日如來を描いていることは、ごく当然といえる。

一方、現存するチベット訳の「大日經」では、

「髪髻と冠を有し」

として、髪髻と冠を並列複合詞と理解している。その結果、髪髻の上にさらに宝冠をいた

だくいわゆる菩薩形の大日如来が表現されることになるのである。

いま、ラリタギリ収蔵庫に保管されている胎藏大日如来は、以上の考察から総合して、如来形のタイプの胎藏大日如来であり、しかも『大日經』の漢訳者で、さらに「胎藏圖像」と関連付けられる善無畏が、同地オリッサの王朝（バウマカラ王朝か？）の王族と伝えられていることなどから判断して、東インドに、いわば善無畏系の如来形大日如来が遺存していることは、非常に意義深いといわねばならない。

(2) 菩薩形胎藏大日如来像

インドで見出されるもう一種の胎藏大日如来像は、わが国の現図曼荼羅のそれとまったく同様の姿をとる。すなわち、オリッサ州ラトナギリ遺跡の第四祠堂の本尊（図2）のように、二重蓮弁の台座の上に結跏趺坐して定印を結び、瓔珞、腕釤、臂釤を身につける。また、頭部については、中央部を高く結い上げ、さらに額のあたりにベルト状の宝冠を置いている。髪の一部を両肩にたなびかせている点もよく見慣れた像容である。

同像は、二重蓮弁の中央の個所で二つの石材に分かれているが、ともにコンダライト石である。脚部・胴体部とも前面に力強く高浮き彫りされている。背板の左辺上部を欠くが、そこには、右辺部と同様、如来の小像が浮き彫りされていたものと思われる。

身体部も、かなり磨滅の跡が見受けられるが、全体のモデリングも重厚で、量感を感じさせる。顔面にも損傷を受けているが、伏し目がちの容貌は、パーラ朝の美術につながるものと思われる。

ところで、この像の名称比定には問題がないわけではない。先の如来形の大日如来のように、確実な決め手となる尊名か、真言が刻まれているわけではない。ラトナギリ遺跡の発掘責任者であるD・ミトラ女史（元インド政府考古局長官）は、インドの図像テキストである『サーダナマーラー』を典拠として、同像を文殊の一種ヴァーク Vāk (別名ヴァジュララーガ Vajra-rāga) に比定する。確かに、同書で説かれるヴァークは、菩薩形文殊の姿で定印を結ぶ。しかしながら、部族仏の阿弥陀の化仏や孔雀の台座をとっていないなど、細部において一致しない点も少なくない。

加えて、問題とすべきは、同像を左右両側から脇侍のように取り囲む二体の尊像である。まず右辺は、ほぼ同寸法の金剛薩埵の高浮き彫り像である。同堂の三体の尊像の中では最も破損の度合いが激しく、腕部などはかき落とされたようになっている。だが、残された両腕の位置と持物（右手金剛杵、左手金剛鈴）から推して、金剛薩埵であることは疑いない。

図2 菩薩形胎藏大日如来像



左辺の尊像もほぼ同寸法の大きさで、三体がセットになっていたことを示している。この像は、左肩の上半部が欠失しているが、右手は未開敷蓮華をつまむ形をとる。また五仏宝冠をいただくが、その上部に定印の阿弥陀化仏を置いている。同像が、日本でいう聖観音であることは論を俟たないだろう。

このように、左右に聖観音と金剛薩埵を配する中央の尊格が、先述の像容から総合して胎藏大日如来の必然性が強いと考えるのは当然のことである。もちろん、日本現存の胎藏曼荼羅と対比すると、觀音院の中心である聖観音と金剛手院の代表である金剛薩埵の位置が逆である。けれども、筆者がこれまで折りに触れて論じてきたごとく、三尊形式における蓮華手・金剛手の位置は、初期においては非常に不安定であり、また後代でも、東インドを中心に、右辺に金剛薩埵（金剛手）を、左辺に聖観音（蓮華手）を配する三尊形式の例が残っている。

以上を要約すると、胎藏大日（中央）、金剛薩埵（右）、聖観音（左）を三方の壁面に安置するこの第四祠堂は、大日如来を本尊とする一種の立体胎藏曼荼羅を表していると考えることも不可能ではない。

なお、この三尊は、厳密には、金胎の融合した要素をそなえている。この点については、後に改めて論じたい。

IV. 「金剛頂經」・金剛界曼荼羅系密教美術

比較的資料の少ない「大日經」・胎藏曼荼羅系の密教美術に比べると、無上瑜伽密教の直接の基盤となった「金剛頂經」系密教の遺品は、その気になって探せば、現在のインドでも相当数の例を見出すことができる。

そのなかでも、やはり最も注意を払うべきは金剛界大日如来像である。金剛界大日如來の図像的多様性に関しては、日本、およびチベットのものを中心多くの先学により論じられているところである。筆者も、北西インドのラダック地方の作例に依りながら、チベット密教系の数種類の金剛界大日如來像を紹介したことがある。

この後知見したものを含めて、インド（ラダックを含む）の金剛界大日如來の図像的類型を分類すると、次のようになる。

<表1>

イ、智拳印大日如來

(1) 一面二臂 獅子座

- (2) 一面二臂 蓮華座
 - (3) 四面二臂 獅子座
- ロ、転法輪印大日如来
- (1) 一面二臂 獅子座
 - (2) 一面二臂 蓮華座
 - (3) 四面二臂 獅子座

このうち、後者の転法輪印をとる大日如来の成立には、未だ不明な点も多いが、「悪趣清淨軌」の影響を説く見解も提出されている。このタイプの大日如来は、インドでは、パーラ朝彫刻に数多い光背の五仏のなかの大日如来にその姿を見ることができる。チベット・ネパールでは、この種の大日如来が大部分を占めている。

中期密教として重要であるのは、智拳印の大日如来である。前表のように、これにも大別すると、一面二臂と四面二臂の二種がある。一部の大日如来が、なぜ四面を持つかということについては、すでに私見を述べたことがあるが、十一面觀音の成立と同様に、經典の原文に、

「すべてに顔を向けた」

という表現のあることから、周囲を取りかこむ四仏との関連上、四方に顔を持つ図像が成立したのであろう。周知のように、金剛智訣の「金剛頂瑜伽中略出念誦經」では、はっきりと四面大日如来を説いているし、秘仏ではあるが、高野山龍光院には木彫の四面大日如来像が伝えられている。

現在のところ、インドでは一面と四面の比率は同程度であって、四面大日如来としては、ナーランダー出土の金銅仏と、有名なラダック・アルチ寺の壁画金剛界曼荼羅をあげることができる。

前者は、像高約30センチの鍍金像で、現在ニューデリーの国立博物館に所蔵されている。がっしりした肩幅が独特の量感を強調している。四方に各一面を向け、智拳印の上部から金剛杵の先端部をのぞかせている。金剛界系密教の流行を示す優品である。ほかに、ナーランダー出土の石板像（上半身のみ）もある。なお、ラダックに関していえば、一面と四面の大日如来が混在している。地域によってどちらが優勢かという差違はあるが、日本と同様、両タイプの大日如来が混在していたと考えてよいだろう。

ほかに、北西インドのカシュミール地方からも智拳印を結んだ金剛界如来の金銅仏が出

土している。東インドのオリッサ地方では、最近発掘が開始されたウダヤギリ遺跡の僧院趾から最も大きな石造りの金剛界大日如来像が出土しているが、後述のように、同遺跡には金胎融合要素が認められる。

次に、台座についていえば、日本では現図曼茶羅に代表されるように、蓮華座が主流である。しかし、周知のごとく、獅子座をとる大日如来も、漢訳經典としては、金剛智訣の「金剛頂瑜伽中略出念誦經」、図像資料としては「五部心觀」「八十一尊曼茶羅」などにかなりの例を知ることができる。大日如来の獅子座を筆頭とする象・馬・孔雀・金翅鳥のいわゆる五獸座は、密教の文化史的視点から見て興味深い問題を多く内包しているが、ここでは触れない。

インドでは、チベット後伝期仏教の確立者リンチェン・サンボに因縁の深いラダック地方に五獸座が集中的に認められるが、オリッサ、ビハールなど他の地方では、獅子座とともに普通の蓮華座の大日如来も少なくない。先掲の国立博物館像は、典型的な獅子座である。「金剛頂經」系經典でも、金剛智訣を除いた不空訣、般若訣、施護(せご)訣がいずれも蓮華座を説いているように、当時のインドでも、やはり両様式が平行して行われていたと考えて大過ないと思う。

ハ、金剛界曼茶羅

古代インドの曼茶羅は、原則として地面に土壇を築き、その上に色粉で図形を描いたり、線描きするものであったという。それゆえ、曼茶羅を用いる護摩や灌頂の儀式が終了すると、曼茶羅は土壇とともに惜しげもなく壊される運命にあったのである。したがって、広義の曼茶羅を含めて、インドには曼茶羅はまったく遺存していないと通説化されてきたのである。

しかるに、われわれは昭和57年度の第3回インド密教遺跡調査で、象徵（三昧耶曼茶羅）、文字（法曼茶羅）、立体（羯磨曼茶羅）の三種の曼茶羅を発見するという幸運に巡り会えたのである。ここでそのすべてを詳細に論じることはできないので、金剛界の立体曼茶羅に限ってその概要を記しておきたい。

われわれは、オリッサ州のラトナギリ遺跡と、そこから北方約60キロの地点にあるジャジブル Jajpur（旧名ヴィラージュ Virāju）において、ほぼ同一寸法・同一様式の計6体の石像が存在していることに気付いた。ジャジブルは、8世紀から10世紀にかけて栄え、仏教を熱心に保護したバウマカラ王朝の首都であったが、同地の中央広場に安置されている石像の大部分は、今世紀の初頭ラトナギリ遺跡から移送されたものである。つま

り 6 体すべてが、ラトナギリ遺跡から出土したわけである。

これらは、いずれも高さ約 60 センチ、幅 40 センチの長方形の石板に尊像が高浮き彫りされており、一部には上辺部に鉄製のくさびを打ち込んだ形跡が残っている。6 体の図像内容は、

触地印如来像 3 体

定印如来像 3 体

に分かれている。

ところが、驚いたことには、6 体いずれもが、背板の左右両辺の上部に各 2 体ずつ、約 12 センチほどの小さな菩薩の坐像が計 4 体、浅く彫り起こされているのである。小像であり、しかも部分的に相当磨滅しているものもあって、最初は単なる供養者像と思っていたが、詳細に調査すると、むしろ金剛界曼荼羅の諸尊が彫出されていることがわかった。

すなわち、触地印如来の背面に表されているのは、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜という阿閦如来の四親近(しんごん)菩薩であり、また定印如来の場合は、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語の阿弥陀如来の四親近菩薩に囲繞されているのである。いうまでもなく、これらの計 8 尊は金剛界十六大菩薩のうちの半数にあたる。それゆえ、中尊である触地印如来と定印如來の両者が、おのおの阿閦如来と阿弥陀如来であることが証明されたといってよい。

つづいて、これらの諸像が仏塔の周囲に配された立体曼荼羅ではないかと推測する根拠は、以下のとおりである。6 体の石像がすべて同様の法量であり、しかもくさびを打ち込んだ形跡のあることも重要であるが、これとは別に、ラトナギリ遺跡の西方数キロにあるウダヤギリ遺跡の仏塔趾が無視できぬヒントとなる。

この仏塔の四方には、各一体の石像が安置されており、全体で一種の立体曼荼羅を形成している。ただし、その内容は、いわば金胎融合曼荼羅であり、後に取り上げたい。

また、ラトナギリの第一僧院趾の内庭に仮安置されている多数の石像遺品の中に、先に掲げた 6 体の石像と類似法量の女尊像があり、しかも背板に阿閦如来の四親近菩薩らしき小像が浮き彫りされていることに気付いた。もっとも、これらの小像は、中尊と同じく豊かな胸を誇示した女尊として表現されている。

中央の尊格は、右手の先を欠いている。だが、残存部の状況から推定して与願印を結んでいたことは確実である。この像は、おそらく阿閦如来の明妃(みょうひ)にあたる金剛波羅蜜女 Sattva-vajri であろう。印相といい、背後の阿閦の四親近といい、まずこの推測に問

題はなかろう。なお、中尊が女尊の場合、周囲の諸尊も故意に女性形として表することは、ラダックのアルチ寺三層堂の10例の金剛界曼荼羅を見ても納得のゆくところである。

上記の諸事実を踏まえた上で筆者の結論を述べると、東インドでは、仏塔の周囲、とくに四方に石板に高浮き彫りした金剛界四仏、さらには四波羅蜜菩薩を配していた。四仏の背後には四親近菩薩を表すので、いわば小円輪（五智輪ごりん）の世界を一体の石像で示すことになる。このように仏塔の周囲に四仏像を配することは、5世紀の頃からサーンチー第一塔、つづいてマディヤプラデーシュ州のギャラスプル Gyaraspur大塔などにその遺例を知ることができる。また新しい例では、ネパールに多数存在している仏塔の四仏龕、五仏龕からも首肯できる。

本論から少し外れるが、チベット曼荼羅の図像から知られる構造的特色は、はっきりとストゥーパの要素を認めている。曼荼羅の基本的著作であるブッダグヒヤ Buddhaguhyaの『ダルママンダラ・ストラ』 Dharmamandala-sūtra にも、その点を詳しく説いている。

したがって、種々の要素を彼此総合すると、レンガ造りの仏塔の周囲に金剛界諸尊の石像を配列して、全体で一つの壮大な曼荼羅世界を現出していたと考えられるのである。

ニ、金剛薩埵五尊曼荼羅

『金剛頂經』・金剛界曼荼羅系の密教美術の一つとして、金剛薩埵を中心とした五尊曼荼羅を紹介しておきたい。

特定の経軌に依拠したものではないが、金剛薩埵を中心に、その周囲四隅に4体の金剛界系の尊格を配した一種の石造立体曼荼羅が2体遺存している。

(1)ナーランダー出土金剛薩埵五尊曼荼羅（ナーランダー考古博物館蔵）

(2)ビハール出土金剛薩埵五尊曼荼羅（アメリカ個人蔵）

これらは、いずれもビハール州から出土した石像である。石質と微妙な様式には、両者の間に多少の差異が認められるが、いずれも金剛杵を立て持ち（右手）、金剛輪を膝上に横たえて（左手）、円錐形の宝冠をかぶって、半跏趺坐する金剛薩埵を中央にひとときわ大きく彫出している。そして同一石板の四隅に左下から順に、金剛嬉、金剛鬘、金剛歌、金剛舞という「内の四供養」菩薩を、儀軌の表現どおりに浮き彫りしている。

とくに、(2)の像（図3）では、金剛薩埵の台座部分に、三頭の象を彫出し、金剛薩埵が、金剛界の仏部・金剛部・宝部・法部（蓮華部）・羯磨部という五部のうち、金剛部にあたることを象徴している。

また、(1)の像では、四方に八葉の蓮華を浅く彫出している点が特徴的である。

図3 ビハール出土 金剛薩埵五尊曼茶羅



いずれにしても、これらも一種の金剛界曼荼羅の変形であり、インドでは、われわれの知っている曼荼羅とは少し異なった形式や構造の曼荼羅が制作されていたことは疑いないのである。

V. 金胎融合系遺品

先に、「大日經」・胎藏曼荼羅系密教と、「金剛頂經」・金剛界曼荼羅系密教との二つの系統に分けて、それぞれの遺品をインドに求めてきた。その結果、前者の系統の遺品は、東インドのオリッサ地方に集中しているが、より発達した「金剛頂經」・金剛界曼荼羅系の密教の遺品は、オリッサ・ビハールの東インドを中心に、北インドのカシュミールやエローラなどインドの広い地域に及んでいることが明らかとなった。

そこで次に、両系統の要素が融合した密教が存在している実例を紹介しておきたい。

ところで、これまでの密教史の考えでは、金剛界・胎藏という2系統の密教を一対、つまり一具のものとするという発想は、中国の陰陽思想などに起因するものであって、インドにはまったく存在していないと定説化してきた。事実、オリッサ地方の胎藏系密教の遺品がまったく知られていなかったので、これも止むを得ないことであった。

しかし、インドから中国へ密教を伝えた僧のうち、「大日經」の翻訳者である善無畏が金剛界曼荼羅の一種である「五部心觀」を撰述していたり、逆に「金剛頂經」系密教の大師である不空が、その代表的著作である「都部陀羅尼目」において、「瑜伽本經」(広義の「金剛頂經」)と「毘盧遮那成道經」(「大日經」)をともに説いていることを考慮すると、両者の系統の密教を融合した例がインドに遺存しているのは、むしろ当然というべきだったのである。

そこで、今回、その典型と思われるものを2例取り上げておきたい。

第1は、先に触れたオリッサ州・ラトナギリ遺跡の第四祠堂の3尊像である。これは、胎藏大日如来を中心として、右辺に金剛薩埵、左辺に聖觀音の3尊を配するものであり、いわば胎藏曼荼羅のエッセンスを表したものといえる。

ところで、胎藏曼荼羅そのものにも2～3の発達段階があるが、このラトナギリ第四祠堂の例は、いずれも「胎藏旧図様」系の図像と一致する。たとえば、右辺の金剛薩埵像は、右手に金剛杵、左手に金剛鈴を持っているが、これは「大日經」に直接説かれるものではなく、むしろ「金剛頂經」系の經軌や、釈タントラの一種である「金剛頂タントラ」に説かれる金剛薩埵の図像と同軌である。

左辺の聖観音の図像（左手で未開敷蓮華を持ち、左手でそれを聞く態にする）も、「初会金剛頂經」の説くところとよく符合する。要するに、ラトナギリ第四祠堂の胎藏三尊の像容は、基本的には『大日經』・胎藏曼茶羅系の3尊でありながら、後発の『金剛頂經』、およびその系統の密教の影響を顕著に受け入れて、結果として両者の要素が混じり合ったものとなっているのである。

第2は、先にも触れたように、オリッサ州のウダヤギリの仏塔の四方には、各方位に一体ずつのコンダライト石を高浮き彫りした如来像が安置されている。

これらは、いずれも高さが約180センチ、幅が約150センチの同軌格であり、四体一具であったことは疑いない。

そのうち、東・南・西の3像は、それぞれの印相（東方像・触地印、南方像・与願印、西方像・禪定印）から判断して、順に阿閦・宝生（図4）・阿弥陀の金剛界系3仏であることは明らかである。

ところが、北方の仏像が問題となる。この像は、法量が同規格であることと、観音・金剛手などの八大菩薩像が両脇に彫出されていることから、先の3尊と同一グループであることは否定できない。しかし、その像容は、螺髮頭を持った如来形ではなく、長髪を両肩に垂らせ、額の正面に頭飾宝冠をいただいている。首には、浮き彫りの胸飾りを表現している。

したがって、この像は、胎藏大日如来と推測することができ、その結果、ウダヤギリの仏塔は、阿閦・宝生・阿弥陀という金剛界の3仏と、残りの一方（北方）に胎藏大日を配した金胎融合の立体曼茶羅と考えることができる。

北方の胎藏大日如来像は、まったく同様の形式のものが近接するラトナギリ遺跡からも発見されている。

議論を元に戻して、なぜ北方にのみ胎藏大日如来を配したかを考えると、必ずしも決定的な理由を提示することはできない。

しかし、あえて一つの推論を提出すると、次のように考えることができるのでないだろうか。すなわち、ラトナギリ・ウダヤギリなどの僧院に代表されるオリッサ地方は、「大日經」が成立、もしくは流行した地方であり、最初は、「大日經」・胎藏曼茶羅系の密教が流布していた。以前に報告した如来形の胎藏大日如来像は、まさにその典型例である。

けれども、少し遅れて、インドでは、新たに「金剛頂經」・金剛界曼茶羅系の密教が隆

図4 南方の宝生如来像



盛し、オリッサでもその影響が浸透してきた。とくに、金剛界大日如来を中心とする金剛界五仏は、密教仏の首座に着き、それ以後の密教の座標軸となったのである。

もっとも、オリッサには、先行する『大日經』・胎藏曼荼羅系の密教が存在していたので、後続の『金剛頂經』・金剛界曼荼羅系の密教もそれを意識して、四方仏のなかで最も力の弱い北方の不空成就如来のところを意識的に胎藏大日如来にふりかえて、両者の融合をはかったのではないだろうか。

なお、『大日經』では、「入秘密曼荼羅位品」第十三品に宝幢・開敷華王・無量寿・天鼓雷音という四方四仏が説かれているが、重視されなかったようで、インド・チベットの胎藏曼荼羅では、これらの四仏を表すことはない。

VI. おわりに

以上のように、(1)『大日經』・胎藏曼荼羅、(2)『金剛頂經』・金剛界曼荼羅、(3)金胎融合という3つの項目に分けて、インドに現存する密教美術の遺品を取り上げてきた。

その結果、わが国の真言・天台の両密教の起源にあたるものの大半を、インドに見出すことができたのは幸いであった。とくに、オリッサとビハールの両州は、密教の中心地であったことは疑いない。

また、金胎の両要素の融合がオリッサ地方を中心に見られることは、日本の密教をよりインドに直結させたということができる。歴史上、数度にわたる法難や政変を経験して、わが国に直接関係を持つ資料をほとんど喪失してしまった中国に代って、インドはまさに密教の宝庫として、その伝統を今に伝えているのである。

〔頼富 本宏(よりとみ もとひろ)先生 略歴紹介〕

1945年4月 香川県に生まれる。

(学歴)

1968年3月 京都大学文学部仏教学科卒業

1973年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程修了

1988年3月 文学博士学位(京都大学)取得

(主要研究テーマ) 密教尊格史

サンスクリット語・チベット語などの文献資料と、現在もインドに遺存している仏像・仏画の美術考古資料とを総合的に検討することによって、大日如来や観音菩薩などの代表的な尊格の成立と発展を通して、仏教とくにそのなかでも特異な位置を占める密教の展開を考察。

(主要著書)

- 「密教仏の研究」 法藏館 平成2年
- 「中国密教の研究」 大東出版社 昭和54年
- 「庶民のほとけ」 日本放送出版協会 昭和59年
- 「空海」 筑摩書房 昭和63年
- 「密教とマンダラ」 日本放送出版協会 平成2年
- 「曼荼羅の鑑賞基礎知識」 至文堂 平成3年

(主要論文)

- 「無上瑜伽密教の神秘思想」 「日本佛教学会年報」 40
- 「ヴィクラマシーラ遺跡の現状」 「密教学研究」 14
- 「佛教パンテオノの構成」 「宗教研究」 276
- 「中インド・シルプル遺跡の佛教美術」 「佛教藝術」 191 など多数。

(現職)

- 種智院大学教授 同佛教学部長
- 真言宗京都学園理事
- 日本佛教学会理事
- 日本密教学会理事
- 密教图像学会常任委員
- 日本チベット学会委員
- 佛教史学会評議員



"See you again" instead of "Sayonara"

Dharam Vir Mohan

(Former Consul General of India to Western Japan)

When I arrived at Osaka Airport on 21st May 1987, it appeared to me more of a home-coming than coming to another foreign country. My subconscious mind was telling me that I had been here before. I had come to Japan only once before and stayed at Tokyo from 1 to 3 March '87. That brief official visit from Korea could not have produced such a strong impression. It must be the experience from my past life which was telling me 'You have been here'---'You have been here.'

During my over 36 years of service with the Government of India, of which 32 years were in the diplomatic service, I have had 6 assignments abroad of which three were in the glorious East---to Laos, to Korea and finally to Japan; two were in the Middle East---to Iran and Kuwait, and one to Belgium in Europe. In Japan I have mainly stayed in Kobe in Hyogo which is a miniature Japan itself. When I hand over my charge on 1 July 1991, I would have stayed a total of 1,500 days of my life in Kobe. Right from the days I was a child I have been fascinated by Japan. My impression of those days about Japan are associated with Japanese toys, especially the Japanese clay dolls which I had first seen in the house of a friend at Amritsar in Punjab. His family was in textile business at Kobe before the Second World War. The second and more vivid impression is of Persimmon which was grown in India at that time and a fruit which did not have an Indian name. It was called "Japanese Phal", meaning Japanese fruit. My memories of the Second World War are not associated so much with its horrors but more with the hospitality granted by Japan to one of our great freedom fighters, Netaji Subash Chandra Bose who with the help of Japan fought for the independence of India.

After my school graduation in 1947, I had an offer of a job from an Indian company which was doing textile business at Kobe. I preferred to join the University. Again during my first posting abroad to Laos I was planning to come to Kobe on mid-term leave---in May 1963---but had to go to India to marry according to the wishes of my grandmother whose world was like the world of God to me. In 1971~72 I joined the School of Foreign Languages in India to study the Japanese language, but what I studied I forgot because I did not get a chance, for 15 years, to come to Japan and to practise

1987年5月21日、初めて大阪空港に降り立った時、異国に来たというよりは故郷に帰ってきたような気がしました。心の奥底から「ここには、かつて来たことがある」という念が沸き起こって来たのです。同じ年の3月にほんの3日間だけ韓国から東京に来たことがあったのですが、そんな短期間の滞在の記憶がそれほど強烈な印象を生み出すはずはありません。私の過去の経験が「かつてここにいたことがあるだろう——そうだろう」と語りかけていたのです。

36年間インド政府機関に勤務しましたが、そのうち32年は外交官として中東のイラン、クウェート、ヨーロッパのベルギー、そして栄光あるアジアの3か国、ラオス、韓国、日本で勤務いたしました。今年の7月1日に退職するまで、日本の縮図とも云えるここ兵庫県神戸市で、私の生涯の1,500日も過ごしたことになります。

日本に魅かれ続けて

物心ついた頃から、私は日本に魅かれ続けてきました。当時の日本への思いは、日本製のおもちゃ、特にパンジャブのアムリツァールの友人宅で見た日本人形からきていました。更に、当時インドで栽培されていた“日本の果物（ジャパニーズ・フル）”とだけ呼ばれていた、名もない果物——それは柿だったのですが——の印象は、もっと鮮明なものでした。

第2次世界大戦に関する私の記憶は、その悲惨さよりはむしろ我らの偉大な自由解放の闘士、ネタージ・スバース・チャンドラ・ボースが日本の温かい理解と支援のもと、インド独立のために闘ったことに結びつきます。

1947年、高校を卒業したとき、神戸にあったインドの繊維会社より入社の誘いがあったのですが、大学に進学したいということで来日の夢は実現しませんでした。更に1963年の5月、最初の海外勤務地ラオスから休暇を利用して神戸に来る計画も立てたのですが、私にとっては神の存在に近い祖母の勧めで、結婚のためインドに戻らなければならず、結局はこれも実現しませんでした。

1971年から72年にかけて、インドで外国語専門学校に入り、日本語を勉強しました。もっとも、そこで学んだことは、その後15年間、日本に來ることも、日本語を話す機会もありませんでしたので、忘れてしまいました。その意味で、兵庫県国際交流協会主

my Japanese. I am thankful to the Hyogo International Association which gave me a chance to join its Japanese classes and to help me in reviving some words of the knowledge of the Japanese language which had lain dormant in my mind. Again I came geographically nearer to Japan in October 1985 when I was posted to Seoul and from where I made a brief trip to Tokyo in March 1987.

In Kobe I find an ethnic Indian atmosphere, especially in the Kitano-cho/Yamamoto-dori area where I have lived along with hundreds of Indian nationals whose forefathers were doing textile business at Kobe for many years. On my arrival in Kobe when I called on the ex-Mayor Mr. Tatuso Miyazaki, I was informed by him that many years back Indian businessmen lived and conducted their textile business from an area around the present City Office and that this area was popularly known as Bombay Town. I was very pleased to know this. The abundance of Indian restaurants like Gaylord, Gandhara, Maya, Ajmer and others has helped the preservation of an Indian atmosphere in Kobe which has more Indians than Tokyo, Yokohama, Iwakuni and Okinawa or other places in Japan which also have a concentration of Indian population.

I have travelled a lot throughout my jurisdiction which extends over 23 of the 47 prefectures in Japan but I have travelled more extensively in the Hyogo Prefecture which touches both the Japan Sea and the Pacific Ocean. I was lucky to have my residence near Suwayama Park which is on the foot of Mount Futatabi where I have been going for my morning walks for most of my period of stay here. I shall carry with me deep in my mind vivid impressions of my daily visits to the temple at Futatabi mountains, my rounds around the Futatabi Lake and on occasions my sitting with Japanese people at different restaurants on the route of my morning outings and taking Japanese-style breakfast with them. I have been visiting different shrines in Kobe city, starting with Ikuta Shrine on the New Year's Nights and on 1st January, 1988, had the rare glimpse of watching the sunrise from Futatabi Mountain and see the fantastic sight of the Sun coming up like a big diamond on the New Year morning. Unfortunately, because of cloudy weather this experience could not be repeated again. Another very strong image in my mind is that of the beautiful Himeji castle which is quite unique and impressive when compared to so many other Japanese castles. I will also remember my three visits to Takarazuka and

催の日本語講座に参加できて、本当に良かったと思います。それは私の心の底に眠っていました、いくばくかの単語や知識を呼び起こしてくれたからです。

1985年10月、ソールに配属され日本に近くなったことから、1987年3月の東京旅行がついに実現したのでした。

神戸での忘れられない思い出

神戸の街、特に北野町や山本通り界隈はインド民族独特の雰囲気が漂っています。そこには、先祖の代から神戸で繊維商を営んでいた何百というインド人が住んでいるからです。神戸に赴任し、前神戸市長の宮崎辰雄氏にお会いした際、現在の市庁舎あたりはかつてインド商人たちが住み、繊維業を営んでいたため「ポンペイ・タウン」として広く知られていたと伺い、たいへん嬉しく思ったものです。

ゲイロード、ガンダーラ、マヤ、アジメールといったインド料理店が店を連ねているのも、神戸にインドの雰囲気をかもし出す大きな要素となっています。また神戸のインド人の数も、インド人が多い東京・横浜・岩国・沖縄といった地域を凌いでいます。

日本の47都道府県のうち23以上を抱える私の管轄地区全体を、仕事が頻繁に廻りましたが、しかし何と云っても、日本海と太平洋の両方に面する兵庫県は隅々まで旅行しました。再度山のふもと、再度公園の近くに住むことができ、本当に幸運でした。神戸に滞在中、ほとんど毎朝あたりを散策しました。日課となっていた再度山中のお寺への参拝、池の散策、散歩道に点在する茶店で日本人の友達と囲んだ日本食の朝食。どれもこれも、私の心に深く刻まれ、生涯消えることはないでしょう。神戸の他の多くの寺も訪ねました。最初は生田神社で、1987年の大晦日から1988年の元旦まで参拝したのですが、再度山から初日の出を垣間見るというたぐい稀な体験をしました。大きなダイヤモンドのような太陽が上ってくる莊厳な光景を目にすることが出来たのでした。残念ながら、天候に恵まれず、これが最初で最後になってしまったが。

更に強く心に残っているのは、他のどのお城よりも堂々としている姫路城の雄姿です。その他、世界でも珍しい宝塚歌劇、緑したたる山々、海へとすぐにつながる地の利、いずれも忘れることができません。

to personally see the Takarazuka show which is unique in the world. Hyogo with its mountains, lush green forests and easy access to the sea will always be remembered by me for the rest of my life. I am very much impressed by the transport system whether it is train, subway, bus, car or taxi. The deepest impression that Japan is a country where speaking is not considered a virtue I got during my travel in public transport. When early in the morning I see Japanese children going in uniforms to their respective schools, the image of such children in India who also have to work very hard in their schools to get admission into prestigious institutes of higher education there comes to my mind immediately. Children are the same everywhere.

In India we believe in the past and in the future. We all know of our present and something about our past but nothing of our future. Some people with a little intuition can know something about their past lives and of their future. I can, therefore, claim that I was in Japan before and I shall come to this country again in the near future in my private capacity and help in further strengthening the century-old trade, cultural, religious and spiritual ties between our two sisterly countries.

I find that the slogan "Internationalization" is very popular in Japan, and different prefectural governments, city governments and others are vying with each other to excel each other in this area. It is all very good. However, I feel that in such a pursuit one should never forget one's past heritage and one's neighbours with whom one has had relationships and association for centuries, I mean, the countries in Asia. Asia has resources both material as well as human. The latter enables Asia to be a big consumer market. I, therefore, feel and advise the people of Hyogo Prefecture to give due importance to the countries of Asia while continuing their efforts for the internationalization of the beautiful Prefecture and preparing for the 21st century.

Finally I take this opportunity to thank President Kuwahara of Kwansai Indo-Japan Cultural Society, His Excellency Mr. Toshitami Kaihara, Governor of Hyogo Prefecture, Mr. Tatsuo Miyazaki, ex-Mayor of Kobe, His Worship Mr. Kazutoshi Sasayama, Mayor of Kobe, and all their officers and staff without whose help and assistance my stay in Japan would not have been that fruitful.

Sayonara with a promise to meet you again in the near future.

電車、地下鉄、バス、タクシー、どれをとっても兵庫県の交通機関は素晴らしいと思います。旅の途中、公共交通機関内でのお喋りはこの国ではあまり感心されるものではない、ということを感じました。早朝、制服姿で登校する子供たちを見るにつけ、同じように良い学校に入るために一所懸命に頑張っているインドの子供たちを思い出します。どの国にあっても子供たちは同じです。

日印の結びつきを更に固く

インドでは過去を重んじ、未来を尊びます。私たちのなかには直観で過去の人生を推し量り、未来の幾分かを予知できる人も存在します。ですから、私が前世からの結びつきさえ感じる日本に、近い将来に個人として再び訪れ、貿易・文化・宗教そして精神的な面で、日印両国の親善を更に固いものにすることに尽力したいと申し上げても、あながち不遜なことではないでしょう。

日本では「国際化」ということが大いに呼ばれています。あちらこちらの県や市などが先を越そうとしのぎを削っており、これはとても良いことだと思います。ただ、その目標を追うあまり、何世紀ものあいだつながりを保ってきたアジアの国々にをおろそかにされないように望んでおります。アジアには、人的資源はもとより天然資源も豊富です。人的資源はアジアを巨大な消費市場へと導くことでしょう。

それ故に兵庫県の皆さん、21世紀に備えて、この美しい県土の国際化を進められる一方で、アジア諸国的重要性も忘れないようお願いしたいと思います。

最後に、この場をお借りいたしまして、私の日本での滞在がこれほど実りあるものになったのは、敬愛してやまない桑原泰業関西日印文化協会会长および会員の皆さま方、貝原俊民兵庫県知事、宮崎辰雄前神戸市長、篠山幸俊神戸市長、そしてすべての関係職員の皆さまのご支援とご尽力のお蔭と心より御礼申し上げます。

さようなら。近い将来に再開することを約束してお別れの言葉とさせていただきます。

ガンジスの流れに

丸 山 勇
(日本写真家協会会員)

河川は地球の血管であるという人もいる。インドにとってガンジス河は血管のなかでも動脈に相当する河であろう。

ガンジス河の神話によると、その流れはアヨディヤの苦行するバギーラタ仙の要請により、神々が天界を流れるガンジス河とヒマラヤのガンゴトリィー山(7800メートル)に降下させているといわれ、その源は中腹に横たわるゴムク——牛の口の意(3892メートル)と呼ばれる巨大な氷河の氷穴から吹き出すように流れ出し、バギーラティ河として急峻な山肌を抉り、礫地を駆け下り、斜面に群生する色とりどりの美しい高山植物を搔き分け、黒々と山々を覆う森林地帯を通り抜け、山々に彫刻を施したような階段耕地を蛇行しながら急流となって南下し、シヴァ神を祀るケダルナートから流れるマンダキニ河、そしてインドで最も神聖な寺院の一つであるヴィシュヌ神を祀るパドリナートから流れるアルカナンダ河がバギーラティ河と合流する聖なるサンガム・デーヴープラヤーグでガンジス河とその名を変えて更に下降し、ヒマラヤ山系の丘陵地帯から平原に出たところに位置する海拔294メートルの神々の入口・ハリドワールまでの約360キロメートルを急流となって流れ落ちている。

怒濤のごとく下降したガンジス河は、ハリドワールで流れを東に転じて次第に川幅を広げながらその表情を一変させ、水音も消し去り、眠っているかのように静かに蕩々と流れ、アラハバードでヤムナ河と合流し、シヴァ神の本籍地といわれる聖地ベナレスを通過し、パトナでガンダク河の水流を呑み込みながら更に東進し、ベンガル湾口のサーガル島までの2500キロメートルを日夜絶え間なく流れ続けている。

紀元前10世紀ころ、インダス文明が栄えていたパンジャーブ地方からヒンドゥー教の聖典ヴェーダを成立させたアーリア人がガンジス河中流地域に移住して、先住民と文化の混淆を進めながら定住農耕文化を築いて以来、ガンジス河は3000年にわたってインドの人びとに豊かな恵みを与え続けているのである。

ガンジス河は広大な大地を潤し、万物を育み、重要な交通路となり、人びとにとては入浴や洗濯の場として日常生活から切り離せない生活の河である。

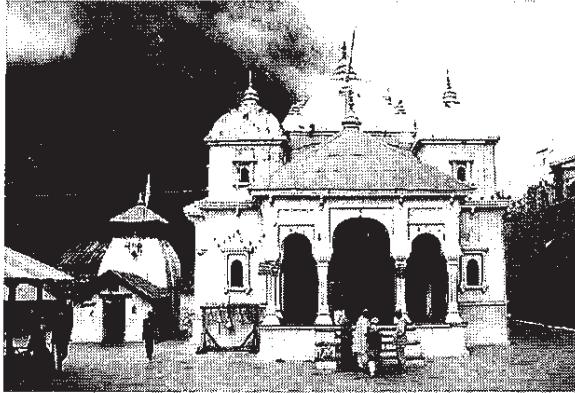
ヒンドゥー教徒は、聖なる河として流れのなかに身を沈め沐浴することによって罪を汚れも洗い清められると信じ、神聖な場所とされている河の合流点サンガムや寺院そして無数の神像に対して現世利益と来世転生を求める敬虔な祈りを捧げている。

また祭式を司るバラモンや出家したサドゥーたちも、ヒンドゥー教の根本思想である「梵我一如」すなわち宇宙の根元と人間の根元の完全な融合と解脱への道を求めて、都会の喧騒から逃れて森林やガンジス河の上流域といった静寂な地で修行し、求めに応じて信者や巡礼者たちに祭式を施し、真理を説いているのである。

ガンジス河は、インドの入びとにとって誕生してから涅槃に至るまでの生活の河であり、神々と合体するための祈りの河である。また、初沐浴、結婚そして葬送や先祖供養などの儀式には欠かせない河でもある。

3000年にわたる流れの間に展開されている伝統文化の表情をカメラで追い求めた。





平原から400キロメートル余りの道程をバスや車を駆つて辿り着いた巡礼者たちは、切り立った山々に囲まれたガンゴトリイー村に点在するアシュラム（僧院）のツーリストバンガローで疲れを癒し、ガンゴトリイー寺院に登頂の安全を祈願して20キロメートル上流のガンジス河の源のゴムクへと徒歩で向かう。



聖者の棲む町と呼ばれるリシケーシュを流れるガンジス河の両岸には、50のアシュラムと15のヨガセンターが林立し、およそ5000人のバラモンやサドゥーが修行を積み重ねている。ガンジス河の岸辺の岩の上で修行に励む行者。



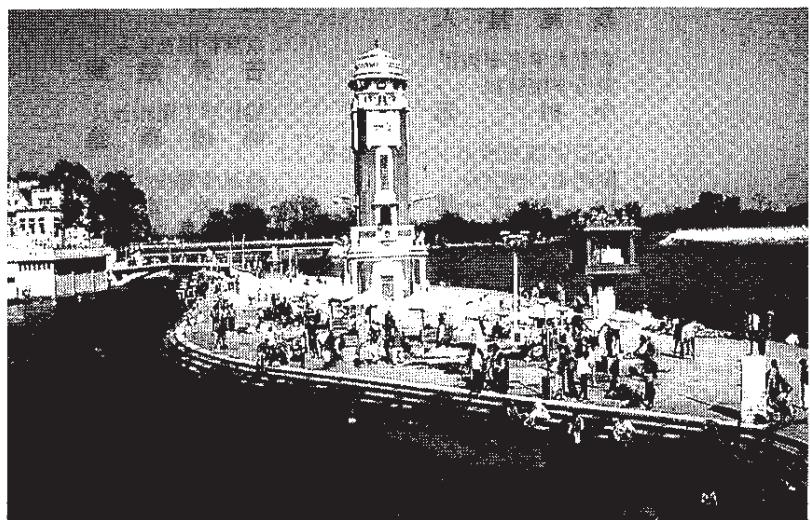
バラモンやサドゥーたち約1000人が修行しているウッタルカーシ村を流れるバギーラティ河の河畔に群居するアシュラム。



平原に出たガンジス河は、ハリドワールで東方に向きを転じ、その流れの表情を変えながら静かにゆったりと流れ、700キロメートル下流のアラハバードで、ガンゴトリーの西峰ヤムナトリーに源を発するヤムナ河と合流する。その合流点サンガムで沐浴し祈ることにより現世の罪も汚れも洗い清められると信じ、12年に一度催されるクンバの祭りに集う人びと。



ベナレスはシヴァ神の本籍地ともいわれ、シヴァ神を祀る町として重要な聖地となっている。ガートでは沐浴して身体を清め神々に祈る者、聖典を唱和する者、生まれたばかりの赤子を抱きかかえ初沐浴している者、来世転生を念じてこの地で死を待つ者など、ガンジス河の岸辺は日の出から日没まで賑わっている。



神々の源への門といわれるハリドワールの町は、100のアシュラムと10000人の修行者で賑わっている。ガンジス河の西側と中央に築かれたガート（沐浴場）には多くの信者が訪れて祈りを捧げている。

関西日印文化協会 役員名簿

1992年1月現在

名誉顧問

駐日インド大使
A.G. アスラニ
神戸インド総領事
S.K. パルマ
元外務大臣、衆議院議員
櫻内義雄
元外務次官、駐印大使
国策研究会会長
法眼晋作
大阪府知事
中川和雄
兵庫県知事
貝原俊民
奈良県知事
柿本善也
神戸市長
笹山幸俊
大阪市長
西尾正也
神戸商工会議所会頭
牧冬彦

顧問

京都大学名誉教授
神戸市立中央市民病院長
岡本道雄
京都大学名誉教授
日本学士院会員
長尾雅人
東京大学名誉教授
東方学院院長
中村元
大阪国際交流センター理事長
関西電力副会长
小林庄一郎
京都大学教授
矢野暢
大阪大学名誉教授
木村重信
慶應大学教授
神谷不二
前駐印大使
野田英二郎
前神戸大学学長
新野幸次郎
外交評論家
加瀬英明

会長

神戸ユネスコ協会会長
日本パラ文化協会会長
日本ネパール文化友好協会会長
桑原泰業

理事

九州産業大学教授
二木敏篇
徳自然美システム社長
萩原俊雄
国際ヨガ協会会長
松島茂雄
大阪外国语大学教授
溝上富夫
望月書道芸術院院長
望月美佐
聖徳太子会理事長
森修爾
名城大学教授
森本達雄
大阪大学名誉教授
山口憲照
種智院大学教授
山崎泰広
神戸デザインーズ協会副理事長
山田芳信
種智院大学教授
頼富本宏

監事

税理士、松岡薰税理事務所長
松岡 薰

税理士
松岡 靖惟

評議員

淨福寺住職
浅野正運

神戸商科大学名誉教授
神戸女子大学名誉教授
井上 善右衛門

神戸市仏教連合会顧問
大覚寺門跡
井上紀生

四宮神社宮司
大山裕史

インド舞踊家
小澤陽子

妙法寺住職
加門得勇

会長

理事

理事

監事

評議員

神戸女子薬科大学名誉学長 金子太郎	土井弘子ヨガ美容スクール主宰 土井照子	甲南大学教授 柳田侃
徳奥野工務店社長 河西喜代春	阿弥陀寺住職 土佐舜成	インド舞踊家 ヤクシニイ・矢沢
北野天満宮宮司 佐藤直邦	四天王寺国際仏教大学教授 西福寺副住職 豊原大成	甲南大学教授 山根芳知
インド舞踊家 桜井暁美	佳生流家元 西村雲華	横山整骨院院長 横山修
播州成田山(法輪寺)住職 笹倉明徳	俳人、神戸商工会議所参与 秦志郎	禅昌寺住職 横山正賢
熊内八幡宮宮司 杉村伸	徳神戸ヒラコ地所社長 比良竜虎	京都大学人文科学研究所 助教授 田中雅一
追手門学院大教授 村主恵快	地唄舞師範 大和尚蒔	(株)ランド・リサーチ 社長 相宅莞爾
神戸大学名誉教授 神戸女子大学副学長 高橋省巳	アショカ・ツアーハン 水野梅秀	
シンエー・フーズ徳会長 田中教仁	仏足跡研究所主宰 森貞雄	

日印文化
創立33周年記念研究論集

平成3年12月1日発行
発行所 関西日印文化協会
事務所 神戸市北区鈴蘭台東町9丁目7番26号
電話 078-591-5633
ファックス 078-593-8857

編集発行人
桑原泰業
印刷所 共栄印刷有限会社
神戸市中央区花隈町22番6号
電話 078-341-0316

しっかり、マイペース



SAKURA CARD

さくらカード株式会社

本社/〒103 東京都中央区日本橋室町1丁目8番12号 TEL.(03)3663-3331
関西本社/〒650 神戸市中央区京町4番地 TEL.(078)331-3451



株式
会社

コンピュータの
ケーシーエス

本社 〒650 神戸市中央区浪花町27番地 TEL(078)391-6571

東京本社 〒103 東京都中央区日本橋室町4-1-5 TEL(03)3241-3991

不動産の売買、賃貸借の情報は、ぜひ当社へ
ご一報願います。

京阪神興業株式会社

本社 神戸市中央区浪花町15番地

電話078(321)4311 FAX078(321)4315

東京・大阪・姫路・小倉

石油・石炭・液化ガス

正興産業株式会社

取締役社長 秋田博正

〒650 神戸市中央区海岸通6番地建隆ビルII

TEL(078)332-3301

東京・仙台・鹿島

CONVENTION CITY KOBE-JAPAN



神戸コンベンションセンター

神戸でのコンベンションを成功させるために一
神戸開催のお手伝いをします。

神戸市コンベンション推進事業本部

〒650 神戸市中央区港島中町6丁目9番地の1
神戸国際会議場内 TEL(078)303-0090
FAX(078)302-6485
(財)神戸国際交流協会コンベンション事業部



音楽がある。仲間がいる。
財団法人民主音楽協会



■関西事務局
〒543 大阪市天王寺区真田山町4-1 ☎06(768)3632

- 神戸サービスセンター
〒651 神戸市中央区御幸通り8-1-6 神戸国際会館3F
☎078(251)7447
- 京都サービスセンター
〒602 京都市上京区丸太町通堀川西入ル
京都二条ハイツ岡忠ビル2F ☎075(821)3165

神戸文化情報誌

KOBE C 情報 美術/音楽/演劇/催し 每月25日発行

神戸フィルハーモニック・神戸室内合奏団

神戸文化ホール ☎078-351-3535 北区民センター ☎078-593-1150
東灘文化センター ☎078-453-0151 須磨区民センター ☎078-735-7641
葺合文化センター ☎078-242-0414 北須磨文化センター ☎078-791-0840
生田文化会館 ☎078-382-0861 西区民センター ☎078-991-8321
丸山コミュニティセンター ☎078-642-3447



財団法人
神戸市民文化振興財団

〒650 神戸市中央区江戸町92 江戸町SKビル7F PHONE (078) 332-3320㈹ FAX (078) 332-6564

地域の皆さんに最新情報を

——講演(月1回)とニュースレターをお届けします——

神戸新聞情報文化懇話会

〒651 神戸市中央区雲井通7丁目1-1
(神戸新聞情報科学研究所内)
TEL 078(232)7814



この街の人と事業を最優先



尼崎信用金庫

本店 〒660 尼崎市開明町3丁目30番地
TEL 06(412)5411 (代表)

KONANZUKE

A FAMOUS JAPANESE PICKLES

OFFICE (078)841-0551 FAX 841-1490

神戸灘之名産 **甲南漬**

神戸市東灘区御影塚町3丁目9-16

高嶋酒類食品株式会社



京都市下京区四条通大宮東入唐津屋町五
三
電
話 (075) 841-1456
フックス (075) 841-1459

御菓子司
創業三百
年
君枝屋久兵衛

和三盆製(玄米粉入)

さ
か
八
路

ば
千
歳
子
特撰和三盆糖製

神戸・灘 菊正宗酒造株式会社

菊正宗

辛口ひとすじ



辛口の本格派
料理がいきる

Asahi
LIVE ASAHI FOR LIVE PEOPLE

この味が
ビールの流れを変えた。
アサヒスーパードライ



飲むほどにDRY
辛口、生。

アサヒビール株式会社

UCC上島珈琲株式会社

ucc Big
Coffee
Story
This is the UCC way of making coffee.



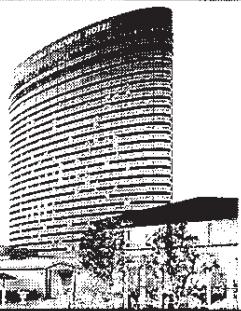
オリジナルブレンド
(200g)

一本の苗木を育てるところから、
私たちのコーヒーストーリーは始まります。

◎ヒガシマル

自然の色と味の 東 うすくち醤油です

*うすくち醤油発祥の地>兵庫県龍野市 ヒガシマル醤油株式会社



リゾート
未来が息づく理想都です。

ポートピアホテル

〒650 神戸市中央区港島中町6丁目10番地1
ご予約・お問い合わせは ㈹(078)302-1111
東京 ㈹(03)3574-6500 名古屋 ㈹(052)586-3333 大阪 ㈲(06)252-7200

レストラン

LaVague バー

神戸商工貿易センタービル(24階)
電話 (078) 251-1961



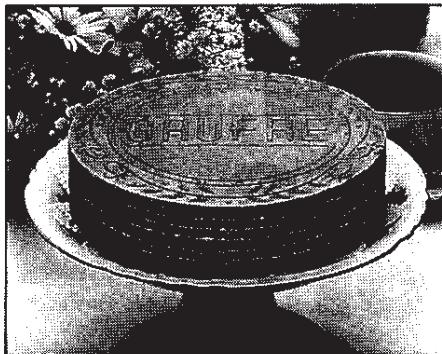
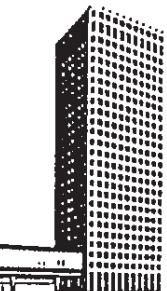
JR三宮駅前神戸新聞会館(7階)
電話 (078) 221-1616・3939

シンエーフーズ株式会社

〒651 神戸市中央区浜町通5丁目1-14 神戸商工貿易センタービル18F TEL 078 261-1541(代表)

パーティーに
お食事に
神戸を見晴らす

ご結婚披露宴 各種パーティー
催し物はお気軽にご相談下さい



いいものは時代をこえて生き続けます

ゴーフル



神戸の味を世界の味に創りあげたゴーフル。
神戸鳳月堂の歩みとともに生まれ育った味覚
の芸術品です。ほろほろ軽い2枚の洋風せん
べいご、バニラ、ストロベリー、チョコレートのクリ
ームをサンドしたさわやかな風味は、ひろく愛
されています。

神戸鳳月堂
本社 神戸市中央区元町通3丁目3-10 ㈹(078)321-5555



甘納豆
岡女堂

●創業安政2年、
130年の伝統が生きる…
厚生大臣賞受賞 名菓 甘納豆

本社 〒652 神戸市兵庫区福原町1-3 TEL 078(575)5533-FAX 078(575)7940
北海道本別工場 〒089-33 北海道川上郡本別町本別16-8 TEL 01562(2)5981~2-FAX 01562(2)5983

★大自然に恵まれた十勝生まれの
男爵いもと豆との新しいハーモニー。

大へんナチュラル&ヘルシー
なお豆です!!

豆男爵
DAIMYO DANSHAKU



④ 大関株式会社



山田錦

純米
醸造酒

日本一の酒米
山田錦から
芳醇辛口の名酒、
「純米酒」を醸す。



衣・食・住・エレクトロニクス――

暮らしの いろんな分野にサムシングをとどけたい。



総合商社とエレクトロニクスメーカー

神栄株式会社

〒651-01 神戸市中央区京町77番地の1
TEL. (078) 392-6800

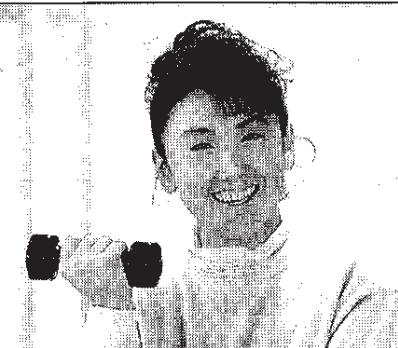


神栄石野証券

本店/〒650 神戸市中央区浪花町27番地
☎078(391)0001代

関西地区12店舗 関東地区10店舗

ちづるの力こぶ。



東
ちづる

PHOTO STUDIO YAMAMOTO

- 人生のライフサイクルを記録、お宮参り、七五三、入学、卒業、成人式、見合、結婚式、叙勲、証明写真等○ロケーションポートレート…すてきな場所で貴女のチャーミングをキャッチ○アルバム企画制作
- 出張写真○生田神社会館結婚式場御指定

株式会社 山本写真館 生田神社すぐ前
☎(078) 331-4254代)

生田の森から未来へ一厳かに信愛の紳結びます。

●結婚式・披露宴・各種宴会・ご集会に!

縁結びの神
生田神社

生田神社会館

IKUTA JINJYA KAIKAN

市営地下鉄三宮駅西出口山側 TEL(078) 391-8765

結婚式・地鎮祭・その他・神事全般

よの みや
四 宮 神 社
一弁 財 天一

兵庫県序前

神戸市中央区中山手通5-2-13 電話 (382) 0438番

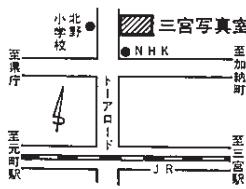
池上徹法律事務所

〒650 神戸市中央区橋通3丁目3番9号 岡野ビル
TEL(078)341-6487番 FAX(078)341-0760番

弁護士 池上 徹



アルバム作成 大学、短大、高校
ご婚礼写真、お見合写真(野外可)、肖像、証明、E.T.C(予約制)
神戸ポートピアホテル本館・ホテルサンガーデン姫路
兵庫県民会館・六甲荘・有馬グランドホテル・兵衛旅館向陽閣



三宮写真室

神戸市中央区中山手通2丁目24-8
TEL(078)241-5530代



書籍 文具 教材 電子計算機 眼鏡



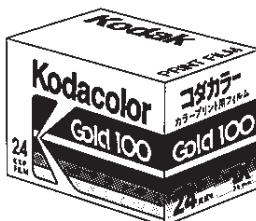
神戸支店

神戸市中央区元町通1 ☎(078)391-6001

姫路出張所

姫路市中二階町 27 ☎(0792)22-2313

コダカラ Gold100 フィルム



ヨヤマカメラ

レグルス文庫 マハーバーラタ

二十一年記念出版 生誕百年 夕ゴール著作集 全12巻

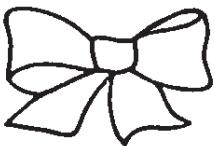
古代インドの
科学と技術
の歴史

比較思想から 見た仏教

インド伝統医学入門

東方出版

〒530 大阪市北区西天満3-2-4
☎06(365)5421 振替大阪4-20522

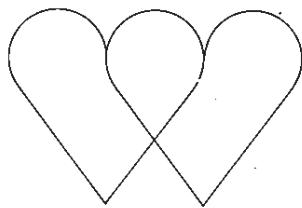


本店みどり美粧院 吉田美津枝

神戸ポートピアホテル店 神戸市中央区港島中町 078-302-1581
 ギャルソンヌ店 神戸市中央区北長狭通1-10-5 078-331-1243
 そごう店 三ノ宮そごう新館 8F 078-331-1245
 名谷店 須磨区中落合2丁目2番3号 078-791-8123
 須磨パティオ2番館
 県民会館 県民会館B1 078-331-1286
 学園都市店 学園西町キャンパススクエア1F 078-793-2344
 西神そごう店 西神そごう4F 078-992-1538

本店 神戸市中央区北長狭通1丁目10番5号
 電話 334-1071
 フックス 331-1226

晴れの日のお支度に……



伝統の和装から、世界一流ブランドの洋装まで、
 豊富にコレクションいたしております。

大丸前 つゝや衣裳店

〒650 神戸市中央区三宮町3丁目1-9 078-321-0360(代)

神戸ポートピアホテル衣裳室	078-302-3378
ピアンカスボーザ	078-302-1051
シューリエ	078-382-0160
構公会館衣裳室	078-321-2131
兵庫県民会館衣裳室	078-302-5555
ゴーフルポートピア88	078-221-8051
国際会館宴会場衣裳室	078-262-2908
新神戸オリエンタルホテル衣裳室	
アソルティ	

貴女の個性を生かした
 素晴らしいスタイル!!
 着心地の良さ!!

〈婦人服地・お仕立〉

洋装店 **すすきの**

【鈴蘭台店】 神戸市北区鈴蘭台北町1丁目10-2
 (定休日 木曜日) (鈴蘭台プラザ2F)

TEL (078) 592-3909

【学校店】 神戸女子洋裁専門学校隣り
 (定休日 日曜日) TEL (078) 652-0620

紳士靴製造販売



メンズファッション **ロー**

653 神戸市長田区日吉町2丁目1番21号
 シンエイビル5階

TEL (078) 642-1155(代)

* FAX (078) 611-2626



未来に輝く
PEARL CITY

株式会社 神戸ヒラコ地所

神戸市中央区港島中町7-5-1 〒650 ☎(078)302-1265代 FAX(078)302-1076
東京都台東区上野4丁目1-18 〒110 ☎(03)3847-2321代 FAX(03)3842-6959

老化を防ぐ 健康美容のトータルクリニック

自然健康美容センター

「眞の美容は健康から生まれる」という
理念のもとに心と体のトータルな
健康美を追求する自然健康美容システム。
四千年の歴史を誇る東洋医学をベースに
髪と肌のトラブルに取組み、毛髪分析から
外治・内治・心理・体操など
漢方美髪・美肌施法をトータルに行なっています。

髪と肌の救急電話 03-3256-0891



自然健康美容クリニック

お申し込み ご予約は

東京都千代田区鍛冶町1-9-2

営業時間 AM10:00～PM7:30 日祭日休

03-3254-7281

大阪市西淀川区西中島5-6-13

営業時間 AM10:00～PM7:00 月曜・第3日曜休

06-390-7291

ライフ・クリエーション

個性美学研究会



日本尚美会 会長 松原安治

日本個性美学研究所

〒501-61 岐阜県羽島郡笠松町西宮町1 TEL:05838(7) 3656

連絡先 尚美会グループ<全日本和装協会・国際ヨガ協会>総本部内
〒532 大阪市淀川区宮原4丁目4-50 真和ビル TEL:06(395)0550(大代)



Nakagawa



靴の中川屋

Kobe in JAPAN



しんかいち店 神戸市兵庫区新開地2丁目4-18 (毎週水曜日)

〒652 TEL. 078(575) 3612 (定休日)

さんちか店 神戸三宮さんちかカジュアルコート内 (第3水曜日)

〒650 TEL. 078(391)3744 (定休日)

OPEN YOUR BODY, MIND, & SPIRIT



国際ヨガ協会

〒532 大阪市淀川区宮原4丁目4-50 真和ビル TEL: 06(395)0550(大代)



土井弘子 総合ヨガ美容スクール

本部 神戸市中央区東町112 東町ビル406号室
TEL (078) 322-2664

坂口インドヨガ研修会

主宰 坂口曜子

〒532 大阪市淀川区十三本町3-6-3
レック淀川 1005
TEL (06) 303-7947

Who are you?

今あなたは本当の
あなたではない!!

あなたは { もつと健康なはず
もつと美しいはず
もつと強いはず
もつと楽しいはず



森垣ヨガ学院

院長 森垣繁

神戸市長田区北町2丁目
山陽長田ビル7F
高速長田駅下車駅ビル
TEL 078-577-5336

相馬達雄

(弁護士、大阪経済法科大学教授)

事務所：〒530 大阪市北区西天満4の1の1 北ビル1号館4F
電話 06-365-0601 ~3

自宅：〒662 兵庫県西宮市上甲東園1の16の20
電話 0798-51-3934

住生流華道家元
西村雲華

神戸市中央区野崎通3-3-21

TEL 078-221-6239

IKevana-Moribana of
CHIKŌ-SCHOOL

Headmistress: mrs. Kohbai Naruse
3-4, 2-chome Fukadacho, Nada-ku Kobe, 657
Tel.(078)851-8113

祝創立三〇周年

□業務内容／建築の企画・設計・監理



有限公司 アーキボックス 一級建築士事務所
〒651 神戸市中央区上高井通5丁目1番3号 神戸上高井郵便局ビル4F
☎(078)-221-4614

安心保障のアメリカンファミリースーパーがん保険 ゆとりの将来に／愛の介護年金プラン 痴呆介護保険

★お申し込み、お問い合わせは、下記代理店までどうぞ…!!

伊藤育興産株式会社(保険部) 神戸市中央区元町通2丁目7-6
フリーダイヤル 0120-15-2838 ヘイショウビル4F



インドブティック

ハヤシザリー

結婚式

シルクサリー

卒業式

パンジャビスーツ

謝恩会

アクセサリー

いろいろなパーティに
華やかなサリーを
おすすめします。

楽しいインドグッズが
沢山揃っています。
(サリー着付け、記念撮影します)

神戸市中央区中山手通2丁目15の13（山勝真珠前）
TEL (078) 221-2989 ^

バッヂ、優勝カップ、トロフィー、楯、旗、腕章、造花
Xマスデコレーション、プラスチック製品各種

株式会社 毛利マーク

650 神戸市中央区三宮町2丁目10-21
(三宮センター街2丁目)

TEL (078) 331-0874・7311
FAX (078) 332-4705

メガネの着替えは暮らしのマナー

メガネの愛眼®

商標登録番号第843854

本部 大阪市天王寺区大道4丁目9-12 TEL(06) 772-3383(代)

(北海道) (東北) (関東) (中部) (近畿) (中国) (四国) (九州)

宝石・貴金属輸入・研磨加工卸



宝塚市梅野町1番60号 宝塚ホテル内407号

TEL 宝塚(0797) 85-0511

TEL 宝塚(0797) 87-1151 (内線407)

Sano Trading Co.

5F, MOCHUKIBLD. 5-13-4 UENO

TAITO-KU TOKYO 110JAPAN

PHONE : (03)3836-0220

FAX (03)3836-0335

土地・建物・法人・各種登記

売買・相続・贈与他・測量・調査

司法書士 横山啓三
土地家屋調査士

〒657 神戸市灘区將軍通4丁目1-3 (灘区役所前バス停北向い)

TEL (078) 881-0080 (代表)

FAX (078) 881-2748

“最適環境空間の提供”

各種電気設備、計装制御設備、空調衛生設備
クリーンルーム設備等 総合設備の設計・施工



三宝電機株式会社

取締役社長 嘉納秀一

本社：〒530 大阪市北区西天満2丁目6番8号（堂ビル3階）
TEL 06(364)1471（代表）
FAX 06(364)5533



心と技術で明日を築く

楽しくゆとりある空間、夢を抱いて暮らせる街づくり

環境保全や地域活性化など、たえずトータルシステムで建設を考えます。

村本建設株式会社 代表取締役 村本豊嗣

奈良本店 〒635 奈良県北葛城郡広陵町安部547 TEL (0745)55-1151 FAX (0745)55-2871
大阪本社 〒543 大阪市天王寺区四天王寺1-5-43 TEL (06) 774-2111 FAX (06) 772-2123
東京本社 〒102 東京都千代田区二番町3-4 TEL (03)3238-2111 FAX (03)3238-2010



グローバルなセキュリティースピリットとは当社の誇りです。
イノベーション時代に対応するサイエンスセキュリティーを貴方へ！
総合安全管理業 SNSスーパー 環境衛生管理業
警備保障業 アラームシステム 防災設備事業
都市を守り、人を守る



新日本警備(株)

本社：神戸市中央区多聞通2丁目4番1号（中央ビル）
TEL 神戸 (078) 371-1586（代）
淡路営業所：兵庫県淡名郡淡名町志筑3112-32（伊達ビル）
TEL 淡名 (0799) 62-2052（代）

総合建設業
一級建築士事務所



兵庫建設株式会社

所在地：神戸市灘区灘南通2丁目1番3号 TEL (078)822-2551
FAX (078)801-5219

代表者：工藤昭二

創業 70 年



実績と信用

総合建設業

株式会社 神崎組

取締役社長 神崎 文一郎

本社 姫路市北条口3丁目22番地 電話(0792)23-2021(代表)
支店 東京、名古屋、大阪、神戸、九州



株式
会社

奥野工務店

OKUNO CONSTRUCTION CO.,LTD.

本社 神戸市中央区二宮町2丁目10番7号 扇都ビルディング

TEL 神戸(078)222-1462(代表)

FAX 神戸(078)221-4708

総合建設業



株式
会社

宮田組

代表取締役 宮田 禮 彰

番 652 神戸市兵庫区荒田町1丁目1-11 電話 神戸(078)511-5025(代表)

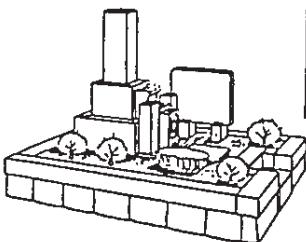
ファクシミリ C II・III (078)511-1865

墓地と墓石

神戸市石材業組合加盟店



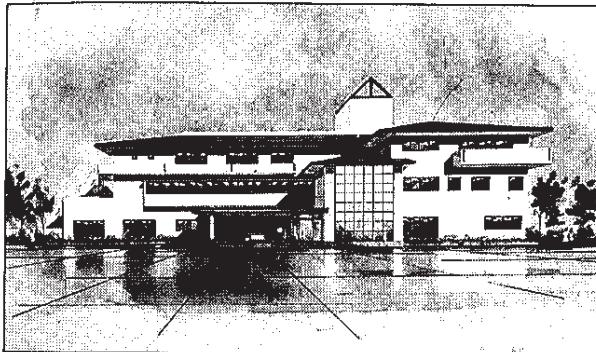
新神戸石材



営業種目—各宗墓碑・記念碑・石材工事・お納骨・法名彌入れ・修理
墓地申込手続き及び現地案内無料・やすらぎローン取扱い

神戸市兵庫区湊川町8丁目9-2

Tel(078)521-3169(代) FAX(078)521-3171



精神科・神経科・特例許可老人病棟・歯科

- 精神科作業療法
- 老人作業療法
- 訪問看護



明石土山病院

〒674 明石市魚住町清水2744番地の30
電話 078(942)1021(代)

緒方耳鼻咽喉科

緒方重郎

〒650 神戸市中央区中町通3丁目1番17号 TEL 341-3711



全国に、あなたの花が贈れます。
フジテレビフラワーシップ加盟店

有限会社

順 花 園

本店 〒650 神戸市中央区三宮町8-12

TEL 078-391-1098

FAX 078-391-7076

- オープン祝花・ブライダルブーケ
- 各種パーティ等出張アレンジメント
- 貸植木・造園
- 各流派稽古花
- ご供花

松岡税務税理士事務所

税理士 松 岡 薫

神戸市長田区長田町1-1-1-206

電話 691-7467番



お祝、仏事、会議、会合、クラス会等
のお食事の御用命は

お気軽に
お電話下さい。

中央区下山手通5丁目9-9
花隈駐車場上る
□ (341) 8624



仕出し料理店

花隈
中央区花隈町3-25
□341-2024、1148

会席料理
松花堂弁当
手まり弁当
幕の内弁当
うなぎ詰
折
オードブル

山菜料理

六段



電話神戸(078)231-0406
風味一番 ワシワ六段
JR三宮駅山側

オフィス・ファニチャーと学校教育機材

株式会社 神 港

代表取締役 櫻井正己

本社 〒652 神戸市兵庫区塙本通8丁目1番8号
電話 (078) 575-0725番(代表)
FAX (078) 575-0761番

潤いのある環境づくり

やさしい心大切に…



関西造園土木株式会社



株式会社 **兵庫開発コンサルタンツ**

技術を通して豊かな未来を！



=業務案内=

測量全般
土木設計
補償コンサルタント
施工管理

神戸市長田区西山町3丁目12番7号
電話(078)691-1304 番(代)〒653

代表取締役 植月重憲

家庭用神棚、会社、事務所用
神殿祭器具類一式販売
神戸で一番古い神具の総合メーカー

辰宮辰神具店

神戸市中央区北長狭通2丁目4番5号(大永ビル3F)
TEL (078)331-1305・1119 自宅 (078) 742-0257

京仏壇、仏具



朝に礼拝夕に感謝

センターブラザ (西館1、2F)
本社 あみだ堂 ☎ 331 { 1125
7878

支店 まんだらや ☎ 331-8616
三宮町3丁目(トア・ロード)

あみだ堂 川西店 ☎ 0727(57)5522
川西市栄町1番1号

「葬祭・寝台車・供花」 *創業 大正10年・遠近昼夜不問*

<送るこころ 送られるかたち>

株式会社 **オータニ徳風社**

代表取締役 大谷昌代
本社 神戸市長田区松野通1丁目11-12

鈴蘭台支店592-5485

電話神戸[078]621-0089

直営式場 オータニ会館

THE INDIAN COMMUNITY IN KANSAI

THE INDIAN CHAMBER OF COMMERCE—JAPAN
THE INDIAN SOCIAL SOCIETY
THE INDIA CLUB

IMPERIAL TRADING Co.,L LTD.

EXPORTERS & IMPORTERS

P . O . Box HIGASHI 301
Osaka , Japan

CABLE ADDRESS
“IKONKAR”
TELEX
J 64722 IKONKAR

TEL .(06)266-1176
(06)264-5738/9
FAX .(06)266-8644

With the Compliments
of
JUPITER INTERNATIONAL CORP.

PORT P . O . BOX NO. 572
KOBE-(JAPAN)

CABLE ADDRESS:
“JUPITERSTAR” KOBE
TELEX: J78609 NISCHAL
FAX: (078) 392-0988

TELEPHONE:
KOBE(078) 392-0987

MAGANLAL NAGINDAS & CO .,(JAPAN)LTD .
EXPORTERS IMPORTERS & MANUFACTURERS REP .

PRESIDENT
G . RAMANLAL

MANAGER
MAHESH H . JOSHI

EDOMACHI BLDG ., 528
98, EDOMACHI ,
CHUO-KU , KOBE , 650, JAPAN
PORT P . O . BOX 593, KOBE

CABLE “KAPALTEX” KOBE
TELEX NO . C/O J 78450 “KOBINBTH”
ATTN , KOB-107/MAGANL
FAX:(078)332-4863

TELEPHONE
OFFICE KOBE(078)332-4861
RESIDENCE(078)241-6060

GREETINGS FROM
M. NATHURMAL BROS.

PORt P.O. BOX 645,
KOBE, JAPAN

CABLE ADDRESS
"NATHURMAL" KOBE
TELEX
J78859 MONACAL

TEL: (078)232-1823/6
FAX: (078)232-0702

GREETINGS
ON
THIRTYTH ANIVERSARY
JAPAN INDIA CULTURAL SOCIETY
FROM
ORIENT PEARL CO., LTD.
S. R. CHODHRY FAMILY
KOBE

Precious Pearls Export Co.

Office: 1-18 Kitano-cho, 3-Chome Chuo-ku, Kobe.
Ramsions House 2nd Floor

Mail address: P. O. Box 979 Kobe Port, Kobe, 651-01 Japan

Tel:(078)222-6600

222-6611

231-6844

Cables: "PALLAVI", "FUSIRA" &
PEARLSBRIGHT" KOBE.

Telex: J78450 KOBINBTH
ATTN. KOB-338

Specialties

SOUTH SEAPEARLS, JEWELRIES & CARVINGS CORALS, PEARLS-CULTURED, CHINA
PEARLS, BIWAKO PEARLS, KESHIPEARLS, & MABEPEARLS.

WITH COMPLIMENTS
OF
UNIVERSAL PEARL CORPORATION
(Mr. L. D. JHAVERI)

2-8 KITANO-CHO, 3-CHOME, EVEREST, CHUO-KU
KOBE, JAPAN
T N. 231-2365

With the Compliments
of

ASIA SINJU BOEKI SHOKAI

(MR. P. D. CHOKSI)

PORT P. O. BOX 298

KOBE, JAPAN

CABLE ADDRESS: "ASIASINJU" KOBE
TELEX: J78501 ASIAPERL

TELEPHONE: 242-1141

WITH BEST COMPLIMNTS
FROM

Importers, Exporters and Manufacturers of :

PEARLS, PRECIOUS STONES, DIAMONDS
AND JEWELLERY ETC.

Saveena Pearls

YAMAMOTODORI, 2-CHOME 3-8, HAYAMA-HEIGHT 601, CHU-O-KU KOBE, JAPAN.
TEL: KOBE (078) 222-7026 FAX: (078) 222-7026

PRAFUL S. JAVERI

PARAS PEARLS

TEL.(078)231-6170 FAX(078)222-3393

IMPACT INTERNATIONAL

TRADE DIVISION

JAPAN, KOBE-SHI-651
CHUOKU, IKUTA-CHO 1-CHOME
1-33, SHIVA MANSION(3F)
TELEPHONE: 078-261-1991
TELEFAX : 078-261-1992



==== 植物性有機ゲルマニウム 靈芝 ===



ロイヤルヘルパー 難波保隆

〒658 神戸市東灘区本庄町2丁目4の11 ルアセン深江

TEL (078) 452-9381代

インド料理店 RAJA

ラジャ

神戸市中央区栄町通2丁目7-4 佐野連ビル地下

TEL 332-5253

営業時間 AM11:30~PM2:30
PM5:00~PM9:00

コース料理

2,700円 3,000円 3,300円 4,500円

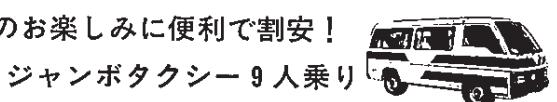
その他 一品料理

900円から

ランチタイムサービスもあります。

水曜定休日

ちょっとしたグループでお出かけのお楽しみに便利で割安！
いつ すく
何時でも早急に
☎ 577-3535



- ビジネスに…
- 観光はガイドの出来る乗務員が担当します
- 冠婚葬祭に…

サービスをモットーに 大開タクシーへ
本社・神戸市兵庫区水木通10丁目2番15号

農業及び家庭園芸肥料
輸出入、生産、販売

旭化学工業株式会社

大阪市東住吉区北田辺4-15-1

電話: 07457-4-1131

FAX: 07457-4-1961

TELEX: 0552466 ATONIK

24時間サービス 無料 でお求めの情報を提供します!



ロボットボイス・ファクシミリの使い方

まず、お電話ください！

電話インフォメーションセンター FAXインフォメーションセンター

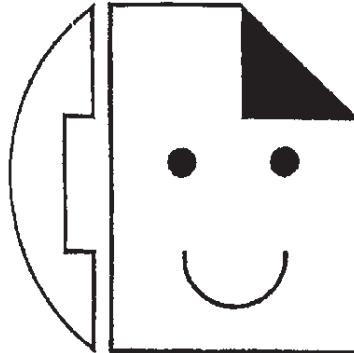
078-412-1000 06-886-9100



FAX:音声の指示で知りたい情報のBOX番号をプッシュ

〈ご利用いただぐ情報のBOX番号一例〉

- DIC情報システム案内…72-0303
- 求人情報………51-4510
- 不動産情報………46-0000
- 中古車情報………33-0940
- 明石天文科学館………41-0135
- 神戸国際会館………72-0300



ロボックス24

ロボット情報サービスのパイオニア



ROBOT INFORMATION CENTER

株式会社 ティック

★只今登録・PRのお申込み受付中！

お申込み・お問い合わせは FAX[078]451-1003

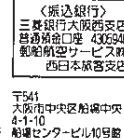
本 部／〒658 神戸市東灘区魚崎浜町27-21 TEL(078)412-0070・FAX(078)451-1003

**郵船航空
大阪
ツアーカウンター**
06-252-5744

●9:00～19:00・土曜15:00迄・日祝休



地下鉄御堂筋線本町駅上
船場センタービル10階1F



〒541
大阪市中央区船場中
央4-1-10
船場センタービル10号館

海外・国内ともに、主要ツアーガ1カ所に揃っている関西初の本格的ツアーカウンター
電話1本でお問合せご予約OK／ご入金も銀行振込でOK／最高に便利な郵船航空ツアーカウンターへ/
当社主催ダイヤモンドツアー・JLL（イル）・LOOKなど海外旅行／テニス・スキー・ゴルフ・ダイビングなどスポーツ
ツアーやマーチャー・車乗記念旅行・リゾート＆温泉旅行など……

三菱グループ・日本郵船系列輸送旅行会社運営大臣登録一般旅行東27号・JATA正会員

神戸ツアーカウンター
078-251-7611

●9:00～18:00・土曜13:00迄・日祝休



〒541
大阪市中央区八丁
堀4-2-17
郵便局前ビル

尼崎ツアーカウンター
06-428-2721

●9:00～18:00・土曜13:00迄・日祝休



〒551
尼崎市中区八幡通
6-2-17
郵便局前ビル

京都ツアーカウンター
075-252-5633

●9:00～18:00・土曜13:00迄・日祝休



〒570-0023
京都市中京区三条通丸
丸三本店
丸三アーバンビル

VAISHALI

株式会社バイシャリ ト ラベルズ ジャパン

〒141 東京都品川区西五反田5-4-5 ライオンズマンション西五反田NO.2・306号
TEL 03(3495)2829 FAX 03(3495)2890

Authentic Indian Cuisine



Gaylord

KOBE

SANNOMIYA

MEIJI SEIMEI BUILDING (Opposite City Hall's Flower Clock)
8-3-7, Isogami-dori, Chuo-ku, Kobe 651
Tel. (078) 251-4359, 7156

*

POR ISLAND
DAIEI PORT ISLAND SHOPPING CENTER
(Opposite Chuo Shimin Byoin)
3-2-6, Minatojima Nakamachi, Chuo-ku, Kobe 650
Tel. (078) 302-5728, 5729

ashoka

OSAKA

B201, OSAKA MARU BIRU
9-20, Umeda-1, Kita-ku, Osaka
Tel: (06) 346-0333

KYOTO

3F., SIKUSUI BIRU
Nakano-cho Teramachi
Shijo-agaru, Nakagyo-ku, Kyoto
Tel: (075) 241-1318

FUKUOKA

KBC BUILDING 9TH FLOOR
1-1, Nagahama 1-chome, Chuo-ku, Fukuoka 810
Tel. (092) 716-6633

FUKUOKA

6F, SOLARIA PLAZA BIRU
43-2, Tenjin 2-chome, Chuo-ku, Fukuoka 810
Tel: (092) 733-7609



姫路学院女子短期大学^{北隣}

神崎郡福崎町 TEL0790(22)2951

エドモンズ大学

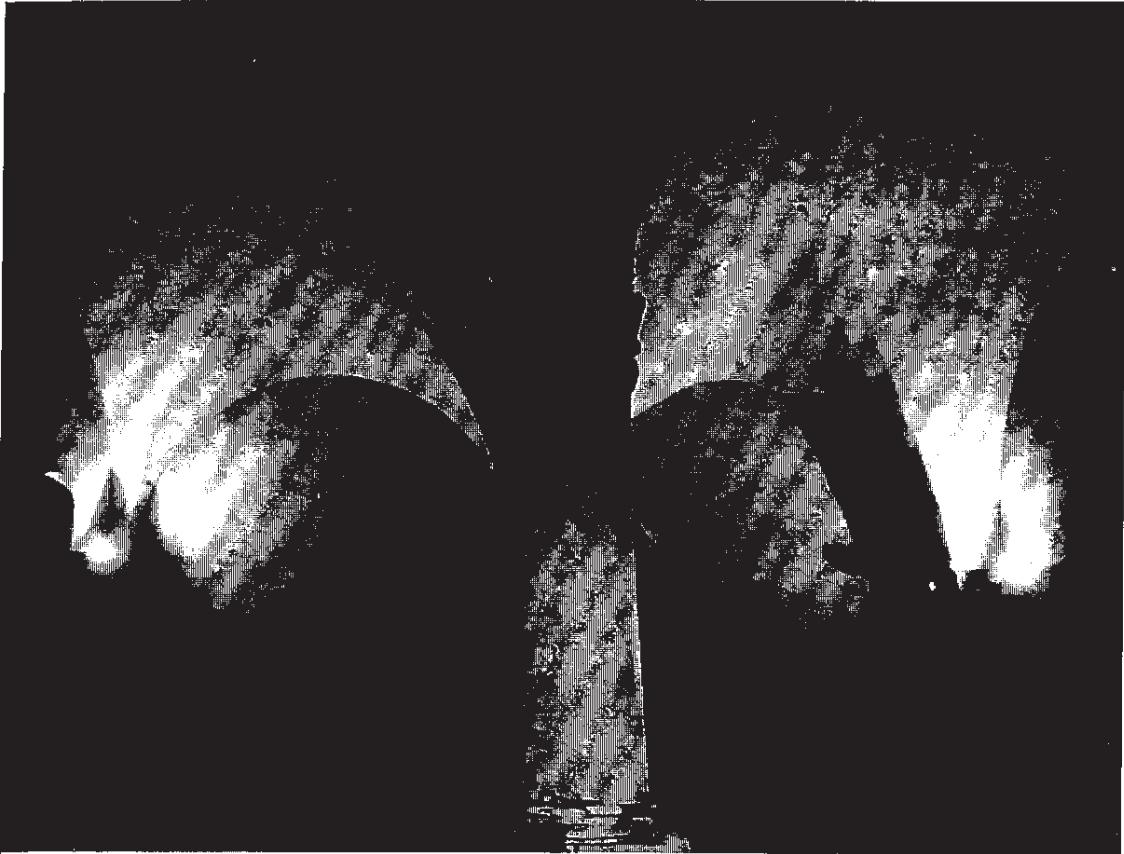
Edmonds Community College, Japan Campus

S.I.T.大学院 (英語教授法修士課程)
(School for International Training)

総長 溝田 弘利

[本部事務局] 〒653 神戸市長田区大橋町4丁目3番5号 ☎(078)631-0860

[キャンパス] 〒651-11 神戸市北区山田町小部字大脇山4-1 ☎(078)592-2020



永遠を支える力

柱

リュウ

立建設株式会社

RYU CONSTRUCTION CO.,LTD.

本 社 〒670 姫路市豊沢町135番地

大同生命ビル TEL(0792)23-3315代

本 店 〒670 姫路市広峰2丁目4番3号

TEL(0792)82-2861代

支 店 大阪、東京、神戸

PILLAR

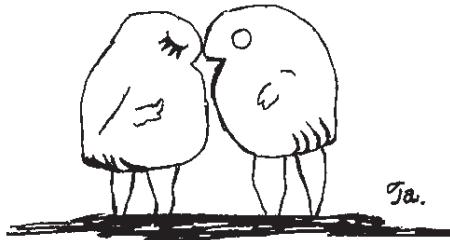
支えられるばかりで自分が何かを支えることのなかった時代が過ぎ去ろうとしている。私たちは今まで世界を支えてきた柱が朽ちていくのを感じ、また自分たちのうちに新しい力が生まれているのを感じる。今は世界を支える一本の柱となって世界の重みを感受するときだ。柱に加わる力とその角度によって、この世界の構造をつかみ、伝わって来る振動を通じて世界の動きをキャッチしよう。最大の重みにも耐えられるように、まっすぐに立たなければ。——確かな技術力で、明日の世界を支えます。立建設株式会社

私たちの製品は接するところからすべてが始まります。タイヤと路面、ゴルフのクラブとボール、もちろんテニスのラケットとボール。私たちの仕事はそれらの接点を見つめ新たな可能性を探りながらより安全に、より正確により快適性を実現していくことがあります。ダンロップは常に挑戦し続けます。

はずむこころ、カタチしなやか
住友ゴム工業株式会社
SUMITOMO RUBBER INDUSTRIES, LTD.
〒651 神戸市中央区商井町1丁目1番1号 ☎(078)231-4141㈹

接点は常に挑戦します。

 DUNLOP



Ta.



バンドー化学は、變ります。

BANDO バンドー化学 様式
会社

〈主要営業品目〉

- コンベヤベルト
- 軽搬送コンベヤベルト
(サンライン)
- 伝動ベルト
- エンジニアリングプラスチックス製品
(OA・精密・自動化機器用)
- 鉄道用ゴム資材
- 建築・土木用防水シート
- 建材用・医療用フィルム
- マーキングフィルム
- その他 ゴム・ポリウレタン各種工業用製品

本社事務所：神戸市中央区御幸通6丁目1番12号
〒651 ☎(078)232-2923(ビル電話)(三宮ビル東館)
本店/営業所：東京・大阪・名古屋・広島
工場：加古川・泉南・足利・和歌山

総合技術で未来をひらく三菱重工



三菱重工業株式会社 神戸造船所

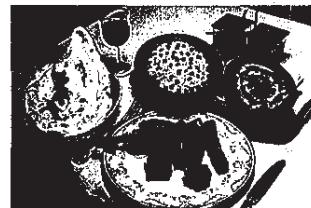
神戸市兵庫区和田岬町一丁目1番1号 〒652 ☎神戸(078)672-3111(大代表)

技術がつくる高度なふれあい SOCIO-TECH

三菱電機株式会社 神戸製作所
制御製作所

〒652 神戸市兵庫区和田岬町1丁目1番2号 TEL.652-2121(大代表)

"HOUSE OF EXOTIC INDIAN FOOD"



KANAYALAL BUILDING
4-8-4, KUMOCHI CHO,
CHUO-KU, KOBE, 651
TEL: (078)231-8092

• TIME 11:30~2:30
5:00~9:30